
ネギまと転生者

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまと転生者

【Nコード】

N0270U

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

ある青年は自宅に帰る途中で交通事故に遭って死んでしまった。しかし、それは、間違いだった。青年は神の手違いによって死んでしまったのである。手違いによって死んでしまった彼はお詫びに特殊な力を得て、転生した先は『魔法先生ネギま！』の世界だった。

【追記】 11/17日 17:00現在

ちよっとばかり、書き直しをしますので更新の方はお待ちください。

死んだらしいぞ・・・俺は（前書き）

俺は何やってんだ・・・こんなにポンポン生みだすから計画性が無いって言われるんだよ！

これはオリ主の戦闘力はチートと言う粋をぶつちぎりで超えている。

なんつーか、一人で国を滅ぼすほどの戦闘力？・・・たぶん。

あ、あと独自解釈が混じるので注意してください。

最後に極度の厨二病です。ヒヤッハー！！

死んだらしいぞ・・・俺は

俺は蒼騎あおき 真紅狼しんくろう 18歳だ。

学校が終わり、ゲーセンで格ゲーをやり満足したので、家に帰ろうとしたら、横断歩道に飛びだした小さな男の子が轢かれそうになったので助けようとした。だが、男の子は助けたが、自分は轢かれてしまった。

ドバァン・・・キキッー！

真紅狼「あー、ついてねえや。」

俺はトラックに撥ねられた時、そう呟きながら空中に舞った。すぐさま病院に搬送されたが、当たり前所が悪かったのかそのまま死んだ。

死んだらしいぞ・・・俺は（後書き）

はじめて、こんなに短いプロローグがかけた。

転生だってよ。(前書き)

次、設定です。

転生だつてよ。

「……い。」

なんだ、気持ちよく寝ているのに。

「……おい、起きんか。」

うるさいな。

「……起きんかー!!」

真紅狼「うおっ!？」

耳元で叫ばれた。俺を起こした人物は爺さんだった。

真紅狼「一体、なにしやが……る……?」

なんせその爺さんを見たとき頭の上に輪っかが付いていた。

真紅狼「爺さんだれ?」

「……ワシか?ワシは神じゃ。」

真紅狼「ふん、神ねえ……ん?神!？」

神「そうじゃぞ」

真紅狼「で、その神が何の御用で?」

神「お主、結構バツサリしてんの……」

真紅狼「だつてよ、死人の俺に用があるなんて、相当なもんだぞ?」

神「まあ、そうじゃな。まあよかるう、心して聞け。お主は本来ならあそこで死ぬはずではなかった。」

真紅狼「は?」

なに言つてんだこのジジイは。

神「あの場面ではお主は病院に搬送されても、かろうじて一命を取り留める筈だったんじやが、ワシの手違いで間違つて死なさせてしまったんじや。」

真紅狼「ハアアアアアアアアアア!？」

え、ちょ、ナニソレ?どういうこと?

神「ゴメン、間違っちゃった。テヘ」

しばらくお待ちください。

神だっとなにか「ずびばзенでした。」

真紅狼（修羅）「……で、まだ言うことがあるんだろ？」

神「う、うむ。神の手違いで死んでしまった者は転生させなければならんのじゃ――」

どこに向けて喋ってた？

真紅狼「じゃ、元の世界にか？」

神「いや、無理じゃ。死んでしまった以上同じ者がその世界に居ると混乱を招くからの。」

真紅狼「そうか……」

神「じゃが、違う世界なら大丈夫だぞ。」

真紅狼「どこが空いてるんだ？」

神「『魔法先生ネギま』という世界じゃ。」

真紅狼「あのマンガの？」

神「うむ。」

真紅狼「しょうがない。そこで頼む。」

神「わかったのじゃ、それならそうと力を授けよう。」

真紅狼「力？」

神「うむ。行く先は魔法が使える世界じゃからの。なんでもいいぞ。」

真紅狼「わかった。まず、ゲームである戦国BASARA2の武将の力と衣装、武器もだな。選択するのは元親、政宗、幸村、慶次、信長の五名だ。次に、BLUE CONTINUUM SHIFTのハザマ（ユウキ＝テルミ）かな。KOFで出ている、オ

ズワルドの力も欲しいな。カーネフェルカツコいいんだよね。あとは、鋼殻のレギオスで天剣受授者のレイフォンとリントンスの技だろ。鍊金鋼タイトと剋はアルシェイラと同じぐらいに。最後に紅の真九郎みたいに崩月の角が欲しい。体も崩月流に合せてくれ。」

神「結構出したの・・・しかし、ネギまの世界の魔法は使わないのか？」

真紅狼「ああ、知らない。代わりに、魔法防御力と抵抗力、障壁の強度を上げて欲しい。」

神「うむ。BASARA2の武器とレギオスの武器は？」

真紅狼「BASARA2は全員最終武器で、慶次だけは第七武器も頼む。レギオスはまずは鋼系だろ、もう一方の天剣は刀で。」

神「設定したぞ。あ、あとBASARA2の武将は属性があるからそれを元に吸収・半減・無効を設定しといたぞ。あと、武器は傷や折れたり、壊れたりしても自動で修復される。BASARA2の格武将の武器を小さくしたシルバーアクセサリを創った。そのどれかを選び、イメージしろ。そうすれば出てくる仕組みじゃ。」

真紅狼「おお、有難い。で、爺さん体に馴染ませたいから、しばらく場所を借りていいか？」

神「構わんど。ほれ。」

といい、杖を「コッソ！」と叩いたら、ドアが出現した。

六時間後・・・

真紅狼「ふー、大分動けるようになったな。じゃ、爺さんもう送っても構わないぞ？」

神「わかった。あ、一つ言い忘れたが、お主不老不死になつとるか。」

真紅狼「ハア!？」

神「ネギまの世界とここの世界が同じと思ったのか？もうすでにあちらは600年経つておる。あと外見は21歳にさせてもらった。」

真紅狼「誇らしげに言うな！！じゃ、なにか？俺は、外見は21なのに中身は600年弱経っているということか！？」

神「そういうことじゃ。じゃ、逝つて来い。」

真紅狼「オイコラ、待て。今文字が違わなかったか？」

神「気のせいじゃ。」

真紅狼「あ、最後にいいか？」

神「なんじゃ？」

真紅狼「俺が助けた子供は？」

神「無事じゃ、怪我ひとつない。」

真紅狼「そうか、よかったよ。」

と言った後、俺は光に包まれ、新しい生を得た。

転生だってよ。(後書き)

キャラ設定が長くなりそう

キャラ設定（前書き）

キャラ設定でい

キャラ設定

主人公 蒼騎 真紅狼 《あおき しんくろう》

年 18歳 ↓ 外見は21歳だが精神年齢は600歳越え。

身長 175cm ↓ 180cm

体重 61kg ↓ 65kg

誕生日 4月29日

容姿は鋼殻のレギオスのリテンスをイメージ。だが、無精髭は無いし、煙草も吸わない。ただ、眼の色は真紅。

裏設定

両親は二人とも他界している。10歳の時に交通事故により死亡。自分も交通事故で死んだことを皮肉に思っている。

両親が死んだあと、親戚をたらい回しにされているためか、偽善者などが嫌い。

15歳のときに自立し、バイトをしながら暮らしていた。

暇の時は、ゲーセンでメ。ブラやB。CS、KO。などをやりに行く。

料理は普通に出来る。

死んだあと、神によって不老不死になる。

能力

BLAZBLUE CSのハザマの能力、“碧の魔導書”を保有。

武器 二本のバタフライナイフ ドライブは『ウロボロス』

KOFのオズワルドの戦闘術 “カーネフェル” を使える。

武器 トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剋技も使用可能）

武器 リンテンスの鋼系と刀の天剣

戦国BASARA2の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。

各武将によって、「吸収・半減・無効・弱点」できる属性がある。

伊達政宗

吸収 雷 半減 風 無効 光 弱点 氷

真田幸村

吸収 炎 半減 氷 無効 風 弱点 水

前田慶次

吸収 風 半減 地 無効 雷 弱点 炎

長曾我部元親

吸収 水 半減 雷 無効 炎 弱点 地

織田信長

吸収 闇 半減 炎 無効 地 弱点 光

といった感じになります。

元親と幸村の属性は同じですが、幸村の方が炎は似合ったためそちらにしました。

元親は海賊からイメージして水を吸収にしました。

戦国ドライブ（「気の活性化」とBASARA技も使えます。

ちなみに『ネギま』の魔法は一切使えませんがその分、魔法防御力と抵抗力、障壁の力がめちゃくちゃ高いです。さらに、初級の《魔法の矢》ぐらいなら武器で跳ね返します。これは調子が良ければ、《闇の吹雪》や《雷の暴風》もなんとか弾き返します。

障壁に関しては、障壁を破壊する為の技以外はほとんど突破できません。

身体は「紅」に出てくる、『崩月流』の身体の構造となっています。右手に角あり。

さらに、鋼糸は常に展開中、人には見えないほどの細さで強度は悪魔を一撃で裁断出来るほどの破壊力。

こんなカンジですね。

まさにチートと言う枠を超えたナニカ。

では、さようなら

キャラ設定（後書き）

感想、意見待ってます

麻帆良学園（前書き）

あと二、三話でネギが来ます。多分。

麻帆良学園

目が覚めたら、夜の公園にいた。

周囲に“人の気配”はなかったが“人外の気配”は二つほど感じたのでそちらの方に声を掛けた。

真紅狼「おい、そのお二人さんちよいと道を聞きたいんだがいかな？」

突然声を掛けられたので驚いていたが、しばらくしてから茂みの中から出てきた。

???「キサマ、どうやって私の居場所がわかった？」

真紅狼「どうやって？と言われてもな調べたんだよ。」

???「なにか術を使っているんだろう？」

真紅狼「まあ、そういうモノだな。」

???「（そういうモノか・・・）まあ、いい。侵入者の排除だ、

茶々丸」

茶々丸「了解です。マスター」

真紅狼「ちょ！？人の話ぐらい聞こうぜ！！」

???「フン、いきなり学園内に現れた貴様の話なんぞ聞く耳もたん！」

茶々丸「マスター、話ぐらい聞いてあげたらどうですか？」

真紅狼「その人、いや、ガイノロイドナイスフォロー！」

???「茶々丸「！！！」」

???「キサマ、何故、茶々丸がロボだと分かった？」

真紅狼「先程気配を探ったら、二つの気配があり、一つは生命活動をしていたがもう一つはしていなかった。だから・・・」

???「・・・ロボだと？」

真紅狼「まあ、それに近いなにかなんだろうな。と思ったただけだ」
金髪の子は少し思案顔になったあと、きいてきた。

???「・・・(コイツ、面白いな。しかも、まだナニカを隠しているな)キサマ、名は？」

真紅狼「蒼騎 真紅狼だ」

???「我が名は、エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。悪の魔法使いにして、真祖の吸血鬼だよ。」

真紅狼「へー、エヴァンジェリンって言うのかよろしくな。エヴァンジェリン。」

エヴァ「キサマ、吸血鬼をビビらないのか？」

真紅狼「まあな。(なんせ、神にであってるからな、ちょっとじゃ驚かねえよ)」

エヴァ「キサマ、つくづく面白いな。あと、私の従者の茶々丸だ」

茶々丸「絡繰茶々丸です。よろしく願います。真紅狼様」

真紅狼「様はいらん。呼び捨てでいいぞ」

茶々丸「で、では真紅狼さん、よろしく願います。」

真紅狼「さんもいらないんだが、まあいいか。よろしく頼む茶々丸」

エヴァ「エヴァンジェリンは長いから、エヴァでいいぞ。」

真紅狼「あいよ、エヴァ。これでいいか？」

エヴァ「で、キサマどこで一夜を過ごすつもりだ？」

真紅狼「まあ、野宿かな。」

エヴァ「なら、ウチに來い。泊めてやる。」

真紅狼「いいのか？」

エヴァ「構わん。」

真紅狼「そうか、悪いな。ついでになんだが、なんかいい仕事ない？金稼がないと。」

エヴァ「(そういえば、あのジジイ警備員が足りないとか言っていたな。コイツにやらせるか。)明日、学園長に合せてやる。そのときに聞け」

真紅狼「なにから、何まで済まないな。」

翌日・・・

真紅狼はエヴァが起きる前に起き、外で軽い素振りをした。

真紅狼「・・・ハア！！」

と一閃した。そこだけ空気の流れが「ピタッ！」と止まり、しばらくしてから再び動き出した。

パチパチパチ・・・

と拍手が響いた。

エヴァ「凄いな。私でもアレは真似できんな。」

真紅狼「エヴァ、見ていたのか。」

エヴァ「ああ、声を掛けようとしたが、精神を集中させていたのが分かったから声を掛けずに見ていたよ。」

真紅狼「んじゃま、汗を流して飯を食いますか。」

エヴァ「ああ、そうしよう。食ったら、ジジイのところに行くぞ。」

真紅狼「おう。」

食事中・・・上手に食べましたー！！

真紅狼「学園長ってどんな人なんだ？」

エヴァ「一言で言えば、狸だな。」

真紅狼「なるほど・・・」

狸か・・・碌でもねえジジイなんだろうな。

エヴァ「ここだ。」

真紅狼「おい、エヴァ・・・」

エヴァ「なんだ、真紅狼？」

真紅狼「ここって、もしかして女子校？」

エヴァ「ああ、そうだぞ。」

真紅狼「マジかよ・・・道理で女子しかないのか。しかも興味あ

りそんな目で見られているし。」

さつきから、何人もの女性徒がこちらをチラチラと見ているのだ。その中には明らかに怪しんでいる視線も多数あったが気が付かないフリをした。

とエヴァは中に入り、学園長室の前まで来た。ドアノブを回そうとしたが、止めて蹴りで開けた。

真紅狼「行儀悪いぞ、エヴァ。」

エヴァ「おい、ジジイ！連れて来たぞ。」
スルーですか。

???「フオフオフオ、スマンの。エヴァンジェリン。そちらが・・・？」

真紅狼「蒼騎 真紅狼です。」

???「この学園の学園長をやつとる、近衛 近衛門じゃ。」
第一印象、頭が長い。人間か？

学園長「こちらの男性が広域指導員の」

???「高畑・T・タカミチだ。よろしく」

真紅狼「よろしくお願いします。」

学園長「うむ。それで、エヴァンジェリン、彼を警備員に推薦する
と？」

エヴァ「ああ」

学園長「じゃが、腕の方は・・・」

エヴァ「心配いらん。コイツ、私を一瞬で感知したよ。3 km以上離れた場所からな。」

タカミチ「(3 km以上の距離を一瞬で・・・只者じゃないな。彼は)」

学園長「フオ、それなら心配はいらんの。真紅狼くんと言ったかの？」

真紅狼「はい。」

学園長「キミに学園の警備を任せたい。」

真紅狼「分かりました。」

学園長「侵入者は深夜に出没する。侵入したら排除してほしい。」

真紅狼「相手は？」

学園長「魔物じゃ。」

真紅狼「了解した。」

学園長「ところで、真紅狼くん。君は今どこに住んでいるのじゃ？」

真紅狼「エヴァのところですが？」

学園長「君に良い物件があるんじゃないが？」

真紅狼「聞きましょう。」

学園長「寮長をやってほしいのだが・・・」

真紅狼「それどこですか？」

学園長「もちろん、女子寮じゃ！！」

真紅狼「アホですか？」

何言いやがる、このジジイは。

学園長「担当だったものが結婚して退職してしまつての、空きつ放しつてもマズインじゃ、どうにかやつてもらえんかの？」

真紅狼「・・・考えさせて貰います。」

学園長「わかつたのじゃ、良い答えを待っておるぞ。」

俺は去り際に聞いた。

真紅狼「では失礼します。今夜から仕事ですか？」

学園長「うむ。頑張ってくれい。」

ボタンッ！とドアを閉めた。

学園長「どうじゃ、彼は？」

タカミチ「キツイですね。彼を襲ってみようと思ったんですが、逆に殺されるイメージしか浮かびませんでしたよ。しかも、妙な圧力を感じました。」

学園長「フオ？キミもか？」

タカミチ「とは学園長もですか？」

学園長「うむ。心臓を鷲掴みされた感覚じゃった。」

タカミチ「……厄介ですね。」

学園長「……うむ。しばらくたったら魔法先生に生徒たちを招集するぞ。」

タカミチ「わかりました。」

学校を出て、カフェに行こうとした俺たちはエヴァが突然聞き出した。

エヴァ「で、真紅狼は受けるのか？その条件。」

真紅狼「ん？いや、まだ決めてない。ま、見極めてからだな。」

エヴァ「見極める？」

真紅狼「ああ。エヴァ、俺はね、偽善者が嫌いなんだよ」

と空を見上げながら、どこか虚ろに答えていた。

そのあとエヴァは黙った。

真紅狼「ま、今夜から初仕事だし努力しますかね。」

茶々丸「では、真紅狼さんは今夜は遅くなるということですね？」

真紅狼「ああ、そうだな。」

と言い、時間は過ぎていった。

深夜……

真紅狼「……む、来たな。茶々丸行ってくる。」

茶々丸「はい、いつてらっしゃいませ。真紅狼さん。」

真紅狼「おう。」

と言い、すぐさま俺は鋼糸をビルの先端に巻きつけ、引っ張られるように飛んだ。

街外れの森……

そこでは『魔物』と二人の少女が殺し合っていた。

鬼ども「ほー、嬢ちゃんたちやるやないか」

といいながら身の丈ほどの金棒を重さを感じないほどの速さで振り回していた。

ブオンブオン！！

ヒュッ！

ガキーン！！

キーンキーン！！

???「くっ！！」

???「刹那、援護する！」

ドン！ドン！ドンツ！

鬼ども「ぐっ、術が施された弾丸か！！」

刹那「ハッ！」

斬！

鬼が一瞬ぐらついた瞬間、自身の得物の『夕凧』で叩つ斬った。

刹那「すまない、龍宮。」

龍宮「気をつけろよ。」

刹那「ああ、あらかた片付いた！……がまた軍団が来たな。」

龍宮「行くぞ、刹那」

刹那「ああ」

と、個人としての戦闘力、たまに見せるコンビネーションはなかなかのものだった。

が、今度の軍団は前のは質がまったく違っていた。

徐々に押され、刹那は夕凧を弾かれて吹き飛ばされてしまった。

刹那「ぐあ！しまった！夕凧が！！」

カランカラン……

鬼ども「これも運命や堪忍してや。」

といったあと、刹那目掛けて振り降ろしていた。

相棒の龍宮を見たが、こちらに走ってきているが、間に合わなそうだった。

刹那「（くっ、やられる！）」

と思っていた時、どこからもなく二人の耳に囁いた。

真紅狼「（二人とも伏せる！！）」

刹那「（誰だ、貴様！！）」

真紅狼「（やかましい！！伏せなきゃ死ぬぞ！！）」

と大声で言い、刹那たちは急いで伏せた瞬間、鬼ども達は全て真つ二つに裁断されていた。

ズパァ、ズパパパパパァ！！

次から次にと容赦なく。そして、鬼どもは消滅した。

スタッ！

と空から跳んで来た青年は夕風を持って、それを刹那に返した。

真紅狼「おい、大丈夫か？」

と聞いてきた瞬間、刹那が斬りかかってきた。

刹那「貴様、何者だ！！」

真紅狼「ちょ！いきなりなにしゃがる！！」

刹那「うるさい、黙れ！貴様もお嬢様を狙う輩だな！？」

真紅狼「お嬢様なんざ知らねえよ！？」

刹那「なら、なぜ、貴様から『魔』のオーラが出ている。」

真紅狼「知らんがな！！あー、もう！！さっさと帰るか。」

刹那「な、待て！！」

といい振り降ろす前に真紅狼は鋼糸を樹に巻きつけ、跳んでいった。そのまま、夜の闇に消えていった。

刹那「龍宮、追えるか？」

龍宮「・・・いや、無理だ。すでに気配が無い。取り敢えず学園長に報告しよう。」

刹那は乱入者の方が消えた方をずっと見ていた。

真紅狼はあの場から去る時、殺戮を同時に行いながら移動していた。そして、家に着いた。

真紅狼「ただいま。茶々丸にエヴァ」

茶々丸「おかえりなさいませ。」

エヴァ「どうだった？」

真紅狼「まあまあかな？準備運動にもならんわ。んじゃ、寝るよ。おやすみ」

茶々丸・エヴァ「「おやすみ」」

麻帆良学園（後書き）

真紅狼から『魔』のオーラを感じるのは織田信長の力のせいです。
だって、あの人第六天魔王だもん

広域指導員

「真紅狼 side」

毎朝、素振りを行うことにした、真紅狼は刀を振っていた。

真紅狼「フツ！フツ！フツ！」

ブン！ブン！ブン！

と敵を一刀両断するイメージで振っていた。

真紅狼「・・・フウ。」

最後に大きく振りがぶり動きを止めた。

そして、エヴァのログハウスから少し離れてから刀の天剣を取りだした。

真紅狼「・・・レストレーション」

天剣を復元し、構えた。

斬るのは、目の前の大樹・・・およそ50年ぐらいのもの。

・・・・・・サザー・・・

風が吹いていたが、止んだと同時に技を放った。

衝剄活剄混合変化——天剣技・霞楼

振ったのはたったの一振りだったが、大樹には、いくつもの斬撃が刻み込まれていた。そして、樹は支えられなくなり、倒れ始めたが鋼系によって支えられ、ゆっくりと地面に下ろした。

真紅狼「うーん、いいんだが・・・もう少し威力を込めるべきかな。」

本来なら、一閃で対象物を両断したあとさらにそれを剄の力で細かく細切れにしていくのだが、真紅狼が放った場合、一閃で両断出来ずにいた。ほんの少しの力が足りないのだ。

むやみに剄の力を多く注いでも、威力が大きすぎて、斬撃が雑にな

ってしまう為、絶妙な加減が必要なのである。

真紅狼「これぐらいにしておくか・・・帰らないとエヴァ達が心配するしな。」

と言って刀を元に戻し、ログハウスに戻った。

＼真紅狼 side out＼

＼エヴァ side＼

ちょうど、真紅狼が刀を復元した時にエヴァは起きた。いや、起こされたと言った方が正しかった。いきなり巨大な力が現れたからである。

エヴァ「なんだ、この力は!？」

茶々丸「あ、マスター。おはようございます。」

エヴァ「おい、茶々丸、真紅狼はどこに行った？」

茶々丸「真紅狼さんなら、鍛錬すると言って外に出て行きましたが?」

エヴァ「じゃあ、これがヤツの力の一部ということか・・・」

茶々丸「とてつもなく凄まじいですね。力の余波がここまで来ています。」

と言った茶々丸の先には食器棚が置いていたが、皿は小刻みに震えていた。

茶々丸「・・・収まりましたね」

エヴァ「ああ、何をやったのか聞き出すか。」

と言ったあと、真紅狼は帰って来た。

＼エヴァ side out＼

＼真紅狼 side＼

帰って来たあと、エヴァに挨拶をしたが無愛想に答えられてしまった。

・・・なぜ?

なにかやったかな?と頭の中で捻っていたら、エヴァが突然聞き出

してきた。

エヴァ「真紅狼、先程の力はお前がやったのか？」

真紅狼「ん？鍛錬のことか？」

エヴァ「そうだが、私が言ってるのは何をやった、だ。」

真紅狼「大樹を斬っただけなんだけど・・・」

エヴァ「斬るだけにあれほどの力はいらないはずだが？」

真紅狼「・・・もしかして余波がデカかった？」

エヴァ「バカモノが！！あんなもの気付いてくださいって言うてるようなものだぞ！！」

真紅狼「スマン、思いつきり技を撃ちなくなったから、つい・・・
といいながら頭を下げた。

エヴァ「真紅狼、そろそろお前の力について話してくれないか？」

真紅狼「まあ、この際だし話すか。俺が使う武器は錬金鋼ダイトと呼ばれる物質と《剗》っていう力だ。」

エヴァ「ダイト？剗？」

初めて聞く単語に頭を捻っていたが、説明するより見せた方が早い
と思い。待機状態の天剣をだした。

エヴァ「なんだ、それは？」

真紅狼「これが、《ダイト》だ。そして、これに剗を通すと・・・
レストレーション」

復元し刀になった。

エヴァ「刀になったぞ！？」

真紅狼「そう、刀になる。ちなみにもう一つ違う武器を持っている
が、それは常に展開中だ。」

エヴァ「は？」

なに言ってるんだコイツ？みたいな顔をしていた。

真紅狼「もう一つの武器の名は鋼糸という。」

エヴァ「鋼糸？何もないぞ。」

といい、部屋の中を注意深く見渡すエヴァ。

真紅狼「まあ、普段は俺の到で見えないように細工しているからなちよつと待て。見えるように力を込める。」
と言った後、何百万本もの鋼系がログハウスの中を張り巡らされていた。

エヴァ「なっ！」

真紅狼「鋼系は戦闘だけではなく、移動や探索にも役に立つぞ。」

エヴァ「（わたしの『人形遣い』の力を優に超えている。）」

真紅狼「おーい？エヴァどうした？聞いているか？」

エヴァ「ああ、聞いているぞ。」

真紅狼「そうか。まだ能力は色々あるが、そのつど見せていくよ。

基本的に鋼系は日常生活でも展開しているし、エヴァ達の周りにも何本か張っておくから、何かあったらその場で呟いてくれ。」

エヴァ「便利だな。その武器・・・」

真紅狼「ああ、便利だよ。さて、ほらエヴァ達は学校だろ？早く支度しろよ。遅れるぞ？」

時間は7時45分を過ぎていた。

真紅狼「俺も、広域指導員の仕事に出ないといけないし。」

と言って支度し、エヴァ達は学校に行き、俺はタカミチと待ち合わせの場所に向かった。

＼真紅狼 side out＼

＼タカミチ side＼

僕は今日一緒に仕事をする真紅狼くんを待っていた。

タカミチ「もうそろそろ約束の時間か。」

約束した時間は12時、お昼時は全生徒が出てくるため、ちよつとのことδειがみ合いが起きることが多い為、こうして僕たち広域指導員がケンカなどを収めている。

お昼休みになる10分前ぐらいに彼はやってきた。

.....空から。

真紅狼「遅れてすみません、高畑先生」

タカミチ「あ、ああ大丈夫だよ。まだ時間になっていない。しかし、今のはなんだい？」

真紅狼「あー・・・」

答えに困っていた。

真紅狼「企業秘密つてことにしてもらえませんか？」

タカミチ「・・・そういうことにしておこう」

真紅狼「すみません。話せるときに話すんで。」

タカミチ「（すぐになると思うけど・・・）」

と知っている理由は今日の夜、彼を麻帆良学園の魔法先生及び魔法生徒の前で紹介するからであった。

タカミチ「じゃ、仕事をしようか。」

真紅狼「はい。基本的に何をするんですか？」

タカミチ「まあ、ケンカを収めたりすることが主な仕事かな。生徒の数が多いと衝突することが多いからね。それを止めるのが僕たちの仕事さ。」

真紅狼「なるほど、沈静化させればいいんですね？」

タカミチ「そうだね。最初だし、一緒に見て回ろうか。」

といい高畑先生と見て回り、この人の強さを見ることが出来た。

不良たちが急に倒れていくのだ、まるで糸が切れた人形のように・・・

俺も何件かケンカを仲裁したが、あれは仲裁というより、脅しになっていた。

止めるために、間違つて『戦声』を使ってしまったのである。

それを受けた不良グループは仲介した後、一目散に逃げていった。その後、俺は名前から【紅き狼の咆哮】と呼ばれることになった。

タカミチ「こんなカンジが広域指導員の仕事さ。仕事内容は把握したかい？」

真紅狼「ええ、理解しました。有難うございます、高畑先生」

タカミチ「そうかい、よかった。」

真紅狼「では、失礼します。」

タカミチ「あ、そうだ真紅狼くん。伝え忘れていたんだがね。今日の夜空いてるかい？」

真紅狼「空いていますか？」

タカミチ「学園長が世界樹広場に來てほしいのことだ。」

真紅狼「わかりました。伺います。では夜に再び・・・」

タカミチ「ああ、夜にまた。」

といい、お互い別れた。

〔タカミチ side out〕

今夜、魔法使いたちの宴が始まろうとしていた・・・

魔法使いの夜（前書き）

サブタイトルから連想できるBGMがあるのは俺だけですかね？
実際聞きながら書きましたが・・・

あと、今回独自理論が展開しますので嫌な方は戻るを押すことを推奨します。

魔法使いの夜

夜、指定された場所に行こうと準備をしていた時、エヴァに呼び止められた。

エヴァ「どこに行くつもりだ？真紅狼。」

真紅狼「呼ばれているんだよ、学園長に理由は知らんが」

エヴァ「・・・面白そうなのが起きそうだから私も付いていこう。茶々丸、準備しろ」

茶々丸「分かりました。マスター」

チクショー、絶対に来ると分かっていたから、バレずに出ようとした瞬間コレだよ。

真紅狼「んじゃ、時間に遅れそうだから、エヴァと茶々丸、どこでもいいから掴んでくれ。」

といい、エヴァは俺の頭に茶々丸は腰に手を回した。

真紅狼「よし、掴んだな？手離すなよ？あと、舌嚙むなよ？」

と言った後、鋼系の何本かを世界樹の枝に巻きつけた後、思いつきり引つ張られていった。

ギユウウン！

エヴァ「うおおおおおおお！！？」

世界樹前の広場・・・

学園長「遅いのう、真紅狼くん」

タカミチ「急に呼んだから、しょうがないですよ。」

と話していたら、他の魔法先生やら生徒が聞いてきた。

ガンドルフィーニ「学園長、これから紹介したい人というのが『闇の福音』の世話になっているとは本当ですか！？」

学園長「うむ。本当じゃが、敵になるなんてことは無いじやろうが・

・・」

答えた時、複数の魔法先生と生徒はざわめいた。

ガンドルフイーニ「何言ってるんですか！！あの『闇の福音』ですよ！？サウザウンドマスターの呪いがあるから大人しくしているのに、得体のしれない者があちらについてエヴァンジェリンが力を得たら、どうするんですか！？」

タカミチ「エヴァはそんなことしなと思うが・・・」

と終わりのない議論をしていた時、微かに声が聞こえた。

???「・・・・・・お」

タカミチ「なにか聞こえませんか？」

学園長「ワシには何も聞こえなかったが？」

???「・・・・・・おお」

タカミチ「・・・・・・聞こえましたね」

学園長「うむ。しかし、どこから発しているのじゃ？」

???「・・・・・・おおおおお！？」

タカミチ「あつちですね」

といい向いた方向はエヴァ達が住んでいる方だった。

学園長「じゃが、声は上から聞こえるが？」

と言った後、その声の持ち主たちが来た。

???「うおおおおおおお！？」

スタツ！

と学園長達のちょうど後ろに降りてきた。

真紅狼「到着！」

タカミチ以外は全員驚いていた。

まあ当然である、いきなり上から人が降りてくれば誰でも驚く。

真紅狼「エヴァ、大丈夫か？」

エヴァ「・・・丈夫じゃない。」

真紅狼「はい？」

エヴァ「大丈夫じゃないって言っているんだ！！いきなり飛び出して、舌を噛んでしまったじゃないか！！」

真紅狼「舌噛むなよって言っただろ？聞いといてくれよ。」

と俺はため息をついた。

真紅狼「で、どうだった？はじめての空の旅は」

エヴァ「なかなか楽しかったぞ。しかし、聞いてみた時は半信半疑だったが実際やってみると、便利だなソレ。」

真紅狼「エヴァも同じような能力があれば少ない力でも出来ると思うが・・・」

と学園長たちそっちのけで話していた。

学園長「そろそろいいかの？」

と声を掛けてきた。

真紅狼「ああ、すみません。」

学園長「構わんよ、さて、今日呼んだのは麻帆良にいる魔法先生及び生徒を紹介する為じゃ。」

真紅狼「えーと、ここにいるのは全員魔法使いなんですか？」

学園長「うむ。自己紹介をしてもらってもいいかの？」

真紅狼「はい。どうも、今臨時にこの学園を警備兼広域指導員をやっている、蒼騎 真紅狼です。」

と喋った後、何人かの魔法先生と生徒に睨まれていた。なんかやつたかな？

学園長「あと、魔法先生と生徒中にキミを良く思わない人たちがい

るので手合せしてもらいたいのじゃが・・・」
なるほど・・・そういうことか。

真紅狼「つまり、得体が知れない人間が我がもの顔で闊歩し、力を振るうことが機に食わないということですね。」

学園長「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺ははつきり言っちゃった。

そういった後、さらに敵意が何人か出てきた。その中には俺ではなくエヴァに敵意を向けていた者もいた。

その中に先程話しかけていた褐色の男性が前に出て言ってきた。

ガンドルフィーニ「キミはエヴァンジェリンがどんな人物が知っているか!？」

言い分を聞き、エヴァに『何言ってるんだ?コイツ』とアイコンタクトで聞いたら、『無視しろ』と返ってきた。

ガンドルフィーニはさらに言い続ける。

ガンドルフィーニ「知らないなら教えてあげよう。彼女はね吸血鬼なんだ。」

しかも魔法世界では賞金首で600万ドルだ。それに何人も殺してきている。

いわば、悪の魔法使いなんだよ。いまなら、まだ間に合ううちに来るんだ!..!」

ガンドルフィーニの言葉を聞いて、何故か不快な気分になった。

まるで、自分たちが『正義の魔法使い』と言いたいように。

真紅狼「だから、何?しらねえよ、そんなこと。俺にとってはどうでもいいし。それともアレかお前らは自分たちが『正義の魔法使い』とでも言いたいのか?」

ガンドルフィーニ「そうだ。キミはエヴァンジェリンに騙されているんだ。」

この言葉で完全に『偽善者』と判断した俺はエヴァの方に行った。

エヴァ「いいのか？あちらにいれば、良き未来があるんだぞ？」

真紅狼「ハッ！『偽善者』になるぐらいなら悪になった方が数倍マシだ。」

エヴァ「それも、一つの選択か・・・」

と見かねたガンドルフィーニは叫んだ。

ガンドルフィーニ「キミは大きな間違いを選択したのに気が付かないとは・・・」

真紅狼「キャンキャン、うるせえぞ！！たくこつちが下地に出てりや調子に乗りやがつてよお。これだから、実力のわからないヤツは嫌いなんだ。ま、手合せしないといけないし。おら、やりたい奴は前に出る！遊んでやるよ。」

と言った後、出てきたのは、先程、喋っていた男と褐色のシスターに白髪でメガネを掛けた女性、ミッシヨン系の服装をしている女性徒、先日助けた二人にタカミチの七人だった。

真紅狼「学園長、戦闘形式は？」

学園長「真紅狼くんVS七人になるがいいかの？」

真紅狼「構わないが、タカミチ、アンタこの中でも別格の強さだろ？」

タカミチ「へえ・・・よくわかったね。」

真紅狼「タカミチとはタイマンでお願いしたい。」

学園長「ガンドルフィーニくんたちはいいのか？」

ガンドルフィーニ「構いませんよ。」

と言った後、お互いに距離を取った。

真紅狼「（鋼糸は威力があり過ぎるし、カーネフェルで遊ぶか。）」

エヴァ「さて、お手並み拝見といくか。」

学園長「双方準備はいいか？」

真紅狼「オープン・ザ・ゲーム」

ガンドルフィーニ「ええ」
学園長「では、始め！！」

最初は乱闘となり、一人ひとりの力量を測っていたとき、後ろから攻撃してきた者の攻撃を避けながら、後ろを取り左手のカードで背中を斬り、そのまま飛ばした。

刹那「ぐっ！」

ズバツ！ズバツ！！

突然、リズムが狂い浮足立っていた集団が一斉に俺に目掛けてそれぞれ得物を振り降ろす瞬間……

真紅狼「ジャック・ポット」

ズバババア！！

真紅狼の周りにカードが出てきて、振り降ろす前にカウンター攻撃をまともにくらい先程、飛ばした生徒とガンドルフィーニ以外はダウンした。

ガンドルフィーニは「ジャック・ポット」を回避したものの、多少掠り、左手が麻痺していた。

ガンドルフィーニ「（クツ、かわしたとはいえ、左手が麻痺するなんてとんでもない威力だな。）」

真紅狼はすでにケリをつける準備をしていた。

そのとき、少女が起きあがった。

起きあがったのを見計らって、突撃した。

ガンドルフィーニは後ろにいる少女を守るべく立ちふさがったがそれは拙かった。

ドゴッ！

ガンドルフィーニの水月に叩きこみ、態勢を崩した瞬間、真紅狼「見せてやるよ、カーネフェルの真髄を！！」

ズババババババババババツ！！！！

52枚のカードが二人に容赦なく、乱れ飛んだ。

そして終わり、彼らは体中切り傷だらけになっていた。

真紅狼「やれやれ、仕方の無い方ですね・・・」

タカミチ「やりすぎじゃないかい。」

真紅狼「それでも、手加減してるんです。感謝してほしいものです
ね。では、やりましょうか。」

タカミチはポケットの中に手をつっこんだ。

そのあと、俺は、急いでその場を離れた。

ドゴオン！

まるで、大砲が着弾したような音が俺の居た場所に響いた。

真紅狼「ワーオ！とんでもねえな。コイツは食らったらヤバそうだ。」

タカミチ「そんなこと言っておきながら、全部綺麗に避けているじゃないか。」

真紅狼「そりゃ、食らいたくないもので。」

ドゴオン！ キュボ！ ドゴオン！

とタカミチの怒涛の攻撃は休む暇なく続いた。

真紅狼「（チツ！カーネフェルとは相性が悪いな。見せたくはない
がやるしかないか）ぐうう！！」

ブチブチブチ！！

何かが食い破る音がした後、右腕の肘から一本の“角”が生えた。
誰かが悲鳴を上げたが俺には聞こえていない。

体が熱い。燃えるように熱い。

吐く息は蒸気になった。

今の俺は目の前の敵を倒すだけの鬼。

真紅狼「崩月流 戦鬼 甲一種 蒼騎 真紅狼 参る。」
タカミチ「・・・豪殺居合拳!!」

ゴウツ!

さつきから放っていたのはこの居合拳だった。拳だけであれほどの威力が出る筈がないが、今はそんなことを聞きだす場合ではないのだ。

俺は剛力無双の右手に力を込め、思いっきり殴った。
バゴオン!!

真紅狼「腕が痺れるかなと見積もっていたんだけど、全然痺れなかったな。」

俺は、タカミチの放った技を相殺したのだ。

相殺されたタカミチは空いた口が塞がらないという顔をしていた。他の魔法先生と生徒たち、学園長もそしてエヴァたちも信じられない光景を見たようで、固まっている。

真紅狼「タカミチさん、まだやりますか？俺は何度でもあなたのその技を相殺しますよ。」

タカミチ「・・・これは、僕の負けだな。降参だ。」

学園長「勝者、蒼騎 真紅狼!!」

手合せが終わり、タカミチが聞いてきた。

タカミチ「真紅狼くん、何故キミは『正義の魔法使い』が嫌いなんだ？」

真紅狼「タカミチさんは『正義』って、何だと思います？」

タカミチ「『悪』を滅ぼすことじゃないことかな。」

真紅狼「俺には『正義』という言葉はないと思っている。」

タカミチ「どういうことだい？」

真紅狼「『正義の魔法使い』って、『悪』を滅ぼし弱者を救う。だけど、『悪』をしていた人間は本当に『悪』なのか？何か事情があ

り、『悪』にならなければならぬ理由があつたら？『悪』になることで大事な人を守ることが出来るなら、どうします？第三者から見れば、『正義の魔法使い』はヒーローでしょう。ですが、邪魔された者にとっては、そいつらこそが『悪』にしか見えない。もし、『正義の魔法使い』を名乗るなら『悪』も救うべきです。ですが実際は、『悪』救われるず、犠牲になるだけ……。はつきり言つて、『正義』の意味が間違つてゐるんですよ。『正義』なんて、所詮犠牲が出ることによって成り立つもの。それも分らずに一方的に『悪』と決めつけこちらの理由も聞かず、倒すなどというそいつらこそが『悪』なんですよ。だから、俺は『正義の魔法使い』が嫌いなんです。むしろ、そいつ等は『偽善者』ですよ。『正義』という結果ばかりを求め、『悪』という過程《犠牲》を見ないフリをし、自分たちの都合のいい方向に持つていく。コレを『偽善』と呼ばず、何というのか聞きたいもんですね。特にその倒れているバカ共にと指を指した。

エヴァが悪の魔法使いにならなければならぬ理由があつたのにも関わらず、一方的な正義を振りかざしていた者たちを見ていた。

真紅狼「学園長、警備と広域指導員の件は受けますが寮長のなる件は辞退させていただきます。あと、前も変わらずに、エヴァの家で生活させてもらいます。あー、そこにゐる魔法先生と生徒諸君、襲つてきてもいいけど、その代り覚悟を持つてきてね。覚悟なしに襲われても助けないからね。あと、家族に手を出したら手を出した奴を見つけ出して、殺すから」

学園長「……うむ。わかつたのじゃ。明日また、学園長室まで来てくれんか？」

真紅狼「わかりました。伺います。では失礼します。」
といい、エヴァの家の近くの樹に鋼糸を巻きつけ飛んでいった。

魔法使いの夜（後書き）

途中から自分でも何を書いているのか分からなかったが、感情の赴くまま書きましたんで、破綻しているかもしれませんが、その辺はご都合ということで・・・

一夜明けて・・・（前書き）

次回から原作開始じゃー！

一夜明けて・・・

＼真紅狼 side＼

思い返すと昨日の手合せは正直やり過ぎたと後悔していた。もう少し、上手く立ちまわれたのではないかと思い、気持ちが沈んだ。が、やってしまったものは仕方がないと切り捨て、学園長に呼ばれていることを思い出した。時間は、午後二時を過ぎていた・・・授業が終わる時間を考え、三時過ぎに伺えばいいと思い、少し散歩しながら学園長室に向かった。

街を歩いていると、姿は見えずとも殺気と敵意の視線がちらほらと出てきた。正直、鋼系を使えば、一瞬で『処理』出来るが、面倒事になるので止めた。だけど、鋼系は常に展開しているが・・・

＼真紅狼 side out＼

＼学園長 side＼

昨日の出来事の後に、ウェールズの知人から連絡があり、「修行で日本の先生をやることになったので世話を頼みたい」と連絡があった。その『修行』をする子はこちら側では『英雄の息子』であるネギ・スプリングフィールドじゃった。

そこでワシはサポートという大義名分を使いその子の副担任をさせるつもりだったが、何故かタカミチくんの耳に入り、当然のごとく抗議してきた。

タカミチ「学園長、本気ですか！？彼をネギくんの副担任にするというのは！！」

学園長「マジじゃ。学校内なら、彼も下手なことは出来んじやろうしサポートという名で彼を監視できるしの。」

タカミチ「しかし、危険すぎます！！彼は『正義の魔法使い』つま

り我々を嫌っているんですよ？ましてや、ネギくんは修行中の身、ネギくんがこちら側の人間と一緒にバレたら、潰されます！！」
学園長「じゃが、タカミチくん。キミは今、とても忙しいじゃろ？ちよくちよく海外に行ってる。どうやって、ネギくんの面倒をみるのじゃ？」

タカミチ「そ、それは・・・」

学園長「現実を受け止めるしかないのじゃ。わかったかの？」

タカミチ「・・・・・・・・わかりました。ですが、もし危険な目に遭っていたらそのときは・・・」

学園長「うむ。そのときはキミの好きなようにすればよかるう。」

タカミチ「有難うございます。」

と一段落ついたところで、ドアをノックする音が聞こえた。

「学園長 side out」

「真紅狼 side」

なかから「どうぞ」と言われたので、中に入った。
すると、タカミチがいた。

少し顔を合わせづらかった。昨日の今日であるだが、動揺を悟られたら何を言われるか分からないので、顔には出さなかった。

学園長「フオフオフオ、よく来てくれた。真紅狼くん。」

真紅狼「いえ、それで学園長話とはなんですか？」

学園長「話というより、辞令じゃ！」

真紅狼「・・・・・・・・・・は？」

学園長「キミには三日後に来る新任の先生の副担を担当してもらう。」

真紅狼「きょ・・・・・・・・」

学園長「ちなみに拒否権はない。」

タカミチの顔を見たら、「諦めろ」という顔が返ってきた。

ああ、決定事項ですか。・・・・いっぺん死ね、クソジジイ。

真紅狼「ひとつ聞きたいんですが、広域指導員と警備はどうすれば

？」

学園長「広域指導員は暇のときにやってくれて構わぬ。警備はいつもどおりじゃ。副担になれば、給料も弾むぞい。」

『給料』と聞いて、ちよつと考えた。確かに金は欲しいがその分リスクがデカイ。なんせ敵の本陣の中にほぼ丸腰で行くため、緊急時に対処できなくなるのが痛い。

・・・保険を掛けておくか。

真紅狼「わかりました。そのお話受けましょう。」

学園長「おお！そうか受けてくれるか！なら、「しかし」・・・なんじゃ？」

真紅狼「学校内に居る間はお互い不可侵ということ条約を結ばなければ、そのお話無かったことにさせていただきます。ちなみにこの条約にはエヴァと茶々丸も含まれます。」

学園長「・・・それぐらいならよかろう。」

真紅狼「なら、契約書と念書にサインを・・・」

と言って、適当な紙だが、物理的な証拠を確保しておけば、安全になる。

学園長「これでいいかの？」

と言い、印のついた契約書と念書が渡された。

ちゃんと「近衛 近衛門と魔法先生及び生徒は蒼騎 真紅狼とエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、絡繰 茶々丸に対して学校内では不可侵を認める。」

と書いており、印鑑も押されていた。

真紅狼「確かに、承りました。では三日後に」

学園長「あ、伝え忘れておったが、女子寮の寮長もやってもらうぞ。」

真紅狼「・・・はい？」

今、なんつったこのジジイは。

学園長「副担任と女子寮の寮長をやってもらうと言ったのじゃ。」

真紅狼「・・・（やっと出来た保険を白紙に戻すのは辛い。受ける

しかないか。」わかりました。」

ホント、死んでくれないかな？コイツ・・・

学園長「では三日後の朝、8時15分前には来てくれ。」

真紅狼「了解です。では失礼します。」

（真紅狼 side out）

一夜明けて・・・（後書き）

スマン、今気が付いたんだがチャチャゼロを出すのを忘れていた。

番外編 休日の過ごし方（前書き）

ルビの振り方がようやく分かった・・・
まだ初心者なので変なところに振ってしまうかもしれませんが、その辺は許してください

番外編 休日の過ごし方

どうも、皆さん。今日は私、絡繰茶々丸が真紅狼さんの一日をリポートしたいと思います。

朝はだいたい6時ぐらいに起床する、真紅狼さん。

そこから日課の鍛錬を一时间ほどし、七時ぐらいには終わっています。

鍛錬の内容は基本的に素振りと鋼系の調整、一通りの体術などです。私は毎日鋼系の調整する理由を聞きました。常に展開しているから必要ないとおもいますが・・・

そしたら、本人曰く「万が一ってことがあるから妥協はしたくないし、これ実際には簡単そうに見えて、加減が難しい」と仰っていました。

七時二十分には鍛錬を終え、汗を流し、朝食を作っています。

今日は、ベーコンハムエッグをパンに挟んだサンドイッチですね。ときはきと調理をし、マスターを起こしに行くようです。

「オイ、起きろエヴァもう朝だぞ。」

「あと、一時間。」

「駄々こねないで起きろ。朝食出来てんだよ。」

「ねむい。」

「起きなきゃ、明日からエヴァのメシはニンニクにするぞ?」

「起きる。」

なんとマスターが起きました。やはりニンニクは嫌いなんですね。

「いただきます。」

私も食べてますよ?

なんでも食事は皆で食べるものだと言っていました。その時の表情が寂しげでしたので聞こうと思いましたが、また今度にします。

朝食を食べ終わると、食器を片づけ、掃除をし、家の中の空気の入れ替えをするために窓を開けていました。

マスターは用事があるといいどこか出掛けて行きました。

真紅狼さんも外に出かけて行きました。

散歩みたいですね。

そんなこんなで一時半過ぎ、昼食を取り、再び、散歩をしていました。

散歩途中で、工科大の生徒と麻帆良大の生徒が喧嘩をしていたので鎮圧をしていました。真紅狼さんが間に入って一分もしないうちに喧嘩を仲裁していました。遠くからでしか見ていなかったため、何をしたか分かりませんでした。声を掛けただけなのにものすごく怯えてました。

真紅狼さん何をしたんですか・・・？

四時ぐらいになると家に戻ってきて、屋根の上に乗る、寝転がっていました。

昼寝みたいですね・・・

二時間後・・・

真紅狼さんが目覚め、夕食の準備をし始めました。

そして、夕食が出来上がる前に、マスターの帰還、狙ったとは思えないぐらいのタイミングのよさ。

そして、就寝です。

以上が真紅狼さんの一日でした。

番外編 休日の過ごし方（後書き）

短いな、これ。

なんだこれ？

次から原作開始！！

正体から結婚へ（前書き）

超急展開です。

でも、最初の予定ではほぼ計画通りなんで万事オッケーです。
ここから、ちよつとずつ魔改造します。

正体から結婚へ

（真紅狼 side）

目が覚めると俺を転生させた神の領域に居た。

真紅狼「なんか用か、爺さん。」

神「うむ。そちらの世界でも元気にやっているようじゃの。」

真紅狼「ああ、まあな。それが目的じゃないだろ？」

神「お主にさらに力を授けようと思つての？」

真紅狼「力？」

神「うむ。魔法の力じゃ！」

真紅狼「ネギまの魔法は使えないハズだろ？どうすんだよ？」

神「お主が転生する前にハマっていたゲームがあるじゃろ？その力を渡そうと思つての」

真紅狼「あー、あつたね。」

ちなみに神と俺が言っているのはGBAのFF5とFF6のことだ。（全クリしました。エヌオー？魂の祠？オメガウエポン？余裕でブチのめしましたがなにか？by作者）

神「授けるのは魔法関連のみだけじゃが・・・」

真紅狼「んじゃ、FF5の“暗黒”魔法とFF6の魔法と青魔法全部であとFF6の召喚獣全部プリーズ」

神「また欲張つたの・・・まあ、よいか。あと異常状態全て無効にしておいたぞ」

真紅狼「どーも。んじゃま、起きましようかね。」

神「まだ用はあるんじゃが？」

真紅狼「まだあんのかよ。」

神「お主が世話になつている真祖の吸血姫がおるじゃろ？」

真紅狼「エヴァのことか？」

神「うむ。その子には訳のわからん呪いが掛かっているの。日頃の世話になつているんじゃ、お礼にその呪いを解いてやれ。」

真紅狼「呪いを解く力なんて持ってないんですけど……」

神「そういうと思って、ワシが用意しておいたぞ。魔法薬じゃ。」

真紅狼「おお、すまんな。ちなみにどんな呪いなんだ？」

神「なんでも、“登校地獄”という呪いらしい……」

なんだそれ？

いかにも馬鹿らしい呪いだな。

と思っっていたら、だんだん目の前が白くなってきたとき神が目の閉じ際に言って来た。

神「また、用があれば、お主をこちらから呼ぶがもし必要なら寝た時に念じればそちらからでもここに来れるぞ……」

そして、俺は目を完全に閉じた。

今日は日曜なのでエヴァのログハウスで寝ていた。いつもの鍛錬をやり、朝食を作り、神に渡されていたモノをエヴァに渡すつもりだった。

真紅狼「エヴァ、話があるんだがちょっといいか？」

エヴァ「ん？……その様子だと真剣な話のようだな……」

俺の表情を読み取ってくれたのか、すぐに対応してくれた。

真紅狼「まあな。……俺の正体の話だ。」

真紅狼 side out

エヴァ side

いつも通りの朝を迎え、真紅狼は朝の鍛錬をしそのまま朝食を作っていたが、どこか落ち着かず、そわそわしていた。

気になったので声を掛けようとした瞬間……

真紅狼「エヴァ、話があるんだがちょっといいか？」

と真紅狼の方から声を掛けてきたので快く返事をした。

エヴァ「ん？・・・その様子だと真剣な話のようだな・・・」
いつにも増して、真剣な声色だった。
そのあと、私をもっとも気になっていたことを話してきた。

真紅狼「まあな。・・・俺の正体の話だ。」

＼エヴァ side out＼

＼真紅狼 side＼

真紅狼「さて、俺の正体だが、元々、俺はこの世界の住人じゃない。
ましてや魔法世界の住人でもないぞ？」

エヴァ「では、どこだ？」

真紅狼「所謂、異世界ってやつだ。」

エヴァ「異世界だと！？」

真紅狼「そ、俺の世界では、魔法使いや吸血鬼なんていない。科学
だけで進化していった世界の出身なんだけどね。そこで死んで、こ
の世界に転生したのさ。」

エヴァ「なんで死んだんだ？」

真紅狼「男の子を助けるために代わりに死んだのさ。」

エヴァ「そうか・・・」

真紅狼「だけど、この世界に転生してよかったよ。エヴァに逢えた
し。」

エヴァ「・・・ハ？」

真紅狼「俺さ、多分エヴァのこと好きだと思っただよな。」

エヴァ「ななななな、なんでそのような理論にいきつく！？」

真紅狼「好きでもない奴の家に警戒心もなく泊まると思うか？普通
あり得ないだろ。」

エヴァ「まあ、確かに・・・」

真紅狼「それにこのあと求婚するつもりだったし。」

エヴァ「求・・・婚・・・？（ボフンッ！）」

エヴァは顔が真っ赤になっていた。可愛いなあ。

エヴァ「だいたい、年の差があるし、お前はましてや吸血鬼でもないじゃないか!!」

真紅狼「年なんざ関係ないだろ、愛していいや。それに俺不老不死だぞ?」

エヴァ「じゃ、お前も吸血鬼なのか?」

真紅狼「吸血鬼じゃないけど不老不死だな。もしエヴァが望むなら俺を吸血鬼にしてくれても構わないぞ。」

＼真紅狼 side out＼

＼エヴァ side＼

正体は異世界の人間だと!?

まあ、納得できるか……。 “鋼糸”なんて武器この世にあるわけないしな。

色々聞いていくうちに真紅狼がいきなりトンデモナイ発言をした。

真紅狼「求婚するつもりだった……」

『求婚』だと……!!?

おおおおお、落ち着け、私よ。そうだ、素数を数えよう。数えて安静させよう。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8…… (それは整数だぞ! by

作者)

ええい、うるさい!!

そのあとにさらに爆弾が投下された。

真紅狼「愛していいや……」

愛だと!?

ぶしゅ~~~~~ 思考停止中………

再起動するまで少し待ってね!!

再起動完了!!

ハッ！私はいつたい・・・？

確か、真紅狼に愛していると言われて、思考が飛んでいたような。というか、コイツよく平然と言えるな。結構、いい度胸している。もう、これ逃げ道ないんじゃないか？

だって、コイツ、「私が望むなら吸血鬼にしても構わない。」と言ってくるんだぞ。ぶっちゃければ、「エヴァの為なら人外だろうがなんだろうがなってやる。」と同じ意味だ。

真紅狼は私が正体をバラした時も『一人の女性』として扱ってくれたな。

魔法世界では私のことを皆、『化け物』と言つて忌み嫌ってきた、もしくは殺そうとしてきたのに真紅狼は「そんなこと関係ない。」と言いたそうな表情をしていたな。

・・・ああ、そんなときからか。私は真紅狼に好意を寄せていたのかもしれないのか・・・
まったく、コイツには敵わないな。

＼エヴァ side out＼

＼真紅狼 side＼

エヴァは一人で様々な表情を見せていた。

・・・思考停止もしていたけど・・・

さて、はつきりとエヴァに言うか。

真紅狼「エヴァ。」

エヴァは突然の呼び声に驚いていたが、落ち着きながら返事をした。
エヴァ「ひゃ、ひゃい!？」

真紅狼「大丈夫か？俺はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという女性を愛している。周りが何と言おうと俺はお前を一人の女性として見ている。・・・だから、俺と結婚してくれないか？」

＼真紅狼 side out＼

関連の人間しかいないときは『真紅狼・A・マクダウエル』って名乗るさ。」

そこに今まで黙っていた人物が喋った。

茶々丸「結婚おめでとう御座います。マスター、真紅狼さん」

エヴァ「!？」

真紅狼「おう、ありがと。茶々丸」

???「ケケケ、オレノ知ラナイ所デメタイ事をヤツテイルジャネーカ、御主人ニ旦那。」

エヴァ「チャチャゼロ、お前も冷やかに来たのか。」

真紅狼「チャチャゼロ？」

チャチャゼロ「ヨウ、旦那。初メマシテダナ。御主人ノ従者ヲヤツテイル、チャチャゼロダ。」

真紅狼「お、ご丁寧にどうも。俺は真紅狼・A・マクダウエルだ。キティの夫だ。」

エヴァ「堂々と言われると恥ずかしいんだよ!」「ポカッ!」「頭を叩かれた。なんで？」

真紅狼「キティ、こんなことで恥ずかしがっていたら、この先身が持たないぞ?」

エヴァ「どうして、お前はそんなに平気なんだ!？」

真紅狼「俺、おかしいのか?」

と茶々丸とチャチャゼロに聞いてみたら・・・

茶々丸・チャチャゼロ「いや、ぜんぜんおかしくありません(ナイゼ)」「」

エヴァ「私か?私がおかしいのか!？」

真紅狼「ま、それは置いといて、結婚祝いにキティに渡したいモノがある。」

エヴァ「え!？な、なんだノノノノ」

真紅狼「キティ、なんか“登校地獄”っていう呪いに掛かっている

らしいな？」

エヴァ「え、あ、ああ。それがどうした？」

真紅狼「指輪はまだ用意出来ていないが、代わりにコレで勘弁してくれ」

と言つて、神に貰った魔法薬を取りだす。

エヴァ「なんだ、この魔法薬は？」

真紅狼「呪いを解く魔法薬」

エヴァ「ほ、本当か!？」

真紅狼「ああ、本当だ。飲んだ後、外に出てみたらどうだ？」

と言ったあと、キティはぶんどり一気に飲んだ後、学園の外に出れるか試しに行き、戻つて来た。その時の表情はメチャクチャ可愛かった。

エヴァ「ありがとう！真紅狼!!」

と抱きついてきた。

真紅狼「呪いが解けたってことはまだ学園長達には黙っていた方がいいな。」

エヴァ「何故だ？」

真紅狼「バレたら説明しろとかでうるさそうだし。結婚したこともだな。」

エヴァ「あー、確かに五月蠅そうだな。わかった、黙っておく。時期を見てバラすか。」

真紅狼「ああ、そうしよう。キティに頼みがあるんだが・・・」

エヴァ「なんだ？」

真紅狼「出来れば、学園側にバレないで広い空間ってないかないよな、そんな場所。」

エヴァ「あるぞ？」

真紅狼「え!？」

エヴァ「これだ・・・」

真紅狼「なにこれ？」

エヴァ「ダライオマ球と言ってな。別荘に近いモノだな。ほら、近くによつてじつとしてるよ?」

と言つて近くに寄つた後、急に景色が変わつた。

見渡す限り、蒼い空が広がっていた。

エヴァ「どうだ、真紅狼?」

真紅狼「ワーオ!」

と言つた後、浜辺に行き、魔法の力を試した。

出てきた後、夕食を食べた後、俺とキティは夜を楽しんだ・・・

正体から結婚へ（後書き）

やっちまったが後悔も反省もしていない。
最後の文は各自ご想像に任せます。

パイレーツ4を見に行った。

面白いか？と問われると微妙だが内容としては濃い内容だったと思う。

図書館島で一波乱があったらしいぞ

＼真紅狼 side＼

真紅狼「・・・フウ、スッキリした。」

と俺は汗を流していた。

なんだ、その目は。お前だよ、この文章を呼んでいるそのお前に言ってるんだよ。言っておくが、今、鍛錬をした後だからな？

違うことを考えた奴は表に出る。メルトンを10発喰らわせてやる。

茶々丸「おはようございます。真紅狼さん」

真紅狼「おう、いつも早いな。茶々丸」

エヴァ「・・・zzz」

真紅狼「んで、愛しのキティはいつもギリギリまで寝ていると。ま、いいか。茶々丸、朝食作るの手伝ってくれ」

茶々丸「わかりました。」

作った後、キティを起こしに行き、キティたちより早く出て、学校に着いた。

一応、先生だしな。

＼真紅狼 side out＼

＼ネギ side＼

「起立——、気をつけ——、礼——。」

「「おはようございます」「」

「着席——」

ネギ「じゃあ、一時間目を始めます。テキスト・・・」

とネギはテキストに書かれている。英文をスラスラと読んでいた。

英語はやはり、ネイティブにかぎるな。

ネギ「今のところを誰かに訳してもらいたいんですが・・・」

と言ってクラスを見渡した瞬間、一部を除いた後の女子は顔を逸らした。

ちよつとマテ、今の逸らして学力が分かった気がするんだが気のせいか？

ネギ「じゃー、アスナさん」

アスナ「なんで、私なのよ!？」

あやか「アスナさん、分からないんですわね？」

アスナは間違いながらも訳したが単語の意味が分からないのか、黙ってしまった。

まあ、最初はあながち間違っていないし。完璧とは言えないが少しずつ訳していったことは良いやり方だな。単語の意味は違うが・・・アドバイスをしようと思つて喋ろうとした時、ネギがふざけたことを言った。

ネギ「ぷつ、アスナさん英語ダメなんですねぇ・・・」

と言つたあとクラスの皆から笑われていたので、我慢できず言つてしまった。

真紅狼「なあ、今のどこがおかしいんだ？」

ネギとクラス全員「1」「え?」

真紅狼「人には得意不得意つてのがある。それも分からないのか? だいたい、今回は神楽坂が当たつてしまつたが、他のヤツが当たつていたかもしれないだぞ。特に顔を逸らした連中、お前らに言つてんだ。出来る奴も同様だぞ。お前らだつて何かしら不得意なものはあるだろうが、それを笑われて、愉快になれると思うか? 慣れないだろ。それを笑うんざ、はつきり言つて人間として最低だぞ。・・・あとで笑つた奴は神楽坂に謝っておけ。分かつたな?

神楽坂も御苦労、だがもう少し単語を覚えるように」

アスナ「あ、はい」

キンコーンカーンコーン

真紅狼「では、授業は終わりだ。」
といい俺はクラスを出た。

???「蒼騎先生」

真紅狼「はい、えーとどちらさまでしょうか？」

???「指導教員のしずなです。」

真紅狼「あ、ご丁寧にどうも。蒼騎 真紅狼です。」

しずな「ネギ先生はいますか？」

真紅狼「ネギなら教室にいます」「ガラッ」

ネギ「あ、蒼騎先生にどちらさまですか？」

真紅狼「指導教員のしずな先生だ」

しずな「よろしくね？ネギ君」

ネギ「はい、よろしく願います。」

真紅狼「しずな先生は何か用事があつたのでは？」

しずな「ええ、ネギ君。これ学園長から・・・」

『ネギ君へ次の期末試験で2-Aが・・・できたら正式な先生
にしてあげる。』

というなんとも舐めた文章だな。

ネギ・しずな「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ネギ「な、なんだ簡単そうじゃないですか——」

しずな「そ・・・そう？」

ん？なんか含みのありそうな返事だな。

「ネギ side out」

「真紅狼 side」

真紅狼「しずな先生・・・」

とネギに聞こえないように聞いてみた。

しずな「なんですか？蒼騎先生」

真紅狼「真紅狼でいいですよ。まさか2-Aの成績って・・・」

しずな「ええ、懸念通り最下位ですよ。」

真紅狼「・・・これは大変ですね。」

マジかよ・・・

取り敢えず、魔法の力に頼らず頑張ってみろ、ネギ。

「か、何でもかんでも魔法に頼ってんじゃねー!!」

コイツ、秘匿する気あんのか!?

まあ、いいや。出来なかったらそこまでだった。ということになるし。

見極めさせて貰おうかね。

「真紅狼 side out」

その夜、女子寮の大浴場にて・・・

根の葉もない噂が飛び交ったのを真紅狼は知る由もなかった。

「バカ共 side」

夕映「私たち麻帆良学園『図書館探検部』なのです。」

と図書館島に入ったバカ共7人は『魔法の本』を手に入れるために図書館島最深部に向けて出発した。

アスナ「よし、私も試験でバイト休みだし!手に入れるわよ『魔法の本』!!!」

まきえ「やっぱりココ、こわいよー。止めた方が・・・」

このか「大丈夫。ベテランのウチらに任せとき」

古菲「遠足気分アルねー」

楓「んー」

ネギ「(うーん、でもそんな都合のいい魔導書が日本の図書館なんかにあるのかなー?)」

と疑問を抱くネギであったが勢いに押されてそのまま疑問が消えていった。

夕映「では、出発です!」

バカ共6人「oooooooooooo!!!」

その後、行方不明になった。

バカ共 side out

真紅狼
Side

朝、ネギが職員室に居なかったので、授業までには来ると思い。代わりにSHRをすることにした俺は2-Aの教室に入った。中々なんか騒いでいたけど・・・

真紅狼「ガラッ！」おい、SHR始めるぞ。全員席に付け。」

あやか「あら、蒼騎先生。ネギ先生は？」

真紅狼「いやー知らね。職員室に居なかったんだよなー。寝坊じゃないか？先生と言つても、まだ10歳だし。体力が付いていかんだろ。」

あやか「そうかもしれませんね。」

真紅狼「ところで、バカレンジャーと近衛、宮崎、早乙女はどうした？」

あやか「いえ、知りません……」

ドタドタドタ！！

ガラッ！！

ハルナ「皆、大変だよ!!」

真紅狼「遅刻だぞ。早乙女に宮崎、席に付け。」

ハルナ「そんなことよりも大変です！ 蒼騎先生！！」

真紅狼「なにがだ。」

ハルナ「ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……！！」

真紅狼・あやか「……は？」

雪広は青ざめていたが、俺の方がダメージはデカかった。
あやか「蒼騎先生。・・・!？」

そのとき俺は手を地に付けてorzの状態になっていた。
真紅狼「なんで、行方不明になるんだよ・・・」

エヴァから念話で話しかけてきた。

エヴァ『真紅狼、大丈夫か？』

真紅狼『・・・大丈夫じゃない、結構ダメージがキてる。取り敢えず、ジジイのところに行ってくる。』

エヴァ『わかった』

と念話を終え、副担としてすべきことをした。

真紅狼「あー、取り敢えず全員席に付け。俺が搜索してくる。ネギの授業は自習だ。ここに俺が作った簡易テストがある、コレをやってくれ。一応、期末テストで出そうな問題を似て作ったヤツだ、やっておいて損はないぞ。一教科につき10問。基礎が分かっていれば基本的に解ける問題ばかりだ。最後の問題だけは応用編だが、コレも基礎さえ出来ていれば簡単な問題だ。答えも置いておく。分らなかった問題は復習しておくこと!・・・じゃあ、委員長あとは頼むぞ?」

あやか「わかりました。」

と言って俺はジジイのところに向かった。

真紅狼 side out

学園長 side

昨日、図書館島にてネギ君たちを一番下まで落としてしまったが、そこで試験勉強に勤しんでくれている。

テスト前には帰ってもらうが・・・

と考えていたら、いきなりドアが突然開いた。

そこには修羅が立っていた。

「学園長side out」

「真紅狼side」

真紅狼「ジジーーーーー!!」

ノックなしに訪問。・・・あ？マナーは守るべき？コイツにはいらないよ!!

学園長「な、なんじゃ!？」

真紅狼「取り敢えず、質問に答えろや？」

学園長「う、うむ。」

真紅狼「バカ共が行方不明になったって聞いたがどこにいる？」

学園長「図書館島の一番下。」

真紅狼「なんで、そんなところに行った？」

学園長「頭がよくなる『魔法の本』を探しに。」

真紅狼「ハア!？」

よし、取り敢えずこのジジイの頭をスライスから始めるか・・・
雰囲気はやくなったのを感じたのか学園長は慌てて言った。

学園長「だ、大丈夫じゃ!!ちゃんと、無事だしテスト前には帰す!!」

真紅狼「・・・そうか。なら、任せるぞ。」

と言って帰った。

「真紅狼side out」

二日後の朝・・・

ちゃんと帰って来た。

テストも受け、2-Aは学年一位を取りトップの証であるトロフィーもらい、ネギ・スプリングフィールドは4月より正式な「教師」となった。

図書館島で一波乱があったらしいぞ（後書き）

筆が進むぞー！ー！！

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 前編（前書き）

多分、コレが終わったら新たにキャラ設定を作るか

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 前編

「エヴァ side」

新学期になったことだし、「例の計画」を始めるか。

フフフ・・・、楽しみだよ。ネギ・スプリングフィールド

真紅狼「なにニヤけているんだ？」

エヴァ「ん？ニヤけていたか？」

真紅狼「ああ」

エヴァ「いや、新学期になったし、ばーやに「挨拶」をしておこう
と思っ
てね。」

真紅狼「あー、確か呪いを掛けたのって、奴の親父だっけ？でも、
呪いは解けただろ？」

エヴァ「呪いは解けたが、結界がまだあるんだよ。この学園を守っ
ている結界が私の力を封じているんだ。」

真紅狼「結界なら電力に頼ってるぞ？」

エヴァ「は？」

真紅狼「いやな？魔法薬を上げた時にちょっとキティのことを調べ
たんだが、学園結界だっけか？それを起動してるのは科学の力で補
っているんだよ。」

エヴァ「本当か！？」

と詰め寄って来た。首が苦しい。

真紅狼「しかも、その事を知られないように認識阻害の術も張って
あったしな。」

エヴァ「あのジジイ！！」

あー、こりゃ完全に頭にきているな。

真紅狼「で、どうすんだ？」

エヴァ「呪いは解けているが、苦い思いをしたから八当たりだが戦
ってもらっさ。」

真紅狼「手伝いは？」

エヴァ「大丈夫だ。」

真紅狼「わかった、この件に関してはどちらにも手を出さず、見守ることにするよ。まあ、関係者以外が手を出してきたら、手を出させてもらうがな。」

エヴァ「ありがとう、真紅狼」と良い笑顔だった。

真紅狼「・・・さて、学校に行くぞ／＼／＼／＼／＼」

真紅狼が照れていた。顔を背けていたが、横から見ると微かに顔が赤くなっていた。ちよつと新鮮だった。

そんなことを思いながら、私たちは学校に行った。

＼エヴァ side out＼

＼ネギ side＼

「三年」

「A組」

「『ネギ先生ー！』」

ネギ「これから一年間よろしくお願いします。」

まだ全然話したことのない人たちがたくさんいるなあ、一年間で全員話せるかな。

ゾクッ！

！！

なんだろう、この鋭い視線は？

ネギ「（あの娘は・・・エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん——。困った時、相談しなさいって書いてある。」

しずな「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3-Aのみんなも用意してください。」

と言った後、俺は殺到を使いながら外に出た。力の無駄使い？そんなもの知らん！！

ネギ「それじゃー皆さん、えと脱いで準備・・・ハッ！」

みんな、こつちをみて顔を赤くしながらニヤけてる。

というか、いつの間にか蒼騎先生が居ない!?

ネギ「すみませ〜ん!」

「ネギside out」

「女子ズside」

キヤイキヤイ!!

ガヤガヤと騒がしながらも身体測定を測っていく3-Aの女子ズ。

和泉「先生——っ、大変や——っ、まき絵が……まき絵が——」

そこにクラスメイトの危機に聞いた下着状態の3-A女子ズ。

取り敢えず、服を着ろ。

保健室……

ネギ「どーしたんですかまき絵さん!」

しずな「なにか桜通りで寝てるところを見つかったらしのよ……」
と聞いた後、その時のことを各々勝手に想像していた。

その中で一人、ネギだけは気付いたようだ。

ネギ「(いや、違っぞ!ほんの少しだけど、確かに『魔法の力』を感じる……まさか!?)」

そのあと、俺の方に寄ってきて小声で言ってきた。

ネギ「(真紅狼、若干ながらですが『魔法の力』を感じます。もしかしたら、この事件の犯人は魔法使いかも……。)」

真紅狼「(へえ、ネギ……。キミも気が付いたんだ。ああ確かにこの事件の犯人は魔法使い《……》だな。)」

ネギ「(やつぱり、気が付いていたんですか。夜の見回りの強化をお願いしたいんですが……。)」

真紅狼「(まあ、見回っておこう。)」

「女子ズside out」

「ネギside」

夜、僕は噂の桜通りに居た。犯人を見つけるためだ。しばらくすると、奥の方で悲鳴が聞こえた。

「???」27番宮崎 のどかか……。悪いけど少しだけその血を分けてもらうよ」

と襲いかかろうとした時だった。

ネギ「待てーっ」

「???」!」

ネギ「ぼ、僕の生徒に何をするんですかーっ!!!ラス・テルマ・スキル」

『風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ 魔法の射手・戒めの風矢!』

「???」もう気付いたか……」

『氷楯……』

バキキキンッ!!

ネギ「僕の呪文を全て跳ね返した!?」

やつぱり、犯人は魔法使い!?

「???」くっ、驚いたぞ凄まじい魔力だな。」

と言って、帽子が飛ばされ、素顔が露わになった。

ネギ「き、君はウチのクラスのエヴァンジェリンさん!？」

エヴァ「新学期に入ったことだし改めて歓迎のご挨拶と行こうか、先生……。いや、ネギ・スプリングフィールド……。さすがに奴の息子だけはある。」

＼ネギside out＼

＼エヴァside＼

さて、今回の標的は。っと宮崎のどかか。

エヴァ「（真紅狼、それでは始めるぞ？）」

真紅狼「（はいよ、氣いつけてな。あと、ネギがその辺をうろついてるから、もしかしたら逢うかもしれない）」

エヴァ「（わかったよ。ところで真紅狼はどこで見てるんだ？）」

真紅狼「（世界樹）」

???「27番宮崎 のどかか……。悪いけど少しだけその血を分けてもらつよ」

ネギ「ぼ、僕の生徒に何をするんですかーっ！！ラス・テル マ・スキル」

『風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ 魔法の射手・戒めの風矢！！』

???「もう気付いたか・・・」

『氷楯・・・』

エヴァ「さすがに奴の息子だけはある。」

＼エヴァside out＼

＼真紅狼side＼

エヴァとの念話も終わり、世界樹で見ている俺は初めてこの世界の魔法を目にした。

真紅狼「おお！あれが、『この世界』の魔法ねえ。スゲーな、オイ。・・・なあ、そう思わないか。そこのお二人さん？」

???「!?!」

と俺は後ろで大太刀を抜こうとしている少女と二丁拳銃を持っている少女に言った。

真紅狼「さて、桜咲に龍宮。俺に何か用かな？」

桜咲「ええ、蒼騎先生。貴方は何者ですか？返答次第では・・・」

龍宮「待て、刹那。話ぐらいした方がいいだろう。」

真紅狼「・・・ふむ。何者って言っても、『魔法』の存在を知る、ただの魔法先生だが？」

龍宮「ふざけないで答えて欲しい、何分相方はちよつと気が短くてね。私が目を閉じている間に先生を斬り伏せているかもしれないんだ。」

真紅狼「ハッ、オマエラ如きじゃ、俺を斬ることなんざ到底無理だな。顔洗って出直せ。」

そう挑発したら、我慢の限界だったのか桜咲が殺気を飛ばしながら、得物に手を掛けた。

真紅狼「オイオイ、コレぐらいの挑発をかわせなきゃ、お前の言う

『お嬢様』も守れんぞ？」

桜咲「・・・斬る!!」「蛇剎・・・」

とそれだけを言い、俺の懷に潜り込んできた。

そのまま、横に薙ぎ払おうとしたが、その時には桜咲は空中に浮いていた。

『牙昇脚』

桜咲「ぐあ!?!」

龍宮「刹那!?!」

真紅狼「これで、わかったか？手を引いてくれると有難いんだが・・・、なら誓おうか？この件にはエヴァと契約していてな、干渉しな

いことになっているんだよ。」

龍宮「・・・証拠は？」

真紅狼「この状況が証拠だが？エヴァとの戦いに今も見ていただけだし。」

龍宮「・・・解りました、今回は信じます。」

真紅狼「そいつはどうも。」

龍宮「私たちはコレで引きます。・・・最後に、貴方はどちらの味方ですか？」

真紅狼「どちらだと思う？」

龍宮「学園側だと私は信じてます。では、失礼します。」
といいそのまま去った。

厄介な者に目を付けられたな・・・
ただ、今はそう思うだけだった。

＼真紅狼 side out＼

＼ネギ・エヴァ side＼

エヴァ「この世には・・・いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ、ネギ先生」

『氷結・武装解除！！』

といい、エヴァは魔法薬を触媒に呪文を唱えていた。

ネギ「うあっ」

パキイン！

エヴァ「抵抗したか・・・やはりな。」

そんなことを呟きエヴァは煙に紛れて姿を消し、この場から去った。
そのあと、心配になったアスナとこのかがその場に現れた。

一瞬だけ、アスナがエヴァを見たが、煙ですぐに消えてしまった。

ネギはアスナとこのかに宮崎を任せ、エヴァの後を追った。

ネギ「いい魔法使いと悪い魔法使いがいるだって……!?世のため、人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろ!」
と言いながらも、頭の中ではエヴァが言っていた言葉の事を考えていた。

エヴァ「はいい……そう言えば坊やは風が得意だったな。」
と言い橋から飛んでいた。

ネギもその後を追った。

ネギ「待ちなさい!エヴァンジェリンさん、どーしてこんなことするんですかー、先生としても許しませんよー!」
エヴァ「先生、奴のコトを知りたいんだろ?奴の話を聞きたくないのか。私を捕まえたなら教えてやるよ!」

ネギ「……その言葉、本当ですね?」

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル 風精召喚!! 剣を執る戦友!! 捕まえて!!』

エヴァ「(風の中位精霊による複製……しかも、8体同時召喚か!!……なるほど、10歳の見習いとは思えん魔力だな。)」
ガキキン!!

エヴァは魔法薬を投げつけ迎撃したが、全てを撃ち落とすことは出来なかった。

そのうちの一体がエヴァに当たり、体勢を崩した。

ネギ「追い詰めた!これで終わりです。『風花・武装解除!』」
エヴァ「お前の親父……『サウザンドマスター』のことか……」
ネギ「と、とにかく魔力もなく、マントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ!!それにもうすぐ、蒼騎先生も駆けつけます。素

直に・・・」

エヴァ「フハハハハ・・・！！これで勝ったつもりか？それに・・・」

と言ったときにエヴァの後ろに一人降りてきた。

ネギ「（新手！！仲間がいたのか。仕方がない、二人まとめて）ラス・テル・マ・スキル・・・」

『風の精霊11人縛鎖となりて敵を捕まえろ・・・サギいてっ！！』
デコピンにより、失敗した。

ネギ「あ、あれキミは僕のクラスの・・・」

エヴァ「3-A出席番号10番“魔法使いの従者”絡繰 茶々丸だ。パートナーのいないお前じゃ私には勝てんぞ。」

ネギ「パ、パートナーがいなくても！！『風の精霊11人・・・』」
と詠唱したが全て、茶々丸に塞がれてしまった。

エヴァ「元々、“魔法使いの従者”とは戦いのための道具だ。我々魔法使いは呪文詠唱中、完全に無防備となり攻撃を受ければ、完成は出来ない。そこを盾となり剣となつて守護するのが従者の本来の使命だ。つまり、パートナーのいないお前は我々二人には勝てないということさ。」

ネギ「そそそそんな~~~~。知らなかったよー！！」

エヴァ「奴に掛けられた呪いはもう解いてあるが・・・15年間も苦汁を味わったんだ、ツケとして、血を吸わせてもらう。」

カプツ。

とネギの首筋を噛み、血を吸っていた時、乱入者が登場した。

???「コラーっ！この変質者どもーっ！！ウチの居候に何すんのよーっ！！」

と足蹴りが炸裂。

ていうか、今魔法障壁ブチ抜かなかったか？

エヴァ「か、神楽坂 明日奈！！」

アスナ「あ、あれー？アンタ達が犯人なの！？」

やれやれ、しょうがない回収するか。

真紅狼「さて、御兩人そこまでだ。」

と双方の間に入り、場を制した。

エヴァ・ネギ「！？」

ネギ「蒼騎先生、遅いじゃないですかー！！」

エヴァ「真紅狼、何故ココに？」

アスナ「あ、蒼騎先生！？」

ネギ「蒼騎先生、今回の犯人はエヴァンジェリンさんです！！とらえ」

え」

真紅狼「この事件がエヴァが犯人つてのは最初から知ってたさ。」

ネギ「なら、なんで言ってくれなかったんですか！？」

真紅狼「エヴァ、言ってやってくれ、俺の言葉じゃ信じねーから。」

エヴァ「いいのか？関係を悪くするぞ？」

真紅狼「構わねえよ」

エヴァ「よく聴け、坊やに神楽坂 明日奈。 真紅狼はこちら側・・・つまり、私たちの仲間だ。」

真紅狼「まあ、安心しろ。この件にはエヴァとの契約で干渉しないことになっている。俺はただ見守ることだけさ。・・・さて、もう遅い。話がしたくば明日、学校が終わった時に話そうじゃないか。エヴァ帰るぞ。蹴られた場所は帰ってから冷やせばいいな。」

エヴァ「ん。」

＼ネギ・エヴァ side out＼

ネギを見てみると、今の状況がさっぱり読みこめていなかった。

真紅狼「神楽坂、ネギ。明日遅刻するなよ？」
俺は綱糸を張り、その場を後にした。

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 前編（後書き）

あー、一話で終わりませんでした・・・
スンマセン！！

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 中編（前書き）

省く部分がおかしいと思いますが、許してください

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 中編

＼ネギside＼

昨日の一件以来、僕は悩んでいた。

今時間は朝の8時を過ぎていたが、学校には行きたくなかった。

なんせ、学校に行けば嫌でも、エヴァンジェリンさんと蒼騎先生に出会ってしまうから休もうとしたが、アスナさんによって強引に連行されて教室に入った。

アスナ「みんな、おはよー！！」

ネギ「あゝゝゝ、まだ心の準備がゝゝゝ！！」

と言つて教室を見たら、エヴァンジェリンさんと蒼騎先生はいなかった。なので少し落ち着いた。

茶々丸「マスターは学校に来ています。すなわちサボタージュです。」

「

ネギ「わ、わああ！？」

茶々丸「・・・お呼びしますか、先生？」

ネギ「いいです！いいですっ！！」

そんなこんなで授業が始まり、この問題に頭を悩む僕はクラスを見渡し運命的なパートナーがいるか見てみるが騒ぎはじめたので話を切った。

ネギ「では、授業を終わります。」

と言つて無気力に動き、ドアにぶつかりながらもクラスを出た。

＼ネギside out＼

＼エヴァside＼

学校に来たが、授業に出るつもりはなく屋上で寝ていた私は目が覚めると、隣に真紅狼が寝ていた。

アレ？コイツ先生なのにサボっていいいいのか？

真紅狼「サボっても大丈夫さ。」

心を読むなよ・・・

真紅狼「今日は新田先生に広域指導員の方を優先するから、休むって言うておいたし。」

エヴァ「そうか」

真紅狼は仰向けになりながら寝ていたが、すぐさま起きあがった。

真紅狼「・・・？」

エヴァ「どうした？真紅狼」

真紅狼「今、学園に何かが通り抜けた・・・けど、魔物じゃないな。小動物だな。イタチかな？この感じは・・・」

まあ、害はないし。大丈夫だろ。と言っていた。

私は多少気にはなったが、だるかったので考えるのを止め、真紅狼とのんびり過ごした。

＼エヴァ side out＼

そのあとネギにはウェールズからの親友(?)が来て、アドバイザ―になったとかなにやらの出来事があった。

次の日・・・

＼ネギ side＼

朝、学校で辺りを見渡していた。

カモ「何をキヨロキヨロしてんだ、兄貴？」

ネギ「いや、ちょっとね・・・」

カモ「困りごとなら相談に乗るぜ、兄貴!!」

ネギ「じ、実はね、カモ君ウチのクラスに問題児・・・」
と言いかけようとしたとき、その人物が現れた。

エヴァ「やあ、おはようネギ先生。今日ものんびりサボらせてもら
うよ」

僕はいきなり声を掛けられ、咄嗟に杖に手を掛けた。

エヴァ「おっと、勝ち目はあるのかい？ ついでに、タカミチや学園
長に助けを求めるなよ？ 生徒を襲われたくはないだろ？」

悔しいが正論だった。全く言い返せない僕は逃げてしまった。

そのあとカモ君からあの二人に勝つ方法を教えてもらった。

気のりはしないが・・・でも、次の満月までにやり返さないとこの
ままじゃやられるし、先生失格になっちゃうかも・・・？

ネギ「カモ君、僕やるよ！！」

カモ君「よし！ その意気だぜ兄貴！！ さっそく実行だ！！・・・と
その前に姐さん仮契約お願いするッス！！」

一応、仮契約をし実行に移った。

「ネギ side out」

「茶々丸 side」

高畑先生が学園長からの伝言をマスターに伝え、マスターは高畑先
生と共に学園長室に向かいました。

私はマスターの命令通りに人目のあるところを歩き回ることにしま
す。

その途中で、女の子や老人、流されている子猫を助けながら歩き回
りました。途中、教会の鐘が鳴り響いた時、私は野良猫たちが隠れ
住んでいる場所までいき、餌を上げていましたが、後ろを見ってみ
ると、ネギ先生と神楽坂 明日奈さんが立っていました。・・・どう
やら付けられていたようですね。

茶々丸「・・・油断しました。ですが、お相手します。」

ネギ「あの茶々丸さん……。僕を狙うのは止めていただけませんか？」

茶々丸「申し訳ありません、ネギ先生。・・・マスターの命令は私にとっては絶対なので」

ネギ「行きます！！」

『契約執行10秒間！！　ネギの従者「神楽坂　明日奈」』

といったあと、アスナさんは一般人とは思えないスピードで迫ってきました。

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル』

アスナさんと手を弾きあつた後、もう一方の手でデコピンをしてきました。

茶々丸「はいい！」

私はそのあとアスナさんの足払いをし、体勢を崩させて、後ろに下がった時には、横でネギ先生が呪文を完成させ、こちらに飛ばしてきました。

『光の精霊11柱、集い来りて、魔法の射手　連弾・光の11矢！
！』

回避はできませんね。追尾型魔法でしかも多数接近。このままでは直撃で「死」にますね。

怖くはありません。元より私はロボットいつか壊れる日がやってくるもの。それがただ早まっただけ。

マスターは悲しむでしょうか。でも、真紅狼さんが居るから一人にはならないですね。・・・できれば、真紅狼さん、私が居なくなつた後に猫の餌を・・・。

と思っていた時には目の前はサギタ・マギカが私に直撃した。

「茶々丸side out」

「真紅狼side」

俺は世界樹の枝の上で昼寝をしていた。もちろん人に視えない高さまで登っているぞ。

そんな中、ネギ達が茶々丸を付けているのを鋼糸で感じ取った。なにやらただならぬ雰囲気だったが、手を出さないと決めていたため見守ることにした。

少し開けた場所で、茶々丸VSネギ・神楽坂の戦いが始まった。

最初は見ていたが、ネギがサギタ・マギ力を放つのを見て、俺は急いで茶々丸の元に飛んだ。

真紅狼「くそっ！」

駆けつけた時にはすでに、目の前まで来ていたため無意識のうちに茶々丸を横に弾き飛ばした。

そして、俺は障壁も張らずに出たためかそのまま光に吞まれ意識を失った。

「真紅狼side out」

「茶々丸side」

何時までも魔法の矢が飛んでこず、自分の体が無事なことに気が付いた時目の前で倒れている人がいた。

真紅狼さんだった。何故、ここに？

取り合えず、起こそうと思った時真紅狼さんの体の至る所から「赤い」液体が流れてきた。

どこまでもどこまでも「赤い」液体が・・・。

最初は、理解できなかった。

何が起きている？

——真紅狼さんが倒れている。

何故？

——私を庇って。

何故、庇って？

——魔法の矢に撃たれそうになって。

魔法の矢は誰に当たった？

——真紅狼さんの体に至るところに

なぜ、なぜ、何故、何故何故何故！！

茶々丸「真紅狼さん！！何故、こんなことをしたんですか！？」

と大声で聞いたが、聞こえてくるのは「ゴホッ！」という血が口から吐き出された音のみだった。

真紅狼「ゴホッ！・・・なぜって・茶々・丸。お前たちと・があ！俺は『家族』だろ・・・う・・・？」

私は真紅狼さんを起こしたが想像以上に怪我が酷かった。

腹の両脇は決れ、足も火傷などの傷、左手は肉が抉られ骨のみでころうじて繋がっていた。

真紅狼「『家族』を・・・まもr・・・ことはあたり・・・まえ・・・だr・・・」

と言葉を紡いでいくがとうとう黙ってしまった。

ネギ先生の方を見てみると青ざめていて、アスナさんも一緒だった。私は真紅狼さんを抱え、マスターの元に急いで戻った。

（茶々丸side out）

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 中編（後書き）

凄い無理矢理に話をもっていた感じがする。

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 後編（前書き）

長いです。とにかく長い

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 後編

「エヴァ side」

家に帰ったが、茶々丸も真紅狼もおらず、暇を持て余していたら茶々丸が血相を変えて帰って来た。

エヴァ「どこでなにやっても「マスター！助けてください！！」・・・なっ！？」

茶々丸を見ると、制服がところどころ血で汚れていた。

抱きかかえられている者を見た時、一瞬意識を失いかけたが治療しなければという意識があつたためかすぐに動けた。

エヴァ「真紅狼！！大丈夫か！？」

真紅狼「・・・ああ、あらかた修復出来たが、左腕がイカレてる。

少し休めばなんとかなるだろ。すまないが・・・俺は寝させて貰う・・・zzz。」

エヴァ「・・・茶々丸、何があつたか全て話せ。」

茶々丸「・・・ハイ。」

茶々丸は全て話した。

ネギと神楽坂につけられ、勝負を挑まれたこと。

魔法の矢が回避不可の追尾型で私に迫ったこと。

そして、直撃だと思つたはずが真紅狼さんによって助けられ、代わりにダメージを負ったこと。

・・・真紅狼さんが意識を失う前に言ったこと。

エヴァ「そうか、真紅狼が私たちの事を『家族』と・・・か。茶々丸。」

茶々丸「はい、マスター」

エヴァ「奴らを潰すぞ。」

茶々丸「倒すのではなく？」

エヴァ「奴らは真紅狼・・・いや、家族に手を出した。その報いは受けてもらわなきゃならん。そうしないとわたしの腹が収まりきらん!!」

茶々丸「・・・真紅狼さんが止めてもですか？」

エヴァ「それでもだ。」

茶々丸「了解しました。マスター」

というやり取りがあつたあと。

マスターは真紅狼さんのそばから離れず、夜も一緒に過ごしていました。

翌朝、マスターは学校には行かないと言いましたので私だけ向かいました。

真紅狼さんの休みの理由は適当でいいと言われたので、多少融通のきく高畑先生にいました。

昼休みや放課後、ネギ先生や神楽坂さんが話したそうな雰囲気を出していましたが、マスターに「無視しろ」と命じられているため無視し、その後噂で学園メンテナスが二日後にあること聞き、マスターに伝えたところ・・・

エヴァ「二日後、・・・潰す準備をしておけ、茶々丸」

茶々丸「ハイ、マスター」

・・・真紅狼さん、もう止まらないんでしょうか？

「茶々丸side out」

「真紅狼side」

エヴァの治療を受けてから再び意識が落ちた俺はしばらくすると爺さん（神）によって乱暴に起こされた。

神「こりゃ、起きんかい！」

ゴチン！

堅い柄の部分で叩かれた、痛い。

真紅狼「痛え、何すんだ！？怪我人だぞ！！」

神「こうでもしないとお主は起きんじやろうが！！」

真紅狼「もうちょつと、やさしく起こせねえのかよ。」

神「無理じゃ。」

キツパリ言いやがった！！

真紅狼「で、なんのようだよ。ここに呼んだということは、なにか
報せがあるんだろう？」

神「う、うむ。まあその、な。」

なんだろう、爺さんにしては歯切れが悪い。

神「最初に言っておくが怒らんでほしいのだが・・・」

真紅狼「内容によるが・・・怒らせるような報せなのか？」

神「多分の。」

神が多分ってまた曖昧な・・・

真紅狼「取り敢えず、言ってみるよ。」

神「わかった、お主先程、死にかけたじやろ？「ああ」そのときに
理由は知らんが何故かお主の目が変わってしまったのじや。「は？」

こちらの世界でいうと『魔眼』しかもお主の知っている『魔眼』じ
や。「・・・」言いにくいんじやが、お主の目は『魔眼』の中でも

強烈にヤバいもの・・・『直死の魔眼』になってしまったのじや。

「・・・ハア！？」

なんと、死にかけたせいで直死の魔眼になりました。・・・マジ
で？

真紅狼「マテマテマテ、おかしいだろ！どうしてそうなる！？」

神「ワシも分からんのじや。」

目を開いてみると、背景や爺さんに『線』と『点』がはっきり見え
ていた。

はつきりいって気持ち悪い。吐きそうだ。

こんなモノをずっと見ていると発狂しそうだ。

『線』をなぞれば、容赦なくモノが『死』に『点』をつけば、無情にもモノは『消滅』する。

俺はフラつき、膝をついた。

神「大丈夫か？」

真紅狼「ああ、どうにか。だけど俺もこれでヒトの皮を被った「ナニカ」か」

神「なにか、必要な物はあるかの？」

真紅狼「じゃあ、『七夜』の体術と『七つ夜』を」

神「わかった。練習していくか？」

真紅狼「是非。・・・爺さん『衝動』の方は？」

神「ないぞ。ただし使いすぎると精神がイカレるから。気をつけよ。」

真紅狼「わかった。じゃあ、爺さん。一日くれ。そのあと自動的に帰してくれ。」

神「うむ。・・・スマンの。」

真紅狼「いいさ」

といい神の領域で『直死の魔眼』になれ、体術の方も我が物にした後、目が覚めたら、二日たった後の夜だった・・・

起きてみた後、近くのテーブルに書き置きメモを見た後、俺は急いで家を飛び出た。

（真紅狼 side out）

（ネギ side）

茶々丸さんとの戦闘後、僕はなにも出来なかった。

あのあと、自分が何をしたのかようやく理解したけど、カモ君の声でそんなことは頭の隅にいつてしまった。

カモ「兄貴、なんであそこで茶々丸も倒さなかったんですか！？マ

ズイツすよ！！エヴァンジェリンにパートナーの事が確実に伝わったスよ。」

ネギ「でも、あんなことやった後だったから、思考が追い付かなかったんだよ。」

カモ「う．．．それを言われちゃ何も言えないツスけど、あの蒼騎って言う奴だけでも敵を減らせたからよしとしましょう。」

ネギ「そうかな．．？今後どうしよう？」

カモ「取り敢えず、様子見になるんじゃないんスカね。」

それから、二日後の学園メンテナンスの日の夜、エヴァンジェリンさんから決闘を申し込まれ、待ち合わせの大浴場に向かった。

自慢の魔法具をフル装備して．．

＼ネギside out＼

＼エヴァside＼

二日後、私は力が戻り計画を実行に戻した。

真紅狼は．．．二日間眠り続けた。

夜になっても起きなかつたので茶々丸に書き置きの手紙を書かせ、テーブルに置き、仕込んでおいた者を操って先生をおびき寄せる餌として使った。

＼エヴァside out＼

10分後．．．

＼ネギ・エヴァside＼

エヴァ「やあ、ネギ先生待っていたよ。」

ネギ「まき絵さん達を離してください！」

エヴァ「．．．その前に何か言うことがあるんじゃないか？」

ネギ「何をです？」

エヴァ「そうか、神楽坂も付いて来て欲しかったが、手始めに貴様

を潰すでしょう。・・・やれ、我が下僕たちよ。」

ネギは操られた四人に脱がされていた。・・・装備をダヨ？
なんとか、ネギは魔法薬を投げ、反撃した。

一瞬、四人からの拘束が解いた隙に無効化させるべく唱えた

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル 大気よ 水よ 白霧となれ 彼の者らに一時の安息を 眠りの霧』

と唱えた後、大河内と和泉を無効化に成功した。

エヴァ「フフ・・・やるじゃないか、この程度でくたばっては困るぞ。
ぼーや？茶々丸！」

茶々丸「ハイ、失礼します、ネギ先生」

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！』

ドッパアアン！！

茶々丸は腕をネギの居たところに振り降ろした、居た場所が風呂場だったため、水しぶきが上がっていた。

『氷の精霊17頭 集い来たりて敵を切り裂け』

ネギ「（マズイ、こんなところで撃たれたらひとたまりもない！）」

『魔法の射手 連弾・氷の17矢！！』

と17本の氷の礫がネギを襲ったが、当たる直前にネギは大浴場を脱出し、外に飛び出た。

地面と激突する直前で意識を戻し、杖で飛びながら余った魔法銃で

残りの矢を全て撃ち落とした。

エヴァ「ほう・・・魔法の道具のフル装備か、安くはなかるうに。」

ネギ「なんとかしてあの場所までおびき出さないと・・・」

所変わって、女子寮・・・

カモ「姐さん、兄貴を助けてやってくれ！エヴァンジェリンの奴と一騎打ちにしてるんすよ。」

アスナ「も～～あのバカ！！」

『氷爆！！』

ネギ「あうつ」

障壁を張りながら、ネギはある場所に向かっていた。

エヴァ「どうした、逃げるだけか！それなら、おとなしく倒されろ。」

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来れ氷精 大気に満ちよ

白夜の国の凍土と氷河を こおる大地！！』

学園都市の端にある橋を目指していたネギにエヴァの呪文が掠り、その拍子にネギはバランスを失い、橋に墜ちた。

エヴァ「これで、お終いだ。」

と言いながら、ゆっくりと倒れているネギに近づいていった。

ネギ「（あと少し、あと一歩で・・・）」

エヴァの足もとが光り、エヴァ達を拘束した。

エヴァ「捕縛結界か！！」

ネギ「もう動けませんよエヴァンジェリンさん、これで僕の勝ちです！大人しく観念して、悪いことも、もう止めてくださいね！」と捕縛結界に嵌ったことがよほど嬉しいのか、高々と言った。

エヴァ「・・・茶々丸」

茶々丸「ハイ、マスター。結界解除プログラム始動。すみませんネギ先生・・・」

ネギは急いで呪文を唱えようとしたが、茶々丸に杖を取り上げられ、失敗した。

エヴァ「ぼーや、お前は家族を傷つけた。その報いを受けてもらおう・・・」

と手を下そうとしたとき声がした。

???「こらーーーーー！待ちなさいーーーー！！」

エヴァ「フン、そちらから来てくれるとは都合だな、神楽坂明日奈。貴様にも報いを受けてもらうぞ。茶々丸！」

茶々丸「ハイ」

アスナ「カモ！！」

カモ「合点、姐さん、オコジョフラッシュュ！！」

カッ！！

手に持っていた、マグネシウムとライターで光を発生させ茶々丸を通り抜けたアスナはエヴァに向け飛び膝蹴りをかましていた。

盛大に吹っ飛んだエヴァは気が付いた時には、ネギ達の姿がなかった。

ネギ「アスナさん、僕、あの人に勝たなきゃ！」

カモ「姐さん、いくぜ！」

『仮契約！！』

エヴァ「そこか!!」

振り向いたときには二人立っていた。

そこに予想外の人物の声が聞こえた。

???「ちよいと待ってもらうぜ、その勝負。」

エヴァ・ネギ・アスナ「「え!?!」」

「エヴァ・ネギside out」

「真紅狼・エヴァ・ネギside」

真紅狼「ちよいと待ってもらうぜ、その勝負。」

エヴァ・ネギ・アスナ「「え!?!」」

エヴァ「真紅狼!?!傷は大丈夫なのか!?!」

真紅狼「スマンな、エヴァ心配かけた。大丈夫だぞ、これでも不老不死だぞ。」

ネギ「蒼騎先生……」

真紅狼「ネギ、キミが何をしたか、この二日間理解できたか?」

ネギ「……」

だんまりかよ。

真紅狼「この間の件でわかっただろ?キミたちがポンポン使う魔法は簡単に人の命を奪えるんだぜ?今回は俺が不死だったからいいものの障壁を持たない「やいやい、さつきからなんでいその言い草は!!」なんだ?」

カモ「アンタはエヴァンジェリン側なんだろ!学園の人間でありながら、エヴァンジェリンにつくとはどういう見だ?!」

真紅狼「俺は『正義の魔法使い』が嫌いなだけさ。この学園の魔法先生や生徒は『正義』をあたかも至上のように語る。『正義』やら『悪』などそんなものの物事の側面でしかない。……まったくもつてくだらないことだ。」

エヴァ「だが、しかしコイツは家族を真紅狼を傷つけた。その報いぐらいは受けさせても構わないだろう。」

真紅狼「もういいさ、これを機になんのために誰のために力を振るうのか考えてくれたら、俺はそれでいい。」

エヴァ「私には我慢できん！」

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！氷の精霊17頭 集い来たりて敵を切り裂け！魔法の射手 連弾・氷の15矢！！』

ネギ・アスナ「！？」

ネギたちに向かって氷の礫が飛んでいき、不意打ちの為、対応が遅れたネギ達は直撃しそうなとき、俺はその魔法を弾いき同時に『天覇絶槍』と呟いた。

エヴァ「どうして、邪魔をする？・・・真紅狼」

真紅狼「戦闘は終了のはずだが？・・・エヴァ」

といい武器 棲羽^{スパーダ}亜蛇と威斧^{イフリート}璃衣斗を装備した。

黒く禍々しい槍が片手に一本ずつ握られていて、小手にはどこまでも紅く炎を象った形をしていた。

（衣装はコスチューム2の方をイメージしてくれ）

ネギ「蒼騎先生、なんですかそれ？」

真紅狼「俺の戦闘方の一つだ。エヴァ相手だったら俺がやってやるよ。」

エヴァ「どうしてもか？真紅狼・・・」

真紅狼「どうしてもだ。・・・エヴァ」

エヴァ「なら・・・勝負だ！真紅狼！！」

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！！氷の精霊17頭 集い来たりて敵を切り裂け！魔法の射手 連弾・氷の29矢！！』

とさつきよりも多くして、真紅狼に飛ばしてきた。
俺は棲羽亜蛇を野球の要領で弾き返した。

真紅狼「オラア！！」
ガキーン！！

エヴァ・ネギ「なっ！？」
驚いているうちに拳に力を溜めた。
溜め終わり、最大で放った。

俺の虎炎を放つと同時にエヴァも技を放った。

『虎炎！』
『氷爆！』

俺の虎炎とエヴァの氷爆がぶつかり、お互いの技を消し合った。

真紅狼「くそっ！」
エヴァ「相変わらず予想外だな、真紅狼は！！先程の隙は与えないぞ！？」

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来れ氷精 大気に満ちよ
白夜の国の凍土と氷河を』
今のエヴァにとって最大の一撃だった。

真紅狼「（あれはやばいな・・・しょうがねえ、放つかBASSAR
A技。）」

『こおる大地！！』
『燃えよ、我が魂！！』
と言った瞬間、俺の槍から炎が噴き出て『こおる大地』を溶かしながら、エヴァに近づいていた。

エヴァ「ぐううう!!」

真紅狼「おおおお!!」

バキバキバキッ!!

シューウウ!!

炎が氷を溶かし、氷は炎を凍らせようとした。

が、いつの間にか、エヴァの元に来ていた俺は槍の先をエヴァの首元に突きつけていた。

真紅狼「我が槍に勝てぬものなし!!・・・さて、エヴァの俺の勝ちだ。」

エヴァ「ああ、そして私の負けだな。」

真紅狼「しかし、途中から楽しくなっちまったな」

エヴァ「ああ、よかった。」

完全に空気であるネギ達はようやく声を出した。

ネギ「あの、それで終わったんですか?」

真紅狼「ん?・・・ああ、終わったが、ネギ。キミにはまだ残っている仕事があるだろう?」

ネギ「へ?」

真紅狼「未遂とは言え、怪我させたんだから、謝罪するのは当然だろう?」

ネギ「あ!はい、すみませんでした。」

真紅狼「神楽坂、お前も止めることぐらい出来たはずだろ。」

アスナ「はい、すみませんでした。」

真紅狼「よし。・・・!」

俺は学園に何かが乗りこんできたのを察知した。

真紅狼「エヴァ!!悪いがコイツラを頼む!」

エヴァ「な!?!どこにいく真紅狼!!」

真紅狼「侵入者のところだ!!」

と言った後、鋼糸を飛ばし、飛んでいった。

＼真紅狼・エヴァ・ネギside out＼

＼????side＼

学園メンテナンスで停電時に学校に忘れ物をした私は、教室に取りにいった。

電気のない学園は不気味だったがそれを一層駆り立てるのは天候だった。

真っ黒い雲の間で微かに照らす月だった。

目的のものを持った私は帰ろうとした瞬間、化け物に襲われた。

????「なに・・・これ・・・?」

蜘蛛「ギチギチギチイイイ!!」

????「キヤアアアアアア!!」

私はこのとき「死んだな。」と思ったとき信じられない光景を目にした。

化け物がどこから現れたのか分からないが騎士によって真っ二つにされていたのである。

そのあと、聞き覚えのある声が空からやってきた。

????「大丈夫か!？」

＼????side out＼

＼真紅狼side＼

鋼糸で引つ張られている最中、侵入者の周辺を探っていたら、生徒が一人侵入者に出会っていた。しかもバカでかい蜘蛛だった。

真紅狼「（片手じゃ、守ることしか出来ねえ・・・ヤバイ!!）」

と思ったときには蜘蛛は動き、その女子生徒を喰らおうとしていた。

「間に合わない。」と思った俺は無意識のうちに召喚していた。

召喚獣を・・・

真紅狼「召喚！！『オーデイン』！！」

天空に現れたのはスレイプニールを操る騎士オーデイン。

真紅狼「往け！！オーデイン。魔物を倒せ！！」

オーデイン「・・・！！」

魔物の元に駆けたそして懷から一振りの刀を取り出し、一瞬のうちに蜘蛛を斬り伏せた。

斬・鉄・剣！！

俺は魔物を斬り伏せたのと同時に襲われた女子生徒を見てみるとなんとウチのクラスの生徒だった。

真紅狼「大丈夫か！？（オーデイン、御苦労戻ってくれ。）」

オーデイン「・・・（コクリ）」

オーデインは煙に包まれながら消えた。

真紅狼「あー、大丈夫か？那波。」

那波「え、あ、はい。大丈夫です。蒼騎先生。」

真紅狼「色々、聞きたいことがあるかも知れんが今度な。取り敢えず今日は寮まで俺が送ってやる。俺に寄ってくれ。」

那波「えっ！！」

真紅狼「しっかりと捕まったか？」

那波「えっ、どこに捕まれば・・・」

真紅狼「ちよいと失礼。」

と言って、お姫様だっこをし首に手を回してもらった。

真紅狼「よし、舌噛まないようにな？」

那波「えっ？」

真紅狼「行くぞ！」

と言った後、鋼糸で飛んでいった。

空のお散歩中・・・

・・・決して、夜のデートじゃないぞ？

真紅狼「ほい、到着。大丈夫か？」

那波「は、はい／＼／＼／＼／」

真紅狼「顔が赤いぞ？熱があるのか？」

那波「だ、大丈夫ですっ！！おやすみなさい。」

真紅狼「？・・・ああ、お休み。（まさかな～～～？）」

（真紅狼 side out）

吸血姫（嫁）VS英雄の息子 後編（後書き）

いやー、ごめんなさい。魔改造しすぎた。

真「まったくだ。それは置いといて、おい、作者。まさかだと思っ
が那波に露骨なフラグを立たせるつもりじゃないだろうーな？」

・・・ソナツモリハナイデスヨ？

真「オイ、今間があつたよな？そして、何故片言なんだよ」

それじゃーさようなら（逃）

真「逃げやがった！」

日常と非日常の境界線（前書き）

真「オイコラア——作者出てこい——！」

なんだいきなり。

真「千鶴にフラグ立たせるなよ？って言っただろうが。」

勢いでやっちゃった。反省も後悔もしてない。

真「……極死——七夜——！」

作者の首がもげました。

日常と非日常の境界線

＼真紅狼 side＼

昨日、那波を助けた後、すぐに寝た。

次の日が休みだったのがマジで有難かった。

今後のことをどうするか考えようとしたとき、タカミチがやってきて「学園長が呼んでいるから、ついて来てくれ。」と言われた。要件は解っていた。

先日、俺が召喚した召喚獣^{オーディン}のことだ。

さて、どう説明しよう・・・。

キティはネギの親父について話を聞きにいったらしい。

＼真紅狼 side out＼

＼学園長 side＼

昨日、メンテナンスが終わる直前に感じた、巨大な魔力の塊。

突如現れ、侵入した魔物を一撃で両断した力、そして何よりもソレを操っていたのが真紅狼君だったので詳しく聞くために呼び出した。

学園長「しかし、彼が素直に話してくれるかのお？」

と一人つぶやいた。

タカミチ君に呼んで行ってもらっているが、別のところで魔法先生と生徒が集まっている。そちらのほうで話して貰い、出来れば力を我々のために使ってほしのじゃが・・・。

そんな色々な思いを巡り合わせているとドアが勢いよく開いた。

真紅狼「来てやったぞ、ジジイ。」

さて、どうなるかの・・・

＼学園長 side out＼

＼真紅狼 side）
バンッ！

真紅狼「来てやったぞ、ジジイ。」

学園長「もうちょい、普通に開けられんのかの？・・・では、ついで来てくれ。」

真紅狼「まだ、移動すんのかよ。」

学園長「先日の件を聞いたがっている者が多くてのワシから一人ひとり言うよりは纏めていつてしまった方が楽だしの。お主も嫌じやろ？一々聞かれるのは。」

真紅狼「まあ、な。」

とやり取りをしながら、集まっているという建物に入った。

学園長「皆、待たせて済まなかったの。では真紅狼君、昨日のアレ（・・・）は何じゃ？」

真紅狼「アレは、口で説明するのは難しんだよ。簡単に言えば、俺の使い魔みたいなものかなあ？」

と言った後、周りがざわざわと騒いでいた。

学園長「見せてくれんか？その使い魔というのを。」

真紅狼「うーん、まあいいんだけどよ、襲いかかるなよ？」

学園長「皆、襲わないようにの」

真紅狼「（さて、どいつが一番いいかな。ケット・シーか？別の意味で襲いかりそうだな。オーディンだと戦闘になりかねないし、キリンか？ヒト型の方がいいか・・・となるとアイツだな。喋れるし。）さて、ちょっと説明を頼みたいから出て来てくれ、召喚！ラムウ！」

と言ったあと、杖を持った老人が俺の前に現れた。

学園長「ほお、これが使い魔かね？」

真紅狼「使い魔というより召喚獣だな。」

ラムウ「うむ、そうじゃ。」

「喋った！？」

「あまり強そうに見えないが」

などとちよつと失礼なことが聞こえたが、今は無視する。

真紅狼「ラムウは人の言葉をしゃべることが出来るんだよ。ちなみにラムウは雷系の魔法を司っている。」

ラムウ「ワシの力をどれ、少しだけ見してやろう。『裁きのいかずち』！！」

バチバチバチバチイイ！！

空中に放ったので被害は出てないと思うが、何人かは巻き込まれていた。・・・多少感電していた。

学園長「これは凄まじいの、他にもおるのか？」

真紅狼「ああ、ラムウ、イフリート、シヴァ、ゴーレム、フェニックス、フェンリル、ビスマルク、ミドガルズオルム、ヴァリガリマンド、オーディン、リヴァイアサン、バハムートなどな。他にもいるけどな追々話すさ。」

学園長をはじめ、他の魔法先生たちは口が塞がらなかったが、この後の発言でさらに驚いていた。

真紅狼「召喚獣のもたらす利点は二つだ。一つ目は、さっきも見せたように、顕現させ、力を放ってもらうこと。二つ目は各種の召喚獣を装備して修行などをすると、その召喚獣の一部の力を覚えることが出来る。これは“魔法”を知らない人たちにも使える。・・・しかも、詠唱無しに。」

「……なっ!?」「……」

信じられないという顔つきの者もいれば、はったりだという顔の人物もいた。

真紅狼「嘘と思うなら証拠を見せよう。……『ファイガ』!!」
唱えたあと、指から純粋な炎の塊が地面に激突した後、着弾地点からドーム状にその一帯を燃やし尽くした。

真紅狼「これで信じてくれたか? 今のは手加減して撃ったが、本気なら今頃全員焼け死んでるぞ。あ、ラムウ。もう戻っていいよ。」
学園長「コレをわしらにも使わせてもらえんかの?」

真紅狼「却下、貸して盗まれるなんて洒落にならないし。使わせると言つても俺が見極めて貸すかな。まあ、今のところは、タカミチぐらいだな。」

タカミチ「えっ? 僕かい?」

真紅狼「アンタ、魔法使えないだろ? だけど、多分召喚獣を装備して修行したら使えると思うぜ?」

タカミチ「攻撃魔法以外にも使えるのか?」

真紅狼「攻撃はもちろん、回復にサポートなんでもござれ。まあ、タカミチだったら、格闘戦が主体っぽいから、『ブレイブ』や『プロテス』、『リジエネ』が妥当かな。」

タカミチ「それも使えるのかい、魔法が使えない僕でも?」

真紅狼「ああ。ま、習うかどうかはじっくり考えて答えを出してくれ。そんじゃ、帰っていいか? 説明もしたし。」

学園長「うむ。まだ、聞きたいことはあるが、昨日の一件の事は知ることが出来たしの、御苦労、真紅狼君。……では、解散じゃ。」
ようやく集会が終わった後、数人の魔法先生及び生徒が俺の元に来た。

「すみません、私にもその“魔法”を教えてください!？」

「私も」

「僕も」

「その“魔石”とやらのお話をもっと詳しく教えてくださいませんか!？」

とetc・・・

いや、聞きたいのは分かるけど、一人ずつ喋ってくんない？

俺、聖徳太子じゃないから。聞き分けることなんてできません。

ちなみに“魔法”を教えてください。と言ってきた者たちは、ウルスラの女生徒とその後ろにくっついてるツインテールの女の子、あと魔法先生が一人。

（タカミチじゃないよ?）というか、どっかで見たことのある顔だった。

なんというか毎日あつてるというか・・・どこで会ったわけ？

“魔石”は褐色肌のシスターにガンドルフイーニ、そしてウチのクラスの刹那と龍宮だった・・・何故、ここに居る？

取り敢えず、話しても大丈夫そうな奴を選び、あとは帰らせた。

真紅狼「んじゃまあ、そのメガネを掛けている男性と刹那、龍宮は教えてもいいか。他は残念ということだ。（ツインテールの子は別にいいんだけどな、その連れがなあ問題なんだよ。）」

ガンドルフ「何故だ。」

真紅狼「メンドイことこの上ないから」

シスター「何故ですか?」

真紅狼「アンタに関してはなんというか、殺気を感じたから。特定の相手のみに敵意が向かっていたから。」

ツインテール「な、何故?」

真紅狼「いや、キミは合格なんだけどねえ、キミの後ろに居る奴が

原因かな。」

と言って、ウルスラの女生徒の方を見た。

真紅狼「だって、コイツいかにも“魔法”は世の為、人の為って感じのオーラ出してるし、えーと、名前なんて言うの？」「佐倉 愛衣です。」愛衣ちゃんに修行の内容聞きそうなんだよ。そこから、情報漏れるのは勘弁してほしいし。」

ウルスラ女生徒「私の名前は、高音・D・グッドマンです。魔法とはそういうモノでしょう？」

真紅狼「魔法”が万能という幻想を抱いている限り、教えられないね。今言ったメンバー以外は覚悟が出来た奴から、エヴァのログハウスに来てくれ。あ、愛衣ちゃん、キミは来てもいいが、内容を明かさないうことが出来るなら来てくれ。そういうわけで、失礼する。」

と言ったあと、出ていった。

次は、那波か。マジでどうしよう・・・。

＼真紅狼 side out＼

＼七人 side＼

愛衣「うゝん、お姉様に言わないことが条件かゝ、難しいなゝ。」
問い詰められたら、喋ってしまう自分が安易に想像できてしまう。
とてつもなく悩む、佐倉 愛衣だった。

シスター「（なぜ、彼は私の敵意が彼女に向けたモノだと分かったんでしょうか？しかし、あの“魔法”を習えば、彼女なんて容易く倒せてしまうことが想像できた。）・・・それを察知されたのでしょうか？」

と最後の言葉だけ口にしていた。

教授「あの“魔石”というモノは凄いな。本国に問い合わせてみた
いが情報の漏洩を嫌っていたから、そんなことをしたら、教えても

らえなくなるな。」

と色々と頭の中で考えていた。

高音「（愛衣が見たことがないほどの悩みね。何故、愛衣はよくて私はダメなのか。全く分かりませんね。魔法とは正しく使われるもの、その技術を一人だけで独占するのではなく、皆に共有することが悪いこととは思えない。）」

と愛衣にバレないように考えていた。

龍宮「刹那、私はもう行くぞ。」

刹那「何、もうか？」

龍宮「私は覚悟などすでに出来ていた。あのときからな（……）」

刹那「……そうだな、私もあのときにこの刀に誓ったのだから。真紅狼先生はまだ近くに居るだろうか。」

といい教え子二人は、真紅狼の後を追いかけた。

ガンドルは「カット！」……今、今のが口癖である吸血鬼の声がしたのだが気のせいかな？

タカミチ「この僕でも“魔法”を使えるようになる……か。（魔法が出来ないから、この身を限界まで鍛え上げたのにこうも簡単に魔法を使えるとなると複雑な気持ちだな。）どうしたもんかな。」

七人はそれぞれの想いを持ちながら、悩んでいた。

（七人 side out）

（那波 side）

昨日の出来事以来、全く寝ることが出来ない私はボランティアで行っている保育士をすることで気分を変えようとした。

千鶴「（昨日のアレは何だったのかしら……。あんな現象、今まで一度も見なかったわ。真紅狼先生も“普通”の人ではないんでしょうね。・・・昨日の事をもっと知りたいけど、知ったらもう戻れない気がするわ。あの出来事を忘れて、今の世界に居続けるか、それとも真紅狼先生がいる世界に足を踏み入れてみるか。」
と悩む那波だったが、本当の気持では後者の方に傾いていた。
（那波 side out）

（真紅狼 side）

集会を出て、那波のところに向かおうとしていた時に、後ろから呼びとめられた。

刹那「待ってください、真紅狼先生」

真紅狼「なんだ、刹那？」

龍宮「私たちに貴方の使う“魔法”を教えて欲しい。」

真紅狼「早いな、オイ。言っておくが俺の使う“魔法”ってのは命すら簡単に蘇らせることが出来るほどの危険さを持っているシロモノだぞ。また、逆の事も簡単に出来る。・・・それでもか？」

刹那・龍宮「はい！」

と言って、目を見たら覚悟を持った目だった。

真紅狼「いいだろう。教えてやる。が、今日は無理だぞ。ちょっと用がある。」

刹那「用事ですか？」

真紅狼「ああ、大事な用事だ。」

龍宮「なら、私は帰らせてもらおうかな。始める日程は刹那に連絡してくれればいい。ではな。」

と言って、龍宮は去った。

真紅狼「寮にいるかな。」

刹那「誰かと会ってますか？」

真紅狼「ああ、ウチのクラスの間だ。」

と言ったとき私は何を言ったのか、理解するまで時間がかかった。
話しながら、女子寮に向かった。

真紅狼「雪広達の部屋って分かる？」

刹那「分かりますが、こっちです。・・・雪広さんですか、会ったって？」

真紅狼「いや、那波だけ。」

刹那「那波さんに？」

真紅狼「ああ。・・・この前のメンテナンスのときに学園に侵入した魔物が居たろ？」

刹那「ええ、私は別の地区を担当してましたが・・・まさか？」

真紅狼「思っている通りだと思うぞ？寮に居ると思っていたんだが、教室に教科書を忘れたらしくてな。それを取りにいったら、帰りに遭遇、そのとき助けたのが俺だ。用は見られたのさ。」

刹那「本当ですか！？」

真紅狼「マジですよ？今日は記憶消すかどうかを聞くんだよ。普段通りに何も知らずに生きるか、こちらの世界の存在を知りこちらの世界で生きるかをな。我ながら、とんでもないミスをしてしまったよ。」

事の要因を大雑把に話しながら雪広たちの部屋に着いた。

刹那「ここです。」

真紅狼「おう。」

コンコン・・・

ガチャッ！

出てきたのは、雪広だった。

あやか「あら、蒼騎先生。何か御用ですか？」

真紅狼「すまん、こんな時間に那波はいるか？」

あやか「千鶴さんならいますが、呼びますか？」

真紅狼「是非、頼む。」

あやか「千鶴さ〜ん、蒼騎先生が呼んでいますわよ。」

千鶴「わかったわ。あやか、有難う。・・・お待たせしました。」

真紅狼「ここじゃ、聞かれる可能性があるから、寮長室に行くか。」

私たちは、寮長室に向かった。

＼真紅狼 side out＼

＼千鶴 side＼

ボランイアを終え、帰路につく私はほぼ考えは纏まっていた。

あとは蒼騎先生を待つのみとなった。

部屋で待つてゐる間、ちよつと着替えた。

理由は自分でも分からないが、蒼騎先生にはこんな姿を見せたくないからだ。

ちよつと、着替え終わったときに、ドアを叩く音が聞こえた。

千鶴「（ついに来たわね。考えは纏まった。あとは言うだけ。）」

私はあやかに呼ばれて、玄関に向かった。

千鶴「わかったわ。あやか、有難う。・・・お待たせしました。」

＼那波 side out＼

＼真紅狼 side＼

出てきた、那波はなんというか大人の女性に見間違えた。いや、マジで。

本当に中学生なのか疑いたくなる気分だ。

真紅狼「なんつーか、気合入ってんな。」

千鶴「え！？そ、そうですか？／＼／＼／＼／＼／」

真紅狼「もうちよつと、ラフな格好でもよかったんだが・・・」

千鶴「それはそれで・・・（嫌です。）」

真紅狼「ん？何？聞こえなかった。」

千鶴「い、いえ、なんでもないです。」

真紅狼「取り敢えず、寮長室に行くか。噂がたちかねない。」

そのとき、誰も見えていないと思っていたが、廊下の端でカメラを持っていた女子に気が付いていなかった。

???「大スクープだね、これは!!」

寮長室にて・・・

誰にも聞かれないように、入口付近に結界を張った。

近づこうとすると、他のことを思い出す意識を逸らす術と盗聴防止の術を掛けた。

真紅狼「さて、今日呼んだ理由は分かっているよな？」

千鶴「はい、私の答えはもう決まっています。でも・・・」

と言つて、刹那を見たので代わりに答えた。

真紅狼「刹那も『こちら側』の住人だ。では答えを聞こうか」

千鶴「そうですか。・・・記憶は消したくありません。そちら側の世界に行きたいです。」

真紅狼「いいのか？記憶を消せば、危険がなく今までどおりの生活が出来るし、何よりこちらでは命の保証は確実に安全を確保することとは出来ないぞ？」

千鶴「それでもです。私は『そちら側』の世界でいきたいんです。

《真紅狼さんと共に歩みたいんです。》」

真紅狼「そうか。なら、・・・ようこそ世界の裏の世界へ。まずは俺の正体でも明かすか。」

千鶴「正体ですか？」

真紅狼「そう、俺は不老不死なんだよね。こんなナリして600歳を超えています。肉体年齢は21歳ぐらいだけど、精神年齢は600超です。」

千鶴「ホントですか・・・？」

刹那は目が点になっていた。

驚いた表情はしていなかった。・・・した表情を見てみたかった。

真紅狼「マジです。色々話があるけど、まずはメシ食いに行くか。

千鶴もそんな格好しているし。“魔法”とかは後日な。」

千鶴「あ、はい。」

真紅狼「どこがいい？」

千鶴「任せます。」

真紅狼「なら、イタリア料理にするか・・・。ちょっと着替えるから外に居てくれ。」

刹那は「私はこれで」と言って部屋に帰っていった。

10分後・・・

真紅狼「待たせたな。」

紅いコートに黒のズボン（ハザマの赤バージョンのイメージで）紅い帽子を被り、千鶴は横にくつついてきた。

移動方法は毎度おなじみ、鋼糸ですよ。速度はゆっくりだけどね。そうして、その日は過ぎていった。

（真紅狼 side out）

後日・・・

新聞に俺の姿が載せられ、こんなタイトルが見出しで出ていました。

『蒼騎 真紅狼、女性と夜のデート！？』

書いてあった。

・・・学校行きたくねえな。やな予感しかない。

日常と非日常の境界線（後書き）

次回、はっちゃけるぜ。by 作者 現在死亡中。

カットの人「だそうだが、済まないね諸君。典型的に作者は馬鹿だ。」
真「それと、もしかしたら、『限りなく近く、限りなく遠い世界』
は削除するかもしれない。ちょっと難しくなった。」
カットの人「その代りになのはで一作、現在構成中だ。おおまかな
内容が出来次第投稿するかもしれない。待っていてくれたまえ」

設定その2（前書き）

今回はFF5とFF6の使える魔法及び召喚獣の一覧です。

設定その2

前回の設定と基本変わらないが、FF5の暗黒魔法とFF6adv
ansの召喚獣と魔法が制限なしで発動可能となる。

ネギの魔法をモロに喰らい、死にかけたときに何故か「直死の魔眼」
も持つことになる。それに応じて、『七夜』の体術を使用可能にな
る。

FF5の暗黒魔法は二つの属性と一部三つ持ちになります。
異常状態をもたらす魔法のみ、属性なし。

暗黒魔法、一覧

ドレインタッチ	属性 闇	特殊効果	体力吸収
ダークヘイズ	属性 なし	混乱と弱体化魔法	
ディープフリーズ	属性 闇	氷	特殊効果 時間停止
イービルミスト	属性 闇	風 毒	特殊効果 猛毒
メルトダウン	属性 闇	火	特殊効果 体力ダウン
ヘルウィンド	属性 闇	風 地	特殊効果 石化
カオスドライブ	属性 闇	雷	特殊効果 麻痺
カーズ	属性 なし	ダメージはないが耐性の無い異常	状態を一度に全て掛ける

ダークフレア 属性 闇 闇の魔力の力で核爆発

パニッシュレイ 属性 闇 光 アルテマと同等レベルの破壊力

FF6の召喚獣

ラムウ 属性 雷 敵全体攻撃『裁きの雷』

イフリート 属性 炎 敵全体攻撃『地獄の火炎』

シヴァ 属性 氷 敵全体攻撃『ダイヤモンドダスト』

キリン 属性 なし 味方全員にリジェネ効果をもたらす『ホーリーブライトン』

ケット・シー 属性 なし 敵全体に「混乱」状態にする『キ

ヤットレイン』

セイレーン 属性 なし 敵全体に「沈黙」状態にする『ル

ナティックボイス』

ユニコーン 属性 なし 味方全員にエスナ効果をもたらす

『ヒールホーン』

マデイン 属性 なし 敵全体攻撃『ケイオスウェイヴ』

カトブレパス 属性 なし 敵全体に「石化」状態にする『悪

魔の瞳』

ファントム 属性 なし 味方全員を「とうめい」状態にする『バニシングボディ』

カーバンクル 属性 なし 味方全員を「反射」状態にする『

ルビーの光り』

ビスマルク 属性 水 敵全体攻撃『バブルブロー』

ゴレム 属性 なし 味方全員を攻撃から守る『アース

ウォール』

ゾーナ・シーカー 属性 なし 味方全員の魔法防御力をあげる『

マジックシールド』	属性	なし	味方全員の傷を癒す『エンジェル
セラフィム	属性	なし	味方全員の傷を癒す『エンジェル
フェザー』	属性	なし	味方全員でジャンプ攻撃『ソニツ
ケーツハリー	属性	なし	味方全員でジャンプ攻撃『ソニツ
クダイブ』	属性	なし	味方全員を「分身」状態にする『
フェンリル	属性	なし	味方全員を「分身」状態にする『
ハウリンググムーン』	属性	なし	味方全員を「分身」状態にする『
ヴァリガルマンダ	属性	炎 氷 雷	敵全体攻撃『トライディザ
スター』	属性	炎 氷 雷	敵全体攻撃『トライディザ
ミドガルズオルム	属性	地	敵全体攻撃『アースサウンド』
ラクシュミ	属性	なし	味方全員の傷を癒す『魅惑の抱擁』
アレクサンダー	属性	光	敵全体攻撃『聖なる審判』
フェニックス	属性	なし	味方全員のどんな状態でも完璧に
癒す『転生の炎』	属性	なし	味方全員のどんな状態でも完璧に
オーディン	属性	なし	即死効果の全体攻撃『斬鉄剣』（
一部の敵には無効）	属性	なし	即死効果の全体攻撃『斬鉄剣』（
バハムート	属性	なし	敵全体攻撃『メガフレア』
ラグナロク	属性	なし	敵全体攻撃『メガフレア』
ジハード	属性	炎 風	装備専用の為、意味はない。
天地崩壊』（魔法防御力、障壁を簡単にブチ抜く）	属性	炎 風	敵味方関係なく全体攻撃する『
ライディーン	属性	なし	即死無効の相手一体に必中の一撃
『グングニル』	属性	なし	即死無効の相手一体に必中の一撃
リヴァイアサン	属性	水 風	敵全体攻撃『タイダルウェイブ』
サボテンダー	属性	なし	敵全体攻撃『針千本』（たまにジ
ヤボテンダー登場し敵全体に『針万本？』が発動）	属性	なし	敵全体攻撃『針千本』（たまにジ
ディアボロス	属性	重力	敵全体を「瀕死」状態にする『闇
よりの使者』	属性	重力	敵全体を「瀕死」状態にする『闇
ギルガメッシュ	属性	なしだが、武器によって分かれる。	敵全体を「瀕死」状態にする『闇
エクスカリバー	属性	光	敵全体を「瀕死」状態にする『闇

マサムネ 属性 風
エクスカリパー 属性 なし 「最強の剣じゃないのかー!？」

三つの武器を合わせた敵全体攻撃『最終幻想』

以上です。

オリジナル設定の部分はセラフィム、ラクシュミ、フェニックス、ライディーンです。

セラフィムの場合、治せるのは魔法攻撃レベルで言うと『ファイラ』クラスの威力までです。

石化状態などの異常状態は治せません。

ラクシュミの場合は『ファイガ』クラスで軽い異常状態なら治せます。

フェニックスの場合は意識不明の重体から石化など重い異常状態、死まで回復できる最高レベルの治療となります。

ライディーンは『真・斬鉄剣』でもいいんですが、グングニルを出すべきかなと思います。こちらの方にしました。

オーディンは刀、ライディーンは槍の設定です。

こちらの魔法を取得する千鶴たちはそれぞれ取得可能な属性と系統があります。

属性は炎・氷・雷・地・風・水・毒の六属性＋特殊属性「重力」、系統は攻撃・補助・回復の三種類です。

取得する属性は本編の方で出します。

それぞれの属性と系統を取得するかは想像してみてください。

次回こそはっちゃけるぞ。

設定その2（後書き）

そろそろ使い魔を持たせたいなあ、出るとしたら京都の後になるけどね。

女子の情報伝達ってどうなってるの？（前書き）

はっちゃんけ回だけど、中途半端にはっちゃんけた感じだ・・・

女子の情報伝達ってどうなってるの？

（真紅狼 side）

俺は学校に行きたくないオーラを全開にしながら歩いていた。なんせ、麻帆良新聞にこんなことを書かれていたから・・・

号外！！『蒼騎 真紅狼、女性と夜のデート！？』

一面にでっかく俺の写真が貼ってあるんだぜ？

しかも、腕組んでるところをわざわざ貼るなんて、いい度胸してるな。

現在、麻帆良女子中学行く前の坂道、目の前には真相聞くためにスゲエ数の報道陣とリポーターがいるよ。・・・ウゼエ。

「この内容は本当なんですか！？」

「一部の人からでは女子中学生と同棲しているという噂も聞きますがどうなんですか？教えてください！！」

「この写真の隣に居る女性は誰ですか！？」

・・・イラッ。

なんでそこまで知ってたんだよ。というか噂の発信源はどこだ。

真紅狼「誰がこの噂を流した？」

「誰が流したのは分かりませんが、分かるのは麻帆良女子中学の3

- Aです。」

・・・

俺のクラスかよ。

「取り敢えず、答えてください。」

真紅狼「そういう関係じゃない。以上だ。」

「あ、ちよつと！？」

「待ってくださいよ!!」

「追え——!!」

ブチッ!

ドゴン!

と地面にクレーターが出来ていた。

それを見たりポーター達は足を止めた。

真紅狼「これ以上俺を怒らせんな。それでも聞きたいなら、人間クレーターを作るぞ?」

再び歩きはじめたが、リポーター達は追ってこなかった。

「真紅狼 side out」

「千鶴 side」

昨日の行動が撮られているなんて……
どうしよう、心が落ち着かない。

あやか「どうしたんですか? 千鶴さん。」

千鶴「い、いえなにもないわ、あやか」

あやか「そうですか。顔が赤くなっていたので声を掛けたのですが、杞憂でしたね。」

千鶴「顔……赤くなってる?」

夏美「うん、凄い赤いよ。」

千鶴「そ、そう。大丈夫よ熱は無いわ。ちょっとね。」

まさか、顔に出ているなんて……。

夏美「しかし、真紅狼先生とデートしていた女性気になるな。」

千鶴「……」

あやか「真紅狼先生、何時の間に付き合っていたんでしょうか?」
と色々と憶測する二人。

その相手が私だと分かったらどうなるか・・・、考えないようにしよう。

すぐに終わる噂になってほしい。

そんな望みが学校に行く前にさらに大きくなることは知らずにいた千鶴だった。

く千鶴 side outく

く真紅狼 sideく

学校に着いた時、クラスの窓から噂好きの生徒数人がこちらを見ていた。

しかも、全クラスの窓から。

俺の機嫌が益々悪くなっていく知らない生徒たち。

そうしていると、学校の方から新たな噂が流れたのか分かんがさらにこっちに目を向けてきた生徒が増えた。

・・・取り敢えず、クラスに行くか。

クラスに行く間に様々な噂を聞いた。

「先生と付き合っている女性は許嫁である」

「先生は王国の息子だ」

「先生と付き合っている女性はすでに結婚している」

などと聞かたびにイラつき度が10%ずつ上昇していった。

女子中学生の情報伝達ってどうなってるの？

なんでたった一日でここまで膨れ上がってるの？

おかしくね？

と思いつつクラスの中に入った。

く真紅狼 side outく

く千鶴 sideく

なんだかんだでクラスに居る私は自分の席に座って、授業の準備をしていたらいつの間にか後ろに和美さんが居て小声で話しかけてきた。

和美「（先日の真紅狼先生とのデートはどうだった？）」

千鶴「（！？・・・何故それを？）」

和美「（昨日、偶然、真紅狼先生に千鶴が腕を組んでいるところをカメラで・・・ね。）」

千鶴「（・・・何が望みで？）」

和美「（今、どこまでいつてるのか。そして、好きなのかどうかかな。）」

千鶴「（・・・絶対新聞にしないこと誰にも漏らさないことこの噂を早急に消すことが条件よ。）」

和美「（いいよ。それぐらいなら）」

千鶴「（やけにあっさり了承したわね？）」

和美「（さっき、ウチの先輩から連絡があってね。真紅狼先生の元に突撃したら、あまりのしつこさに怒らせちゃってね、そのとき素手で地面をめり込ませた。って聞いたんだよ。しかも、去り際に「これ以上怒らせたら、人間クレーター作るぞ？」と笑いながら脅迫されたらしくてね。おとなしく身を引くことにしたんだよ。）」

千鶴はそれを聞いて、申し訳なさそうに真紅狼に謝っていた。

千鶴「（じゃ、取引成立ね？）」

和美「（放課後、聞きに行くよ。）」

と言った後、朝倉は自分の席に戻っていった。

そのときまだ、早乙女が勝手に噂を拡大していた。

ハルナさん、それぐらいにしておかないと後が怖い・・・！？

廊下を見てみると、般若の顔をした真紅狼先生が立っていた。

私の後に何人かが気が付いた、そのあとハルナさんに合掌する者、

慌てて止めようとする者、嗤っている者とそれぞれだが、気が付いている者たちは思った。

『終わったな』

と、さらにヒートアップしたのかハルナさんは止まらなくなった。
・・・真紅狼先生が教室内にいることにも気が付かず・・・。

ハルナ「いやー真紅狼先生も隅に置けないねえ。」

綾瀬「ハ、ハルナ、もう止めた方が・・・（ブルブル）」

ハルナ「何言つてんの夕映！？だって、生徒と教師だよ！？二次ネタがこんな身近で実際に起きるなんて、あり得ないでしょ！！」

真紅狼（阿修羅）「あり得ないなあ」

ハルナ「だよーね！！しばらくはこのネタは尽きないね！！」

真紅狼の皮を被ったナニカ「そうか、ソレはヨかったネエ？」

言葉が片言に聞こえるの気のせいかしら・・・。

そして、周囲の気温が一気に下がったんだけど・・・。

（推奨BGM B B C SのEndless Despair）

ナニカ「さて、問題です。いまクラスはキミ以外ダメテイマス。

ソノウケコタエラシテイルノハダレデショウ？ソシテ、マエヲミロ」

ハルナさんの動きが一気に凍りつき、前を見たらマズイが見なければもっとやバいという苦汁の選択だったが、錆ついた物を動かすような感じで「ギギイ」とゆっくりと前をみた。

黒いオーラを纏ったナニカがあらわれた！！

逃げる

逃げる

逃げる

だが にげられない!!

「ガシッ!」という音が聞こえた。いえホントよ?

ナニカ「ニガストオモツテンノカ?・・アア?」

ハルナ「あ、あのですね、決してネタにするとか「ブチン!」」

ナニカ「チョット、オモテニデロ・・。 “オハナシ” ショウジャ
ナイカア?」

しばらくお待ちください

ハルナ「スミマセンでしたあ!!」

見事なる土下座、何をしたらこうなるのやら。

こうして、私たち3・Aは絶対に真紅狼先生を怒らせないことに
誓った日であった。

〈千鶴side out〉

放課後・・・

私は和美に本当の気持ちを告白した。

その事を真紅狼さん(・・・・・)に伝えるのはまだ当分先になり
そうだけど。

女子の情報伝達ってどうなってんの？（後書き）

もう何も言わない・・・

新婚r y・・・いや、修学旅行です。

(前書き)

京都編に入りました。

さて、何話かかるかな・・・

新婚ry・・・いや、修学旅行です。

（真紅狼side）

まあ、あれから数日が過ぎた。

時間が飛んだ？書こうと思ったが作者のやる気の低下（主に暑さのせい）で書けなかったらしい。

（メタいからやめて。by作者）

んで、今日は3-Aは修学旅行らしい。

目的地は京都だつてよ。

俺は先日学園長から「3-Aにこっそりと付いてやってくれ」と連絡が来た。

理由はなんというか京都の呪術教会とのいざこざがあり、それを収めるためにネギを特使として送るからその援護を頼んで来た。

あのクソジジイ、俺を便利屋と勘違いしてるんじゃないのか？

というわけで、現在バレないように駅にいるんだが・・・。

「おい、真紅狼あれが新幹線というやつか？」

「ああ、そうだ。・・・あのジジイ隠れて行くんじゃないのかよ・・・」

なんせ、新幹線を乗る場所が3Aのすぐ後ろだった。

絶対にバレるな、これは。

今のところ変装してるけど、刹那や龍宮はこつちを見た時に気が付いていた。

さりげなく、龍宮たちはうしろに下がり、声をかけてきた。

「（真紅狼先生、何やってるんですか？）」

「（真紅狼さん一体何を？）」

「（学園長がネギのサポートを頼んで来てな、それも隠れて。）」

「（（あー・・・））」

と言った後、大体の事情は察してくれた。
有難いなあ。

「「（お疲れ様です）・・・あ」」
そんなとき、予想外の一言で全てが狂った。

「あ、真紅狼先生にエヴァちゃんに茶々丸さんが居るー！」
と早乙女がこちらに気付き、声を上げた。

・・・orz

「真紅狼、諦める。どうせこういう運命だったんだよ。」

「言っな、地味に傷口に染みる。」

この世界は俺に恨みでもあるのかよ、チクショー・・・。

＼真紅狼 side out＼

＼ネギ side＼

今日は待ちに待った修学旅行だ。

目覚ましが10分前には起きて、もうスーツに着替えていた。

「アスナさん、このかささんおはようございます。今日は遅刻しないでちゃんと来てくださいよ。」

「うるさいわねえ、まだ二時間以上あるじゃない。」

「じ、実は教員は早めに行かなければならないんですよ。」

「ほなら、おむすびを作つてあげるな。」

「あ、はい。有難うございます。」

父さんの手がかりが京都にあるんだ。これほど楽しい事はないぞ！
「保険証や着替えは持った？」

「大丈夫です。一昨日から用意しておきました。じゃ、先にいつてまーす！！」

少年移動中・・・

「お早うございます。わー、皆さん早いですねー!!」

「おはよう、ネギ先生」

「ネギ君おはよー!!」

すでに集まっている生徒もいた。

二時間後ぐらいには全員が集まっていた。

「では各クラスごとに班長は点呼を取って、担任の先生に伝えてから乗ってください。」

しずな先生はそういった後、手に持ってる名簿で確認していた。

「では、1班から6班までの班長さんをお願いしますー!」
と旗を振るネギ。

3 A

1班 柿崎、釘宮、鳴滝姉妹、椎名

2班 超^{チャオ}、古菲、長瀬、四葉、葉加瀬

3班 雪広、朝倉、長谷川、村上、ザジ

4班 佐々木、明石、和泉、春日、大河内

5班 このか、アスナ、宮崎、早乙女、綾瀬

6班 龍宮、桜咲、エヴァ、茶々丸、那波

「真紅狼先生来てたんですか?」

「訳があつて、姿を隠さないといけなかったんだが、出鼻くじかれて泣きそうだな。」

「そうだったんですか。大丈夫ですか？」

と心配そうな声をだす、千鶴。

「ああ、大丈夫だ。」

「それでは、皆さん15年度の修学旅行が始まりました。この四泊五日で楽しい思い出をたくさん作ってくださいね。」

「……は……い？」

といい返事をする。一部を除く3A全員。

やっと、父さんの手がかりがある京都だ！！

〈ネギ side out〉

〈真紅狼 side〉

一番後ろの席の一角に6班の席はある。

そこには俺、エヴァ、茶々丸、龍宮、桜咲、千鶴が座っていたが、なんというかもものすごい圧力を感じるのは気のせいかな？
しかも、息苦しい。

この状況を打破するためにどうにかしなくては！！

「エヴァ、結界系の魔法張れるか？範囲は俺たちの席の範囲で」

「ああ、張れるぞ？少し待て。……よし張ったぞ。防音もしておいた。」

「悪いな。……さて、刹那に龍宮、そして千鶴。今日話すのはこの前言った俺が教える“魔法”の属性と系統についてだ。」

「……属性と系統？」

「そうだ。属性は炎・氷・雷・地・風・水・毒の六属性＋特殊属性「重力」、系統は攻撃・補助・回復の三種類だ。」

と言った。エヴァは状況が分かっていたので説明した。

赫赫然々（カクカクシカジカ）……………

最初の一言はこれだった。

「真紅狼。お前・・・バカじゃないか？」

「グハアッ!!」

強烈なストレートがモロに入った。我が妻は容赦がない。

「エヴァ、エヴァたちが使う『魔法』はどういう物教えてやってくれ。俺が使う“魔法”とは大きく違う点があるから。」

「よく聞け、三人とも。私たちが使う『魔法』はどんな『魔法』でも『始動キー』というものが存在して、それによって『魔法』が撃てるしくみだ。《マ・スキル・マギステル》や《リク・ラク・ライラック》などな。「対して」

「対して俺が使う“魔法”はその『始動キー』というものがない。いきなり“魔法”が撃てるんだ。まあ、どんな“魔法”を唱えるかは唱える時に言わなければならないがな。「あとは相性だな」

「・・・相性?」

首を傾げる三人。

「そう、相性だ。使う属性の相性が分かれば、習得も早くなるだろう。ちなみに私は得意なのは闇、氷だが、雷なども使えるぞ。」

「俺はまあ、全属性かな?特殊属性もあるけど・・・。」

「真紅狼さん、特殊属性つてのは?」

龍宮が聞いてくる。

「重力だ。だが、これはよつぼどの相性が良くないと使えないが。あとは系統か。」

「・・・系統?」

また首をかしげる三人。

「系統つてのは簡単にいえば、攻撃・回復・補助の三種類だ。攻撃

と回復は言わなくても分かるな？」

三人は聞かれて、頷く。

「補助つてのは戦闘を有利にしてくれる魔法だ。例を上げるとしたら、“プロテス”だな。」

「プロテス？」

「プロテスつてのは使用者もしくはかけたい味方の体を堅くする力だ。力の加減によるが、大の男がストレートを放つてもほんの少し痛い程度で済むぐらいだな。」

「便利ですな。」

「他にも、力を上げる“ブレイブ”や体を浮かす“レビテト”速く動ける“ヘイスト”などがあるな。」

三人は「ほ」と面白そうな声を上げていた。

その中で千鶴は何かに気が付いたのか訪ねてきた。

「じゃあ、私たちはどの属性でどの系統がいいんですか？」

「それを今から調べるんだが・・・なんか外がうるさいな。」

結界を解き、見てみると辺りにはカエルだらけになっていた。・・・
何故？

「“ライブラ”」

カエルにかけたところ、呪術の類だと判明した。

「・・・ハア、すまんが話しはまた今度な。刹那、呪術師仕業らしい。多分混乱に乗じて親書を奪うところだな。数車両さきに行き、呪術類のものが出たら、斬れ。」

「はい、では。」

と言い。刹那が行った後にネギの親書が「式紙」によって奪われた。

「待てー！！」

そのあと、刹那は「式紙」を斬り親書をネギに返したらしい。
こいつは先が思いやられるなあ。

ストレスが溜まるかも。

＼真紅狼side out＼

＼ネギside＼

僕は一応、3Aの車両を見て回っていたら、ハルナさん達が魔法を使うカードゲームで遊んでいた。

どうやら、決着が付きハルナさん達の負けらしい。

勝利した明石さんにお菓子を上げようとしたら、中からカエルが出てきた。

「カ、カエル！？」

「わっ？！」

「ひゃー！！」

「なっ、なんですか！？このカエルの団体さんはー！！」

「至る所に居るわよ？！」

これはまさか魔法？！

ということは妨害工作か・・・。

「（兄貴、間違いない、関西呪術協会の仕業だ！）」

「（でも、なんでカエル？）」

「この騒ぎに乗じて何かを狙ってる？」

「！！あれ！？親書がないっ！！」

「なに！？」

急いで探したら、内ポケットに入ってた。

「あ、内ポケットに入ってた。よかった。」

「び、びつくりさせんなよ、兄貴ー！！」

ヒュッ・・・パシッ！

突然、高速でネギ達の前を何かが通り過ぎ、その時に親書を持って

かれた。

「追いかける、兄貴!!」

「うん! 待て————!!」

と追いかけた。

僕が追い付いた時には親書は桜咲さんが持っていた。

「ネギ先生……。あの、これ落し物です。」

「え、あーっ。コレは僕の大事な親書!! 有難うございます、助かりました!!」

「気を付けた方がいいですね、先生。——特に向こう(……)に着いてからはね。」

「あ、どうも。御親切に。」

といい桜咲さんは戻っていった。

「(兄貴、あの女メツチャ怪しいじゃねーか!! 下を見てみる!!)」

「(これはさっきの鳥つてことは桜咲さんが西のスパイ!?)」

エヴァンジェリンさんに続いて、またクラスの生徒に敵が——?ど、どうしよう。

と不安を抱きながら、京都に着いた。

〈ネギside out〉

新婚 r y . . . いや、修学旅行です。

（後書き）

最後の6班ですが、原作と変えました。

真紅狼に何かしら関わりを持つているメンバーで構成しました。

それゆえ、他の班も多少変わっています。

もう一つ、三人が習得する魔法ですが、一人はあからさまに習得する魔法の伏線を出しています。

．．．伏線出すのヘタだな、俺。

京都に着いて、一波乱（前書き）

今回はかなり詰め込み過ぎた。

次回は次回で別の意味で凄いことになりそうだ。

あ、なんか操作やっていたら、。。。編ってのが出来たのでこれからこうしていくと思います。

京都に着いて、一波乱

（真紅狼 side）

清水寺・・・

「京都——！！」

「これがあの有名な“飛び降り”！！」

「誰か飛びこめ——！！」

「では、拙者が・・・」

「やめろ、ボケ」

と制止させる真紅狼。

ホントにコイツラ抑えるの大変なんだけど・・・。

「そうそう、ここから先に進むと恋占いで女性に大人気の地主神社があります。」

と綾瀬が喋る。

「綾瀬、お前詳しいな。」

「夕映は神社仏閣仏像マニアなんですよ。」

「またコアなマニアだな・・・。あと、その石段を降りると有名な“音羽の滝”があるぞ。」

「真紅狼先生、“音羽の滝”ってなんですか？」

「“音羽の滝”ってのは謂わば、願掛けのようなものだ。三筋の滝があつてその三筋の水にはそれぞれ“健康”・“学業”・“縁結び”が成就するって言われているらしいぞ。」

と簡単に説明した。

これでも一応教師なので仕事はしないとね。

ただ、このバカ共は一部のみ強い反応を示した。

「縁結び!？」

「それだ!!」

「ネギくん、行こ行こ!!」

「あ、あなた達!! 団体行動を・・・」
数名の女子によって引つ張られるネギ。

俺はのんびり行くか・・・。

忙しくてのんびりできなかったしな。

だが、その想いを打ち砕く者がいた。

ガシッ!

うん? 今、思いっきり腕を掴まれたんだが気のせいか・・・?

「誰だ?」

「真紅狼先生行きましょう。」

「・・・先生早く」

「何故、腕を掴んでいるのかな? 那波、柿崎、雪広、和泉にエヴァ
?」

「「「「「行きましょう!!」」」」」

俺はその後ズルズルと引きずられていった。

「・・・マジかよ。」

「真紅狼 side out」

「ネギ side」

京都に来て、清水寺からの一望はとても素晴らしかったです。
それに木の造りがまたいいです。

今、皆さんは恋占いが出来るという神社に向かっています。

「これが恋占いの石です。片方の石からスタートし目を閉じて、も
う片方の石に辿り着けば、恋が成就すると言われています。」

だいたい20mぐらいの距離にもう片方の石は置いてあった。

挑戦者はいいんちよさんにまき絵さん、宮崎さん、和泉さんの四人です。

四人はそれぞれ、動き出し石のある方に行ってますが、いいんちよさんが突然走りだしました。

「ターゲット、確認！行きますわよ！！」

「ずるーい、いいんちよ！目を開けてるでしょ！！」

「まさか。これで、某S先生との恋は見事成じり・？！」

ズボンッ！！

え？

いいんちよさんがいきなり消え、見てみると落とし穴に墜ちていました。

・・・これもまさか関西呪術協会の仕業じゃ・・・。

そのとき、視線がこちらに向いていたので見てみると、刹那さんがこちらを見ていた。

「（こっちを見ている？）」

「（兄貴、やっぱりアイツ怪しいぜ。）」

「（うーん・・・。）」

悩みながらも、音羽の滝に着いた僕たちは“縁結び”の滝に殺到していた。

「ゆえゆえ、どれが“縁結び”だっけ？」

「右から“健康”・“学業”・“縁結び”です。」

「「左・左ー！！！！」」

「ん？！あ、ちょっと待て、お前らそれ飲む・・・」

「「ほえーーーー？」」

「遅かったか・・・」

真紅狼先生が止めようと声を上げた時にはすでに遅かったようだ。

「どうしたんですか！？」

「どうやら、酔ってしまったようだ。」

「ええ？！」

「“縁結び”の滝から酒の匂いがしたから、飲んでみたら酒だったんだ。だから飲むなと静止しようとしたんだが・・・遅かったか。」

「（これもまさか・・・！！）」

「（ああ、違いねえッスよ、兄貴！！）」

なにやら二人で話しこんでいたが、どうでもいい。

酔ってしまった生徒を、どこか休憩所に運ばないといけないな。

「・・・仕方がないな」

「ネギside out」

「真紅狼side」

酔った生徒を休憩所に運び酔いを覚ましてたところに新田先生たちが来ていた。

「・・・？なんか酒臭くないですか、新田先生？」

「いや、なんでもn・・・」

ネギは隠ぺいしようとしたが、俺は包み隠さず事情を説明した。

「それがですね、新田先生。先程、音羽の滝で生徒が数名お酒を飲んでしまってますね。」

「なんですって！！」

「どうやら、屋根の上に酒樽を流してあったみたいで、それを水だと勘違いした生徒が飲んでしまったんですよ。」

「なんて、悪質なイタズラなんだ!!」

「俺も流れているのが酒だったなんて生徒が飲む前に気が付いて、止めようと声を掛けようとしたら……」

「飲んでしまったと?」

「ええ。すみませんもっと早く気が付いていれば、こんなことには……」

「いえ、蒼騎先生は悪くありません。悪いのはイタズラした犯人です。して、酔ってしまった生徒の規模は?」

「有難うございます。酔ってしまったのは3Aのクラス半分です。」

「さいわい、ウチのクラスだけで済みました。」

「そうですね……。ではもう旅館のほうに行った方がいいですね。」

「

「そうしましょう。では彼女たちをバスの方に運んで置きますね。」

「お願いします、蒼騎先生。」

事細かく事情を説明したところにネギがやって来た。

「真紅狼、なんで新田先生に話したんですか?! 修学旅行が中止になるかもしれないんですよ!!」

「お前は新田先生をなんだと思ってるんだ?」

「厳しい生活指導員じゃないんですか?」

「ド阿呆、新田先生は厳しいがちゃんと話せば分かってくれる良い先生だぞ。見た目や噂で判断するな。さて、取り敢えず、コイツラをバスに運ぶぞ。」

「あ、はい。」

運搬中……

運搬には茶々丸が手伝ってくれた。

さすがに一人で運ぶには苦勞する。・・・一人でも出来るけど。
運び終わった茶々丸がこちらに寄って来た。
なんだろう？

「おう、茶々丸御苦勞さん。助かったぜ。」

「真紅狼さんに伝えたいことが・・・」

俺に伝えたいこと？なんだろう？

「ん？なに？」

「妨害があつた後に、委員長の雪広さんを除く四名が恋占いの石をやつたところ、四人とも見事・・・」

あ、ヤバイ。その先は是非とも外れて欲しい。

「見事・・・辿り着いたそうです。」

オウフ、更なる心勞が増えた。

いや、エヴァに関してはいまさら何を。と思っていたんだが・・・
コイツは予想 GUY だ。

“音羽の滝”の効果意味無えじゃん！“健康”を飲んだはずなのに・・・

アレか？転生者には効かないってか！？

フザけるなよ、チクショー！！

俺は旅館に向かうバスの中で頭を抱えた。

＼真紅狼 side out＼

＼ネギ side＼

「・・・ネギ！いいんちよ達を部屋に寝かし置いたわよ。」

「有難うございます。」

「なんなの？この怪異は？」

「実はその——」

「言っちゃまえよ、兄貴！」

少年説明中・・・

「えーっ！っ！私たちがAが変な関西の魔法団体に狙われている！？」

「関西呪術協会っていう・・・」

「どつりであの“カエル”とか変な感じだったのね。・・・しかし、また魔法の厄介事か。」

「すみません、アスナさん。」

「いいわよ、助けがいるんでしょ？少しぐらいなら手伝うわよ。」
とさりげない言葉にネギは感動した。

「そうだ、姐さん！桜咲刹那っていうのがスパイらしいだが、何か知らねえか？！」

「私が知ってるのはこのかと幼馴染ぐらいってことかな？」

「確か、クラス名簿に京都ナント力流って書いてあったよ！！」

「やっぱり、奴は京都の出身だったんだな！！」

「じゃ、じゃあ・・・！」

「奴は関西呪術協会のスパイに違いねえ！！」

と勝手な推測をする、カモ。

アスナは疑問を抱いているが・・・。

「ネギ先生！」

「あ、はい。何ですか、しずな先生？」

「教員は早めにお風呂に入ってください。」

「あ、はい。分かりました。」

「そういえば、ウチの班もそろそろね。夜の自由時間に聞くからそれでもいい？」

「あ、はい。」

そのあと二人は別れ、風呂場に向かった。

＼ネギside out＼

＼ネギ・真紅狼side＼

うい、入浴中なう。

見事に誰もいない。

俺の体は色々と問題があるから、問われるのを避けるために終了時間の1時間半前ぐらいから入浴していたんだが・・・。

どうやら、ネギがまだ入ってなかったようだ。

先程、戸が開いたので目を向けるとネギとカモが入ってきていた。声をかけられると面倒なんで、奥の方に向かった。

ちょうど、岩によって隔たれている。

「すごいねー、これが露天風呂って言うんだねー。風が流れて気持ちいいね。」

「ああ、これで桜咲の件がなければなあ。」

刹那がなんかしたのかな？

「魔法使いにとって剣士は天敵だよ。」

カラカラッ・・・

「誰か来た・・・。男の先生たちかな？」

とネギそして俺が見た方向には・・・なんと刹那がいた。

「（せ、刹那さん?!カモくんなんで?）」

「（混浴ってやつですよ、兄貴!!）」

その後数十秒ほどネギは刹那を見惚れていたが、そそくさと撤退しようとした時、刹那が呟いた。

「困ったな・・・。魔法使いであるネギ先生なら何とかしてくれる

と思ったんだが……。やはり、真紅狼先生に応援を呼ぶしかないか……。」

「（え？！真紅狼も敵の仲間……。？）」

「（俺は手伝わねーぞ？……。護るべきものに手を出したら、『消す』けど）」

「（やっぱり、刹那さんは敵……。）」

とネギはどこから取り出したのか分からないが、簡易用の杖を取り出した時、刹那は殺気を感じ取り、刹那もどこから取り出したか分からないが、大太刀の『夕風』で応戦した。

神鳴流奥義——斬岩剣！！

殺気のアッタところに一閃。

岩を見事に真つ二つにした。

ネギも相手の得物を飛ばす為に魔法を唱えた。

フランス エクサルマティオー
風花・武装解除！！

刹那の得物を弾き飛ばすことは成功したが、いかんせん相手が悪すぎた。

ネギは戦闘の場数を踏んでいない、つまり素人と言ってもよい。だが、刹那は命がけの戦闘を繰り返している。達人レベルだ。得物がなくても戦闘に支障がなく、あっという間にネギを制圧した。

ガヤガヤ！！

となんか争っているが脱衣所の方から、このかの悲鳴が聞こえたと思ったら、なんつーか、多分式紙で造られた小猿がこのかを運ぼうとしたので、事を収めるために鋼糸で一気に叩つ斬り、このかを救出した。

「まったく、争ってこのかを攫われかけるってどうなのよ?」

「「え?! 真紅狼(先生)!!? 居たんですか!?!」」

「ネギが入ってくる前からずっと。」

「じゃ、じゃあ、あの攻防も?」

「おう、見てたぞ。」

「助けてくださいよ!!」

「アホか、勝手な想像で動くからこんな目に遭うんだよ。もっと物事を深く見ろ。」

「バツサリと言いきったんだが、アスナ・刹那・このかは俺の体を見てから、一言も喋っていない。」

「真紅狼先生、その体の傷は何ですか?」

「傷……?」

「……あ。」

「あー、まあ昔ちよつとな。」

「ちよつとじゃこんな傷は出来ないわよ!!」

「スルーしてくれよ、アスナ。」

「そうやで、真紅狼先生。ごまかされへんで。」

「……ま、追々話すさ。(一生話さないと思うが……)」

「取り敢えず、風呂でませんか? 話しはそこで……」

「そうね」

「私はこれで御免!」

「んじゃ、俺もこれでな。あとは頑張れ。」

「えっ?! 手伝ってくれないんですか!?!」

「俺は大勢の人間を護るなんて立派なことは出来ないんだよ、精々自分の大切な“モノ”ぐらいしか護れないさ。」

「といい、俺は風呂を後にした。」

くネギ・真紅狼side outく

くネギ・刹那sideく

風呂から上がった僕たちはクラスの皆さんに就寝時間を知らせた後、刹那さんを探した。

「な、何やつているんですか？刹那さん。」

「・・・式紙返しの結果です。」

「刹那さんは日本の魔法を使えるんですか？」

「まあ、剣術の補助程度ですが・・・」

「なるほど、ちよつとした“魔法剣士”って訳か。」

「・・・アスナさんには話しても？」

「もう思いつき巻き込まれているわよ」

「敵の妨害がかなり上がってきています、このままだとこのかお嬢様にも被害が及びかねません。それなりの対策を講じなければ・・・。しかし、ネギ先生が意外と対応が不甲斐なかったので、敵も調子に乗ったようですね。」

と刹那さんはジト目でこちらを見ていた。

「あうつ！ス、スミマセン。まだ未熟なもので・・・。」

「すまねえ、剣士の姐さん。目一杯疑っちゃった！！」

「ごめんなさい、刹那さん・・・。僕も協力するので襲ってくる敵を教えてくれませんか！？」

少しだけ、思案顔になる刹那だが何かを諦めたのか話し始めた。

「私たちの敵は関西呪術協会の一部の勢力『呪符使い』です。しかも、関西呪術協会と京都神鳴流とは深い関係があります。元々、神鳴流とは京を護り、魔を討つための掛け値なしの戦闘集団です。時には呪符使いの護衛を務めることもあり、そうならば非常に厄介です。・・・まあ、今の時代はそんなことは滅多にありませんけど。」

「じゃあ、神鳴流っていうのは敵じゃないんですね？」

「はい……。ですが彼らのとって、私は西から東に行った言わば“裏切り者”。ですが、私はお嬢様さえ護れば満足なので……」
それを聞いた、アスナとネギは黙ってしまった。

「じゃあ、関西呪術協会からクラスの皆さんを四人で守りましょう！！」

「え？四人？」

「はい！真紅狼も入れて。」

「あ、ネギ先生。真紅狼先生は今回の件、ほぼ介入しないと伝言を預ってます。」

「「え？」」

「真紅狼先生はこう言っていました。」

【刹那。今回の件、俺あまり介入しないから。】

「何故ですか？」

【今のところ可愛らしい妨害だけだし俺の必要無いだろ？ま、一応マジでヤバくなったら介入はするが、それまではネギに自分で頑張れって言っておけ。あと、ホテルの周りから半径3キロ以内は俺の網が張つてあるから、随時監視はしてある。お前らでも対処できるようなら、なにもしないから。……これも経験だ。慣れる。だいたい……。】

とそこからは長くなるため、聞かなかった。

「だそうです。」

「わ、分かりました。なんとかやってみます。では僕は外の見回りに行ってきますね！！」

「あ、ちよつとネギ！！」

「良いですよ、私たちは中を守りましょう。」

アスナの制止も空しく聞こえず、走り去ってしまったネギ。

「刹那の姐さんの話を聞くと、敵さんは相当手強いらしいからな。エヴァンジェリン戦の時には言う暇がなかったが、カードの使い方をきっちり教えておいた方がいいな。」

「え、使い方ってどういう・・・？」

ガッ！

台車とぶつかってしまふネギ。

「あああ、すいません。」

「いえ、こちらこそすみません。お客様。」

タオルを元に戻し、ネギは走り去っていった。

「・・・。。ありがとさん、可愛い魔法使いさん？」

〈ネギ・刹那 side out〉

京都に着いて、一波乱（後書き）

はい、フラグを立てたのは何となくです。

ぶっちゃけた話、ネギま！を読んで、一番にエヴァがいいなあ。の後はこのメンバーです。

まあ、全員が立つわけではないと思うので・・・多分。

というか、他にも書いてみてえな。

真恋姫とかFateとかまじ恋とか・・・（全部ギャルゲじゃねーか！！）

でも、不幸なことに原作やったこと無いんですよ。

マンガやアニメなどで情報を知る程度。

今、書きたいのは真恋姫かな。

ああ、実に書きたい。

呪術ってのを初めて見た（前書き）

今回は戦闘のみ！

あと、前言っていた恋姫の小説ですが書きます。が！原作プレイしてないので何度も練ってから創るため、投稿するのに時間がかかります。許してください。

呪術つてのを初めて見た

（真紅狼 side）

今、俺は風呂を上がってから、自分の部屋にいるんだが……。
なんで、千鶴が居るんだ？！

キティが居るのは別に驚かない、来るって言ってたし。
しかし、なんで千鶴がここにいる？

さいわい、一人部屋なので不安要素が一つ減った。

「……何故いるし」

「今日の話しが気になって……（ただ、一緒に居たいだけですけど）。」

「本格的な話は、修学旅行が終わってからなんだけど……！侵入されたか、このかも奪われたな。」

「へ？」

「茶々丸、千鶴の守ってもらいたい方がいいか？」

「分かりました。」

「えと、なんの話をしてるんですか？」

「エヴァ、悪いんだがホテルの周りを警戒しておいてくれないか？」

「フン……。まあいいだろう。ただし、明日私の言うことを一つ聞け。」

「……出来れば、俺が出来る範囲のもので。」

「安心しろ誰でも出来る。」

なんだろう……。誰でも出来る「ハズなのに、嫌な予感しかない。」

「スマンな、千鶴。……“スリプル”」

「え?!……zzz」

「んじゃ、あとは茶々丸、キティ。頼んだ。」

「うむ。」

「はい。いつてらしゃいませ、真紅狼さん。」

「さて、夜の京都の旅に出ますか!」

「真紅狼 side out」

「刹那・アスナ side」

「では、私は廊下で各部屋を見回りますので」

「わかったわ、じゃあ何時間ごとに交代ね。」

「ん・・・?アスナ?」

「あ、起こしちゃった?」

目を覚めたこのかは布団から出てきて、どこかに行こうとしていた。

「あ、どこにいくの?このか。」

「トイレ」

「気をつけてね」

「うーん」

というやり取りの後、このかはトイレから出てこなかった。

「・・・!!この気配はまさか・・・!!」

一瞬の気配を感じ取り、刹那は急いで部屋に戻った。

「神楽坂さん!このかお嬢様は!?」

「えっ?そのトイレに入ってるけど?」

「このかー、いるよねー?」

『入っとりますえ』

「ほらね」

そのあと、刹那は再び叩いたら同じ声で返ってきた事を不審に思い、ドアを蹴り破った。

パンツ!!

「しまった!騙された!!」

「お札がしゃべってる!!?」

「どうでもいいから私に用をたさせてください!!」

アスナは慌てながらも、ネギに電話した。

刹那・アスナside out

ネギside

「・・・つてわけさあ。」

「へー。つまり、バックタイオー仮契約カードには

1・パートナーと念話出来る。

2・遠くから呼び出せる。」

3・パートナーの能力や道具の発動etc.

が出来るんだ。なんか、凄いね。」

「さっそくこのカードの便利機能を使ってみろよ、兄貴!!」

「じゃ、じゃあ、テレパティアテレパシーを」

「念話!!」

【アスナさん、アスナさん。聞こえますかー?】

一方のアスナはパニック状態で返答がなかった。

「あれ?返答がないな。でも、これって携帯の方が便利じゃない?」

「うっ、まあ。」

そこに携帯に着信音が鳴った。

『ゴメン!ネギ!!このか誘拐されちゃった!!どうしよう!!』

「ええ!!?」

「魔法使いがケータイとはなあ・・・」

とネギを余所に泣く力モ。

そのとき空から猿の着ぐるみを来た女が降って来た。

「あら、さつきはおーきにカワイイ魔法使いさん」

「このかさん！ーラス・テル・マ・スキｻﾞ・もがーっ！」

唱えようとした瞬間、小猿により口を押さえられ詠唱が出来なかった。

その隙にデカ猿女は去っていった。

「ほな、さいなら」

「ネギ先生！」

「ネギ！ー！」

ネギはアスナ達と合流しこのかを攫った猿女の後を追った。

＼ネギside out＼

＼真紅狼side＼

俺は呪符使いが出ていった後を付けていた。

「この方角だと、京都駅の方だな。・・・先回りして様子を見守るか。」

鋼糸を伸ばして、夜空を翔けた。

＼真紅狼side out＼

＼ネギ・アスナ・刹那side＼

「待てー！ー！」

「チッ！しつこい人は嫌われますえ！ー！」

いいながら、駅に逃げ込む呪符使い。

「あ、マズイ！駅に逃げ込むぞ！ー！」

「っていつか、あのデカイ猿はなによ！？」

「おそらく、関西呪術協会の呪符使いです！ー！」

とネギ達も若干遅れて、駅構内に入った。

「むっ！これは！！」

「どうしたの！？刹那さん。」

「人払いの札です！普通の人では近づけません！！」

ギリギリ電車に間に合い、三人ともなんとか乗れた。三人は相手を先頭車両に

追い詰めようとした。

「フフ・・・ほな二枚目のお札いきますえ。」

『お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす』
と札を投げた瞬間、大量の水が車両を覆い尽くした。

「（ぐっ・・・息が・・・！この水では剣も振れない。やはり私はまだ未熟者だ・・・）」

と思っていると、脳裏にこのかが溺れているシーンを思い出した瞬間、無意識のうちに剣を振った。

斬空閃！！

放たれた剣戟はドアを壊し、水を排出させた。

猿女は再び逃げた。

「よーここまで追って来れましたな。」

と着ぐるみを脱いでおり、手には札を構えていた。

「そやけどそれもここまでですえ、三枚目の札行かせてもらいますえ。」

「くっ、させるかつ！！」

『お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす』

刹那は猿女に迫ろうとするが、目の前に突如巨大な炎の壁が出来た。

「喰らいなはれ！三枚符術 京都大文字焼き！！」

ゴオオ！！

「並みの術者じゃではその炎は超えられまへん、そこで足止め喰ら
つておきなはれ。」

「待て！！」

「ほな、さいなら。」

『ラス・テル・マ・スキル・マギステル！吹け（フレット） 一陣
ウエンテ フランス サルタテゾルウエレア
の風 風花・風塵乱舞！！』

と唱えた瞬間、符術の炎は一気に消し飛び、場が開いた。

「逃がしませんよ！このかさんは僕の大事な生徒で・・・友達です！
！」

『シス・メア・バルス
契約執行 180秒間（ペル・ケントウム・オクトーギンタ・セ
クンダース）！！ ネギ（ミニストラ）の従者 『カグラザカ・アスナ
神楽坂明日菜』
！！』

「行くよ、桜咲さん！」

「あ、はい！」

「そのバカ猿女——！！このかを返しなさ——い！！」

「兄貴、あれだ！」

「うん！アスナさん、パートナーだけが使えるアーティファクトを
出します！！アスナさんは『ハマノツルギ』です。受け取ってくだ
さい！！」

「えっ、武器なんて出せるの？！じゃあ、頂戴——！！」

エクセルがヲシスアイテム

『能力発動!!』

『ハマノツルギ（笑）』!!

「ちょっと、これただのハリセンじゃない!!」

「えーい、やっちまえ姐さん!!」

と猿女に迫ろうとした時、巨大なクマと猿がたちはだかった。

「なにこれ!？」

「これが善鬼護鬼です。」

「ウチの猿鬼と熊鬼は強力どすえ、一生そいつ等の相手でもしてなはれ!!」

と言つてこのかを担いでこの場を立ち去ろうとする猿女。

その姿を見た明日菜は力が籠り、なんかしらの能力が発動したのか式紙が送り還された。

「!! 刹那さん、そのくまは私に任せて、このかを!!」

「有難うございます。アスナさん。このかお嬢様を返せー!!」

「.....えーーーーーい」

ガキン!

「どうも~~~~、神鳴流です~~~~。おはつに~~~~。」

刹那の行く手を遮つたのは刹那と同じ神鳴流の剣士だった。

だが、容姿を見て一瞬呆けてしまう刹那。

「え・・・お、おまえが神鳴流剣士？」

「はい~~~~? 月詠と申します~~~~。」

「こんなのが神鳴流剣士とは時代は変わったものだな。」

「舐めたら怪我しますえ。では月詠さん、後はよろしゅう。」

「では、お手柔らかに~~~~」

キンッ！

ガキンガキン！！

ギャリギャリ！！

と月詠の二刀の小太刀により刹那はあしらうことが難しくなった。

「（くっ！意外に出来る・・・これはマズイ！！）」

と焦りが生まれた時、上から声が飛んで来た。

「ったく、しょうがねえなあ。」

（ネギ・アスナ・刹那 side out）

（真紅狼 side）

京都駅でネギ達を待っていた俺は、ネギ達が来て三枚目の呪符を見た時手を出すべきかと思ったが、ネギの詠唱を見て手を止めた。しかし、あの呪符。どうみても、ポ。モンの『だいもんじ』に見える。

ん？今変な考えがよぎったが気のせいだな。

再び目を向けると神楽坂がアーティファクト（笑）で式紙を送り還していた。

「おお！スゲエな、神楽坂。」

と感心して声に出してしまった。

刹那はどうやら同じ流派の剣士に足止めを食らってしまって動けなくなっていたため、出ることにした。

「ったく、しょうがねえなあ。」

閃鞘・八穿！！

「悪いね」

一瞬で猿女の背後を取り、ちよつとばかり腕を傷つけ手を離れた瞬間にこのかを奪い去り、ネギのところまで戻った。

「なあ!？」

「「真紅狼（先生）（さん）?!」」

「刹那、どんな状況でも慢心するなよ？」

「え、あ、はい。スミマセン。」

「なんや、アンタ？」

「神楽坂達の教師だ。」

「教師があんな動きするはずないやろ!!」

「どうでもいいから、さつさと帰ってくんない？眠いんだよ。」

「月詠はん!!」

「はゝゝゝい。失礼しますでお兄さん？」

刹那の剣を弾き、こつちに迫る月詠。

閃鞘・八点衝!!

「斬刑に処す・・・」

いきなり目の前に幾千の斬撃が出現したため、咄嗟に両手の小太刀でガードする月詠。

キキキキンッ!

「くつ、お兄さんやりますなゝゝゝ。」

「お前を倒せば寝れるなら、容赦なくやらせてもらおう!」

「そう簡単にはいきませんえゝゝ」

閃走・水月!

「そろそろ行くか・・・」

と言った瞬間、姿が消えた。

閃走・六兔！

「蹴り穿つ！！」

グオオン！！

相手の頭めがけて勢いよく蹴りが飛ぶが、月詠の一瞬の判断によりバックステップした為か、頭には入らず、水月に入り呼吸困難に陥りかけた。

「ぐっ！！・・・はぁ！」

「チッ！避けやがったな。まあ、よく避けたな。避けなかったら今頃首と体は離れていたがな。」

「月詠はん！！・・・くっ！撤退しますえ。アンタの顔よく覚えましてわ！！次あったら絶対後悔させてやる。」

覚えんなよ、メンドイんだから。

そっしながら、月詠と一緒に去った。

「はぁー、メンドクせえな。まあ、無事にこのかが戻って来たから結果オーライか。」

「真紅狼さん有難うございます。おかげで助かりました。」

「真紅狼先生！いつから居たの？！」

「京都駅に着いたときから見守ってた。」

「なんではやく出てこなかったんですか？！」

と捲し立てるアスナ。

コイツは俺の伝言を聞いてないんだろうか？

「伝言を思い出せ。「よほどヤバけりゃ手を出す。」とは言ったがさっきまでヤバくはなかっただろうが。」

「それでも！！」

今度はお前も参加か、ネギ。

「コレぐらいの妨害を防げなきゃ、親書を渡すなんて夢のまた夢だぞ？」

「！！！」

「これよりも激しい戦闘があるかもしれないのいつまでも俺を頼ってんじゃねーぞ！！俺だって手が空かないときあるかもしれないんだ。ちったあ自分の力で何とかしてみろ！！」

「すみません。」

と素直に謝るネギ。

「で、このかは大丈夫か？」

「あ、そうだ！このかさん」

「大丈夫みたい、どこも異常はないわ。」

「・・・ん。」

「このか大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫や。」

「せっちゃん、助けてくれてありがとうな。」

「え、あ、その申し訳ありません！！私が未熟ばかりに・・・」
と恥ずかしそうに言いながら最後は逃げ出した。

「刹那さん！！明日一緒に奈良を回ろうね！！」

とアスナが大きな声で叫び、刹那は再び足を動かし始めた。

（真紅狼 side out）

呪術つてのを初めて見た（後書き）

あの呪符本当に『だいもんじ』しか見えない。

恋は闘争の一点のみ（前書き）

ネギのパートは書かないよ？

恋は闘争の一点のみ

（真紅狼 side）

先日の呪術師襲撃を撃退した次の日、二日目は自由行動である。

奈良に行くグループやU。Aに行くグループなど様々だが、ネギのところには分かると思うがたくさん寄って来た。

そこに決意を決めた宮崎が大きな声で「一緒に回りませんか？」と聞いたところ、OKをもらえたらしく、喜んでいた。

まあ、俺にはアイツの事情なんか知らないがな・・・。

・・・俺もどうかしねえと、この状況を。

朝食を食っているんだが、右隣にはエヴァ、左には千鶴。エヴァの前には柿崎、俺の正面には雪広、千鶴の前には和泉が居る。皆、表情は普通なんだが目で互いを牽制し合っている。

なんつーか？こう、「バチッ！」っていうカンジの火花が飛んでるんですよ。

昨日帰ったらエヴァに突然「あ、明日私とデートしろ！！」なんて言われたのでOKの返事を出した。元々、「一つだけなんでも聞く」という約束だったのでそれを反故するってのは男として問題だしな。

「ごちそうさま」

食事を終えた俺は、お茶を飲みながら一息ついていた。

それをチャンスだと思ったのか、エヴァを除く四人が一気に「一緒に回らないか？」と誘ってきた。

「あー、誘いは凄く嬉しいんだが、先約が居てね。済まないな。」
と言いながら、チラリとエヴァの方を見るとどこかしら勝ち誇って

いた。

エヴァさんよ、勝ち誇った顔を止めてくれませんか？
その表情がバレたときが怖いんだよ。

「じゃあ、お前たちも回りたいところを回れよ？」

「……はい。……！（後を追いかけますけど……）」

真紅狼はこの時の四人による、一瞬のアイコンタクトに気が付かなかった。

真紅狼移動中……
チェイス
追跡隊追跡中……

「つと、悪い待ったか？」

「私も今来たところだから、別に大丈夫だぞ？」

「というか姿、なんで変わってんの？」

「本来の姿じゃ、バレた時言い訳できないだろ？これなら、問題はない。（それに小娘達には諦めてもらうために）」

「あー、そうだな。確かにそれは有難いがエヴァの大人姿は初めて見るなあ。」

「そういえば、真紅狼には見せていなかったな」

「やっぱり、エヴァは綺麗だな。」

「……／／／／（コイツは本当に恥ずかしいことをサラっと言いだすな）」

「それじゃ、行くか。時間は有限だしな。どこに行きたい？」

「ああ。大仏を見てみたいな。それと真紅狼。」

「ん？なに？」

「腕を出せ。」

「……ほい？」

と腕を突き出した。

その後エヴァは腕を組み、いかにも「恋人」ですよ。と大きくアピ

ールする。

「んじゃ、行きましょうか？お嬢様？」

＼真紅狼 side out＼

＼追跡隊 side＼

食事が終わり、真紅狼さんが移動を始めたあと、私たちは少し経ってから後を追いはじめた。
誰かと待ち合わせしているような口ぶりだったので、その相手を見てみると私たちでは太刀打ちできないほどの美人だった。

「ちょ！？あの人誰！？」

「ほへー、美人や」

「あの方が真紅狼先生の恋人かしら？」

「・・・・・・（メラッ）」

・・ちょ、一番下の人危ないよ！？

「あ、移動するよ！！」

「後を付けますわよ！！」

と追おうとする四人組。

そこにさらに追い打ちをかけるような行動を目にした。

「・・・・あ！！！！」

腕組みをしていた。

まるで「恋人」のように。

その後、四人はさらなる嫉妬心を燃やすこととなる。

＼追跡隊 side out＼

＼夫婦 side＼

・・・もう、一人ずつ表すのメンドイからこれでいいよね!!

今、ものすごくフザケこと言った奴をブン殴りたくなった。

とまあ、アレから色々と回って、昼食を食っているときにある集団を見つけた。

「・・・・・・・・・・Σ(。Д;)」

「どうした、真紅狼？」

「/(^o^)\ナンテコッタイ」

「・・・?(クルリ」

「・・・わーお」

「!!何故、あいつらが？」

「・・・付けて来たんだろ。」

「鋼糸は展開しなかったのか？」

「今日ぐらいいいだろ。って思って。それにエヴァとのデート楽しみたかったし。」

「・・・うう／／。ズルイぞ、真紅狼。突然そんなこと言うなんて／／／!!」

「別にいいだろ。」

「どうする？」

「見つけてしまった以上、どうもこうもないだろ。」

「・・・ハア。しょうがない続きは帰ってから“別荘”でやってもらうぞ？」

「わかったよ。取り敢えず、店出るか。」

店を出るとやはりついてきた。

人があまりいない散会したところで足を止め、振り返り声をかけた。

「いい加減に出てこい。那波、雪広、柿崎、和泉」

（夫婦side out）

＼追跡隊side＼

嫉妬心を燃やす四人組は真紅狼を追いかけていた。
店を出た後も追跡していたが、散会した場所で足を止めた真紅狼さんはこちらに振り向いて言い放った。

「いい加減に出てこい。那波、雪広、柿崎、和泉」

「……！！」「……」

「俺は断つたはずなんだが？」

「……」「……」「……」「……」「……」

「……ハア。分かった残り時間も少ないが一緒に回ってやるよ。」

「……えっ？」「……」

「追跡してきたってことはどうしても一緒に回りたかったんだろ？」

「……いいんですか？！」「……」

とエヴァ（大人ver）の方を見る。

「私は構わないですよ？」

とお淑やかに言う女性。

ちよつと恋敵は多いが、一緒に真紅狼（好きな人）（気になっている人）と回ることが出来て、ちよつぱり嬉しかった。

……四人も敵が居るけど。

＼追跡隊side out＼

＼真紅狼side＼

取り敢えず、追跡隊の連中も入れて、残り少ないが回ることになったんだが……、通り過ぎる度に、男性は敵意を示し、女性はひそひそとささやいていた。ときには何故か顔が赤くなっている女性もいたけど、気にしない方向で。

ときに、千鶴に雪広。お前らそんな服持ってたのかよ！？
二人が着ている服はなんというかエロい。
胸の部分が強調されている服だった。

これから、ちよつと夜道に気をつけようかな。
刺されたくないし。

間違いなくコイツラ、俺を誘惑するために着てきやがったな！
油断も隙もあったもんじゃねえ。

まあ、あと五年ほど経てば襲ってたかもしれないが。

そんなことを考えながら、残りの時間を楽しんだ。

（真紅狼 side out）

帰って来た後、ネギは魂が抜けていた。
なんでも、告られたらしい。

恋は闘争の一点のみ（後書き）

今回は短いです。

ですが、短い文もありだと思う。

チェイサーズ
追跡隊の内、二人は真紅狼のことが好きです。残りの二人は気になる程度ですが。

誰がどの気持ちなのかはご想像に任せます。

キスとトトカルチョと・・・神喰狼（フェンリル） 前編（前書き）

一週間ぶりですね！
それではどうぞ！！

キスとトトカルチョと・・・神喰狼（フェンリル） 前編

（真紅狼 side）

まあ、二日目も終わり風呂も入り終わった時には、ネギの悩みも消えたらしい。

というか、魔法の事が朝倉にバレたらしい。

コイツ、隠す気あるの？

もういつそのことクラス全員にバラしちまえよ。

その方が俺も楽だし。

コイツの事だから、話し合えばどうにかなると思っているんだろうね。

“英雄の息子”だからって周りが甘やかしたか多めに見たかのどちらかだと思うが・・・。

そもでもって、俺の部屋にまた来てたんだよ。

千鶴達が。

なんで、千鶴、雪広、柿崎、和泉が居るの？

エヴァはどこに居るかだって？

エヴァなら湯あたりして、今涼んでるよ。

長湯は止めとけて言ったんだけどな。

「・・・で、なんのようだ？」

「「「「えっと、話しに来ました。「「「「

「取り敢えず、消灯時間だから帰れ。」

「「「「ひどい！」「「「「

酷くねえよ、優しいもんだ。

そんなとき、戸を叩く音がしたので、四人を見えないように隠した。

「蒼騎先生、居ますか？」

「はい。なんですか、新田先生？」

「今日の見回りをお願いします。」

「ああ、はい。分かりました。」

「私も出ますので。」

と言つて、帰つていった。

「というわけだ。はよ帰れ。」

「……ええ……」

「……新田先生に見つかつても助けないから。」

「……是非戻らせてもらいます!!!!」

「よろしい。」

とぞろぞろと見つからないように帰っていく、四人。
最後に付け加えた。

「なんか朝倉が何か企ててるけど、参加するなよ？」

「……はい……」

今度こそ、帰つていった。

さて、見回りまで一眠りするか。

〈真紅狼 side out〉

〈朝倉 side〉

ウチの3Aが初日を逃したことで、二日目は消灯時間を過ぎても大暴れしていた。

私はカモつちとあるイベントを行うために、先生たちに見つからないように工作を行っていた。

「姐さん、あとは兄貴を部屋に待機させるだけだ！」

「わかつたわ、カモつち。」

ネギ先生の部屋に向かう途中で新田先生の怒号が聞こえた。

そりゃ、あんなに騒げば、怒るのは当たり前だって。

〈朝倉 side out〉

＼真紅狼side＼

一眠りしていたら、新田先生の怒号により目が覚めたが体は起こさなかった。

耳だけ傾けていた。

「いい加減にせんか！3A全員！！初日、あんなに静かだったのにどうして我慢できないんだ！！消灯時間過ぎても騒いでいたら、ロビーで朝まで正座をさせるからな！？・・・それと、ネギ先生も甘やかさないようにお願いしますよ。」

まあ、あれほど騒いでいたらそうなるな。

そう叱り、新田先生たちは帰っていった。

その後、ふざけた囁きによってあるイベントが開催されるとは思ってもよらなかった。

＼真紅狼side out＼

＼朝倉side＼

私は参加者を募るべく、帰っていったのを確認した後皆に提案した。

「くつくつくつ。怒られてやんの。」

「朝倉さん！！あなたどこに行っていたんですか？」

「まあまあ、いいんちょ。落ち着いて。・・・皆にある提案があるんだけど乗らない？」

「『提案？』」

「そう、イベントと言ってもいいかな。」

「『イベント？』」

「名付けて『キス争奪戦！！修学旅行で蒼騎先生とネギ先生の唇を奪え！』だよ。」

「『キス！！？』」

皆喰いついて来てくれた。

「ルールは簡単、各班選手を二人まで選出し、新田先生の監視を掻い潜りターゲットの蒼騎先生かネギ先生の唇をGETすれば、豪華賞品がGET出来る。」

武器は枕のみ、見つかった者は朝まで正座。・・・どう、魅力的でしょ？」

ルールを説明した後、皆は豪華賞品の事やルールの確認をしてきた。

「豪華賞品ってなに？」

「見つかったら、助けなしアルか!？」

「うゝゝゝむ。」

「・・・朝倉さん、やりましょう!!」

「そら、ども」

こうして大義名分の元、仮契約の儀式イベントが始まった。

〈朝倉side out〉

〈カモside〉

朝倉の姐さんに“仮契約”の事を話したら、ある提案を提示させられそれに乗った。

「姐さん、うまくいったな。」

「私にかかれば、こんなもんよ。」

「キス争奪戦つてのはブラフ・・・本命は仮契約カードの大量GETが狙いだぜ。」

成功させたら、一枚につき5万オコジョ貰えるし。」

「しかし、蒼騎先生も魔法使いだっただとねえ。」

「蒼騎の旦那もこれを機会に仮契約を行えて、かつ従者も見つかるから一石二鳥のはずだ。」

「急げ、姐さん。もうゲームが始まっちゃう!!」

「分かってるけど、どこに隠れてんのアンタ。」

さあ、ゲームの始まりだ！！

＼カモside out＼

＼ネギside＼

朝倉さんに魔法の事がバレて、一時はどうなるかと思ったけど。朝倉さんが黙ってくれるおかげで助かった。

「・・・ネギ、聞いてる？」

「ああ、はい。スミマセン。」

「大変でしたからね。今日はネギ先生にとっては。」

「さて、僕これから、見回りに行ってきますね。」

「・・・なんだか、悪意を感じる気が流れていますね・・・害意は無いのですが・・・。」

「でも、僕が離れている時に誰かが来たら、どうしよう？」

「それなら、身代わりの札を渡しておきましょうか？」

と刹那さんが人型の札を渡してくれた。

「そこにネギ先生の名を書けば、身代わりが出来ますので・・・」

「わぁー、有難うございます、刹那さん！！」

ガチャッ！

「ネギ先生、居ますか？」

「しずな先生、なんですか？」

「私たちに夜の見回りは任して、ネギ先生は皆と一緒にの時間に寝てくださいね。」

「あ、はい。」

「では、失礼します。」

＼ネギside out＼

そして、開始時刻の時間が迫り、ゲームは始まった・・・。
豪華賞品^{キス}を巡り、ゲームマスターの思惑、プレイヤー達の想い・・・
そして、最狂の狩猟者^{ハンター}が目覚める！！

キスとトトカルチヨと・・・神喰狼（フェンリル） 前編（後書き）

最後の終わり方を「逃走中」っぽくしたんですが、どうですかね？

キスとトトカルチョと・・・神喰狼（フェンリル） 後編（前書き）

これ夜中に書いていたんですが、書いててビビるって情けないですよね。

キスとトトカルチョと・・・神喰狼（フェンリル） 後編

〈朝倉side〉

「さあ、とうとう始まりました！！キス争奪戦！！さっそく、参加者の発表と参りましょう！！」

1班 史伽&風香

2班 楓&古菲

3班 雪広&千雨

4班 裕奈&和泉

5班 のどか&夕映

6班 那波&エヴァ

「となつております！まだ賭けの方は受付中なので賭けたい方はどうぞー！！」

さあ、どんなことが起きるかな？

〈朝倉side out〉

〈真紅狼side〉

俺は現在見回りまで仮眠中・・・起こすなよ？

なんか騒がしいがどうせ、怪談とか恋バナで盛り上がっているだけだろう。

怒られるのはアイツラだから、ほっとこう。

だが、まさか・・・あんなことになるとは・・・orz
＼真紅狼side out＼

＼乙女ズside＼

「（ゆーな、ゆーな!）」

「（うん?なに?）」

「（情報によるとネギ先生の部屋は鬼の新田の隣らしいよ。あと蒼騎先生の部屋は一階の一番奥だつて。）」

「（マジ?）」

「（どうする?）」

「（もちろん、敵は排除あるのみ!）」

こちらでは・・・

「（いいんちよ、帰っちゃダメか?）」

「（何言ってるんですか!千雨さん、これは蒼騎先生の唇をゲットするっていう・・・!?）」

ここで二つのグループは遭遇した。

「（和泉さん!?）（いいんちよ!?）」

ポフンッ!

「（よくやった、亜子。あとは私が!!）」

「（・・・ガキの遊びにムキになるなよ）」

と足払いをする千雨、そこに二階から古菲が枕を持てるだけ持って三人に投げつけた。

「（チャイナピロートリプルアターーック!!）」

ボボボボフンッ！

「くぐぐぐ？」

「（千雨さん、援護を……っていない！？）」

千雨は一人リタイアだ……。

ドン……

「ん？」

とぶつかった主を見ると、そこには新田^{ハンター}先生がいた。

「長谷川、何やってるか——！！」

「ぎゃぴい——！！」

「ロビーで朝まで正座——！！」

……長谷川確保だ。

残り11人……。

「（今の声は新田！？）」

「（逃げますわよ、皆さん——！！）」

「（お先に——）」

古菲は裕奈の背中を蹴りながら去っていった。

「あ！明石——！お前もか！二人ともロビーで正座——！！」

明石、隙を突かれスケープ・ゴートとなり確保だ。

残り10人……

く乙女ズside outく

〔朝倉side〕

「さあ、とうとう犠牲者が出てしまった！これにより3班と4班のオッズは大幅にダウン！！さあ、どうなる！？」

「なあ、姐さん。」

「なに、カモつち？」

「俺っちの目の錯覚だと思いたいんだが・・・兄貴が五人居る。」

「はあ?!」

〔朝倉side out〕

〔エヴァ・那波side〕

「（真紅狼さんは部屋に居るんですか？）」

「（真紅狼なら部屋に・・・居るな。寝ている。）」

「（チャンスですね。）」

「（ああ、絶好の機会だ。）」

この二人は元より争うことなく、独り占めではなく平等に与え分けることにしているため土壇場で喧嘩することはなかった。

そして、ちょうどロビー近くで三グループ乱戦の為、誰にも会うことなくすんなりと真紅狼の部屋に入った。

「（では私からいくぞ？）」

「（・・・私は気持ちを落ち着かせてからやります。）」

「（寝ているところ悪いが、真紅狼もらうぞ。）」

「（?!?!?!?!）」

しばらくお待ちください・・・

「（ごちそうさま。）」

「（お前、エヴァなにしていやが・・・?!?!?!）」

「（真紅狼さん！失礼します!!?!）」

「（お前もか、千鶴・・・!!）」

再び待つてね!!

イエ———、（。A）人（。A）ノ———
—イ

「（・・・ぷはっ!）」

「・・・・・・・・・・（魂飛んできます）」

那波は顔を真っ赤にしながら、真紅狼の上からどいた。

「エヴァ・那波side out」

「真紅狼side」

誰かが部屋に入ってくるは微かに反応出来たが、眠気が強かったため起きずにそのまま寝た。

そしたら、いきなりキスされた。

「?!?!?!」

誰かと思つて、目を開くとエヴァがキスをしてたんだよ。

しかもデープで。

舌まで入れてきたし。

うんまあ、長い間お楽しみだったあと、再び襲いかかって来たんだよ。

・・・今度は那波が。

「（真紅狼さん！失礼します!!）」

よく見てみるとエヴァが足をひっかけたらしい。

おのれ、やりやがったな!!

避けるわけにもいかない為、見事にキャッチしそのとき胸を触ってしまったが事故だからな?・・・中学生とは思えない破壊力だった

けど。

「（お前もか、千鶴・・・！！）」

あとはご想像の通りだ。

ディープだったよ！しかも、千鶴まで舌入れてきたし！！どうだ羨ましいか！？

アハハハハハハハハ・・・！！

・・・お前壊れてきてるぞ？

壊れるわ、ボケ！！

そして、今現在、魂飛んでます。

＼真紅狼 side out＼

＼エヴァ・千鶴 side＼

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ダメだ。完全に意識が飛んでるな、これは・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／」

「こつちもまだ再起動していない。っと。」

違うんですよ。エヴァさん。

エヴァとは夫婦だからいいんだけどよ、千鶴とはマズイっしょ？！
仮にも俺教師なんだよ！分かる？その辺の気持ち！？つか、分かれ。

教師と生徒がディープキス（しかも、舌入れ）はネタにしかならな
いんだよ！！

これ、マジでどうすんだ！？

「・・・・・・・・アハ、アハハハハハハハ！！！！」

「あ、これはマズイ。」

「何がですか？」

「真紅狼が狂い始めた。」

ケタケタケタケタケタ
狂狂狂狂狂

・・・・・・・・・・・・・・・・

「なんかもう怪奇現象レベルですよ。」

「トリあエず、そこ二、直れ。」

「ことw・・・（真紅狼を見る）」

さらに変貌を遂げていた真紅狼を見て、エヴァ達は大人しく従った。

見える人には見えるかもしれない。

真紅狼の頭に角が生え、顔は笑顔だが、その仮面を剥がすと口を三日月のように釣り上げ、ケタケタケタ狂狂狂・・・と嗤う真紅狼の顔があることを。

「わかってるが・・・このサワギ、だれがヤツた？」

次第に喋っている言葉が片言になっている真紅狼正直言つて、この私ですらこれは恐いと感じる。

「ショウじきニイエば、厳ジゅう中イで済マシてヤル。」

「「朝倉です！！」」

「よロシイ、事が終わるまでココにいるよ？ケタケタケタ・・・狂狂狂」

と言って、真紅狼は色んな禍々しいオーラを纏って、捕まえにいった。

スマン、朝倉。

明日の朝日を拝めないかもしれん・・・

「エヴァ・千鶴side out」

「朝倉side」

「姐さん！見てくれ！！」

「ん？どつたの？」

「蒼騎の旦那の仮契約カードが二つ出てきた！！」

「へー！お相手は誰？」

「那波つていう嬢ちゃんと・・・オイオイ、コイツアはマジかよ。」

「あの千鶴がねえ・・・蒼騎先生とキスカ。もう一人は？」

「・・・エヴァンジェリンだ」

「・・・マジ？」

「ほれ。」

と言ってカモつちは二つの仮契約カードを渡してきた。

「確かに・・・」

「おや？」

「どうしたのカモつち？」

「五番カメラの映像が消えた。」

「なぬ？！」

「故障かな？」

「蒼騎先生がカメラを覗きこんでる。」

『おい、これヲミている全員につぐ。いまスぐ、朝倉の居場シヨを吐け。ソレト、このゲームに参力しテいるバカ共、俺言つたよなあ？「フザケた企画に参加するなよ？」ツテ。それを聞かずに舐めたコとしてくれたんだ。』

とすでにいつも真紅狼の面影は無く、ケタケタ・・・と嗤いながら死刑宣告を告げた。

『テメエラ、イキテカエレルトオモウナヨ？』

そのあと、四番カメラまで消え後に残るのは、不気味な嗤い声だった。

ケタケタケタ
狂狂狂・・・。。。

「・・・逃げよう!!」

顔が真つ青になった朝倉とカモは急いで荷物をまとめ、逃げだした。

「朝倉 side out」

「乙女ズ side」

一方こちらは、未だに唇を奪おうとするグループ。

先程の狂狼の宣言が聞こえていた。

全員が手を組み、唇ゲットから無事に生きて逃げるといふ目的に変わり戻ろうとするが、通路中に『ヒタヒタ・・・』という足音が響き渡り、動くことが出来なくなっていた。

「・・・（ガクブル×2）」

そんなとき、後ろの階段から声が聞こえてきた。

「あゝさゝくゝらゝくうん??あゝそびましょゝう??」

という狂った嗤いと共に聞こえてくる。さらに恐怖の言葉が出てきた。

「残りのメンバーも、あゝそびましょゝ??」

あまりの恐さに和泉はその場でダウンしてしまった。
その後、階段の方から、『^{ケタケタケタ}狂狂狂・・・』という嗤い声と黒く禍々しいほどのオーラが流れてきた。

和泉を除く全員は即刻その場から立ち去ったが、すでに遅く。狂狼に若干見られていた。

「和泉か。取り敢えず、俺の部屋に保護しておくか。・・・逃げた奴らは逃げれると思うなよ？」

「乙女ズside out」

「狂狼side」

先程の死刑宣告後、俺はロビーに向かった。

「まずは新田先生にロビーから離れないようにしてもらったか。」
仮面を被り、いかにも時間になって現れました。という雰囲気になった。

「新田先生！」

「ん・・・あ、蒼騎先生、時間ピッタリですね。」

「・・・このバカ共は一体何を？」

「ああ、規則として朝まで部屋から出ることを禁止にさせたんですが、出ているところを見ましたので、朝までロビーで正座をさせているんです。」

「ああ、なるほど。・・・バカ騒ぎですね？」

「ええ。まったくこいつらと来たら・・・」

と新田先生はため息をつく。
本当に大変ですよね。

「多分、外出しているのはコイツラだけではないハズです。新田先生はロビーでコイツラを見張ってくれませんか？・・・俺が捕えに行きます。」

「いいんですか？」

「それでもコイツラの副担なので、俺が始末をつけます。」

「そうですか……。分かりました、お願いします。」

「はい。あ、そうだ。那波とエヴァンジェリン、和泉ですがその三人は素直に謝ってくれたので、厳重注意という形で、俺の部屋に居ますので、アイツ等は叱らないでやってください。」

「分かりました。」

「では、行つてきます。」

さあ、狩りの時間だ！！

そして、和泉を見つける。

俺は和泉をお姫様抱つこで俺の部屋に連行した。

「エヴァ、千鶴居るな？」

「ああ（はい）」

「和泉を頼む……。逃がすなよ？」

「はい！」

「新田先生にはお前らの事をすでに注意をしたと言っておいた。怒られる必要はない。だからと言って、勝手に帰るなよ？」

「有難うございます。」

「……。ふん」

「さて、……。ちょっとシバキに行つてくる。」

狼のように素早く部屋から出て、獲物を追いかけた。

さうて、ドコカナ？

通路を縦横無尽に駆け巡り、しばらく経った後逃走者達を発見した。

「そこの連中……。マテヤ。」

ビククウ！！

恐る恐る、後ろを振り返る逃走者達。

そこには先程の仮面は脱ぎ去り、頭には角があり、口は三日月のよ
うに釣り上げ、ケタケタケタ・・・と嗤う真紅狼が居た。

「・・・でたああああああああ！！！！！！」

我先にと逃げるが、一人また一人と捕まっていく。

全員捕まえた真紅狼は一人一人に恐怖を叩き込んでいった。

しばらくして、ロビーにて新田先生に捕まえた全員を引き渡した。

そのときにはある者は「ごめんなさいごめんなさい・・・」と呟き、
またある者は気を失い、魂が飛びかけていた。

先に捕まった二人は「・・・一体何があったんだ・・・」と疑問に思
ったが、聞くことは断念した。

「蒼騎先生、これで全員ですか？」

「いえ、まだ朝倉が残っています。」

「この騒ぎの一連は朝倉ですか・・・。」

「ええ、では。」

再び、真紅狼は狂狼としてホテルを駆け巡った。

（狂狼 side out）

（朝倉・カモ side）

私たちは逃げ出すときの為の通路である非常階段を使って、二階か
ら一階に逃げていた。

「これなら、蒼騎の旦那には気が付かれないで逃げれるな！」

「まさか、下調べで必要は無いと思ってた逃走経路がここで役に立
つなんて・・・」

『備えあれば憂いなし』とはこういうことを言うのか・・・。」
と完全に逃げ切っていると勘違いしている二人。

その時、非常階段の周りの音が急に消えた。

カンカンカン!!

ザアアアアアアアア・・・

「なんかちよつと、不気味だね。」

「大丈夫だ、姐さん。もう出口だ。これで蒼騎の旦那は追ってこれない。」

ガチャツ!

その時朝倉達は理解できただろうか?

いや、出来ないだろう。朝倉達がドアを開ける前よりも早く、ドアが勝手に空いたことに。

「吾^{われ}は面影糸を巣と張る蜘蛛。」

——ようこそ、この素晴

らしき斬殺空間へ。」

「!?!」

「ようやく捕まえたぞ、ガキども。・・・覚悟は出来てるだろうな?」

「いえ、あの、その・・・」

「ま、待ってくれ!蒼騎の旦那!!」

「・・・ああ?」

「旦那も魔法使いだ。パートナーはあった方がいいだろう?」

「それで?」

「だから、この機会を利用して旦那にもパートナーを・・・」

「遺言はそれでいいか?」

「（なら、帰る。）」

「那波、帰るぞ。」

「あ、はい。ではおやすみなさい。真紅狼さん。」

「途中まで一緒にいくか。和泉を部屋に返さなきゃ。」

未だに気絶している和泉をお姫様抱っこで運んでいた。

その間、二人の視線がとてつもなく痛い。

・・・自分もやって欲しい。という目をしていた。

やらねえぞ？

二人は指定された部屋に戻り、俺は和泉の部屋まで運び、後は生き残っていた（？）大河内に任せ、俺は寝た。

（真紅狼 side out）

こうして、キス争奪戦という大掛かりな仮契約の儀式は幕を閉じた。途中、真紅狼が狂い、恐怖を撒き散らすこととなったがそれも一興である。

ちなみにネギは俺が狩っている際に宮崎と不慮の事故でキスをし、
仮契約を結んだらしい。

キスとトトカルチョと・・・神喰狼（フェンリル） 後編（後書き）

本当は非常階段のところは、下から真紅狼がケタケタと嗤いながら這い寄っていくシーンを描きたかったんですが、怖くなって止めました。

ちなみに移動中ネギの偽物は叩つ斬りながら移動しています。

自分が書いてる小説にビビる俺って一体・・・。

座談会（前書き）

はい、宣言通りに座談会みたいなものです。
・・・というか、最後がエロくなった。

座談会

ども、作者の大喰らいの牙です。

狼「この物語の主人公の蒼騎 真紅狼だ。」

（以後、「狼」と表記）

エヴァ「そして、その妻のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

（以後、「嫁」と表記）

千鶴「最後に前回仮契約を結んだ、那波 千鶴の四人でお送りするわ。」

（以後、「鶴」と表記）

いやー、初めてなんですよね。こっというお話は。

狼「だいたい、この話するのって“ハイスクールD×D”を連載する前にやるつもりだったんだろ？」

ぐふっ！いきなり、メタを言うな。

嫁「その計画をぶっ壊して、敢行するなんざ、アホの極みだな。」

容赦ないですね、エヴァさん。

鶴「まあまあ、二人ともこの作者にそんなことを言ってもダメですよ。」

千鶴さんは味方になってくれると思ったよ！！

鶴「……元々、計画を練るといっほうが無理な方なんですから。」

●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
●
○

嫁「一番酷いな。」

き、気を取り直していこう！そうしよう！

狼「あ、無理して開き直った。」

と、言っても話さないんだよね。

嫁「お前はバカか？」

だから、言ったじゃん！こういう話は初めてだって！！

狼「威張るな、ド阿呆」

ド阿呆で悪うござんでした。

鶴「取り敢えず、物語のお話でもしますか？」

じゃー、それで。

狼「まともに話しをしろ。」

ヘイヘイ、最初に言いましたがこの物語はアンチになる予定です。

まあ“予定”なので分かりませんが・・・。

嫁「今のところ坊やとは持ちつ持たれつの感じだな。」

まあ、原作は乖離しないつもりです。多少、ズレが生じるかもしれませんが、許してください。

鶴「ズレと言えば、私ですよ。私は最初は“魔法”とは無関係なのに・・・」

それは、原作どおりに進むのが嫌だったからかな？

原作だったら、“魔法”関連の刹那とかが仮契約を結ぶかもしれない状況だったんだけど、それはなんかあと思って止めた。

鶴「そこで、私が抜擢されたと。」

うん、まあそうなるね。

真紅狼の容姿から見ても、パートナーとして似合う人が欲しかったとも言える。

狼「おかげでこっちは色々とヤバイんだけど・・・」

いいじゃん、モテるんだから。

嫁「よくないわ、ボケ！」

ちなみに最初にエヴァを選んだ理由は私が“金髪好き”だからです！

嫁「・・・どういうことだ？」

何か知らんけど、いつの間にかアニメ、マンガキャラで金髪キャラが好きになっていたんだよね。メルブラのアルクエイド然り、なのはのフェイト然り、ネギまのエヴァ然り、真恋姫の華琳然り……。あ、東方とかは別ですよ？

嫁「つまり、それで私は選ばれたと？」

そうなっちゃいますね。

鶴「なんとも作者好みですか。」

悪いね

嫁「なにが「悪いね」だ。謝る気ゼロだろ!？」

その代わりに、真紅狼の妻にしたじゃん!!

嫁「・・・それは嬉しいが／＼／＼」

喜んでくれてなによりです。

狼「その状況が変わりそうなんだが？」

正妻次第で増えます。あと俺のはっちゃんっけ次第。

狼「おいイ!？ちょっとsヤレにならんでしょ、ソレ!！」

千鶴さんは真紅狼の妻になりたいですか？（キラーパス）

鶴「え!？え、えっと（真紅狼を見てる）・・・なりたいです／＼

／／／／！！」

狼「orz」

そんなに落ち込むな。

狼「やかましい！」

嫁「・・・私は二、三人増えても構わんがな。」

おや、以外ですね？エヴァがそんなことを言うなんて。てつきり反對するかと思っただんですが・・・。

嫁「真紅狼に気があるヤツはすでに何人かは居るしそれはしょうがない。だから、いつそのこと私を含めるから、あと一、二人増やして後は諦めてもらう。」

ですって。

狼「・・・マジかよ。」

マジみたいですょ？

鶴「・・・・・・・・・・（小さくガッツポーズを決めている）」

千鶴さんもヤル気まんまんのようですし。

狼「・・・もうやだ、コイツラ・・・（泣）」

そう言えばヤルっていえば、エヴァさん真紅狼との夜はいかがでし

た？

嫁「ここで聞くことか?!」

いや、一応次のお相手もいますし……。 (読者もいますしね)

嫁「……まあ、名前の通り“狼”のようだったぞ／／／」

大変ですねー。

嫁「しかも、弱いところを執拗に攻めておきながら、ギリギリのところで止めるから焦らせるから気が狂いそうになる。ドSだぞ?」

ぶっちゃけたよ、この人。当の千鶴さんは……。つと。

鶴「……………／／／／／」

顔が真っ赤ですね。真紅狼も顔が真っ赤だな。

まあ、エロいネタはこのぐらいにして、ちょっとこれと呼んでいる皆さまに意見を求めたいです。

前回千鶴とエヴァが仮契約をしましたが、ぶっちゃけた話、まだ、能力とかが決まっていません。

そこで、皆さまには「こういう能力が欲しい!」とか「こんなのはどうだ?」という意見があれば、参考にさせていただきたいと思いますので思いつかれた方はメールにて送ってください。待ってます。

希望としては千鶴は天文部に入っているため、“星や星座”関連でエヴァに関しては、吸血姫なのでその辺でも構いませんし、別のもいいですよ。

ちなみにエヴァと真紅狼の仮契約ではエヴァがマスターで真紅狼が従者です。

だって、真紅狼は“ネギま”の魔法使えませんか……。
なので、カードの力も使えません。だからマスターのエヴァのみです。

長くなりましたので、終わらせてもらいます。

司会というか進行役はこの大喰らいの牙と！

狼「……蒼騎 真紅狼と」

嫁「その嫁のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと」

鶴「……那波 千鶴がお送りしました。」

作者・嫁「さようなら」

狼・鶴「……………// //」

座談会（後書き）

マジで能力の件は困っているため、求めています。

そして、別にエロいネタが欲しいって言っていないんだよ？（チラ

アーティファクト

（真紅狼 side）

あのふざけたイベントが終わり、朝、朝食を喰っていた。

三日目は完全に自由行動の日であり、門限の時間さえ守っていけば何してもOKらしい。

「蒼騎先生」

「どうしました、新田先生？」

「昨日はお疲れ様です」

「いえいえ、ウチのバカ共がご迷惑をかけました」

「お礼と言っちゃなんですが、今日は『教師』の仕事をしなくていいですよ。存分に京都を楽しんで来てください」

「えっ?! いいんですか?」

「ええ、京都行ったこと無いんでしょう?」

「ええ、まあ」

「なら、これを機に見て回ってください」

「有難うございます、新田先生」

「いいえ」

「なにかありましたら、携帯に電話してください」

「分かりました」

そういつて新田先生は、教師の席に戻った。

そこにエヴァ達がやって来た。

「どうしたんだ、真紅狼?」

「いや、さっき新田先生から「今日は教師の仕事をせずに京都を楽しんで来てください」って言われたんだよね」

「じゃあ、私たちと一緒に回れますね」

と千鶴は嬉しそうに言う。

ちょうど、いいか。

「エヴァ、千鶴、朝食が終わったらちよつと来てくれ」

「「わかった（わかりました）」」

後ろの方ではネギ達も同じようなことを言っていたがまあいいか。

朝食終了！

「さて、二人に来てもらったのは、先日どこぞのバカ共二人が引き起こしたイベントのせいで仮契約を結んだ時にカードが出て来てなそれを二人に渡そうと思ってな」

「なるほど・・・」

「カードって何ですか？」

と千鶴は首を傾げる。

「簡単に言えば、俺と千鶴の契約の証しとでも言っておこうか。ちなみにカードには千鶴専用の武器、もしくは道具があるらしい。」

「私専用の？」

「出すときは“^{アテアット}来れ”って言えば道具か武器を取り出し、能力が使用できるぞ。試しにやってみたらどうだ？」

「え、でも、人の目が・・・」

「ああ、周りには人避けの結界を張ってあるから、大丈夫だぞ」
それを聞いて安心したのか、千鶴は渡されたカードを持って、“^{アデアット}来れ”と言った。

「これは・・・惑星か？」

千鶴の周りには惑星が浮かんでいた。

出ているのは『水星』、『金星』、『月』、『地球』、『火星』、『木星』、『土星』、『天王星』、『海王星』、『冥王星』の十種

類だった。

「どうやら、惑星^ゴごとに使える魔法と召喚獣が決まっているらしいな」

「どういことですか？」

「例えば、『火星』なら火系の魔法と火を使う召喚獣を使えるらしい」

「では、真紅狼さんみたいに魔法やその召喚獣というものを使えるんですか？」

「そうみたいだな。ただ、最初は一つずつしか使えないらしい。慣れてくれば、同時に二つや三つ操れるみたいだな。あと、何の制限なしに使える召喚獣があるんだが・・・、千鶴」

「なんですか？」

「お前を助けた召喚獣、覚えているか？」

「え？ ああ、はい覚えてますよ。確か“オーディン”でしたよね？」

「そうだ。そのオーディンが制限なしに使えるらしい」

「本当ですか？！」

「ああ、最初のうちはオーディンが基本戦術に成るみたいだ」

「分かりました。あと、これどうやって仕舞うんですか？」

「仕舞う時は“去れ^{アベアット}”だ。そうするとカードに戻る」

仕舞い方を教えてもらった千鶴は“去れ”と言い、カードを内ポケットに大事に仕舞った。

「次はエヴァなんだが・・・」

「うむ。どうした？」

「カードは出来たのだが、なんか能力が記されていない」

「なに？ 見せてみる」

とエヴァにカードを渡すとエヴァの立ち絵が載ってるだけで、下には何も記されていないというよりも『???』と書かれていた。

「・・・ふむ。どうやら、これは時間が経たなければ出てこないよ
うだな」

「そういうのってあり得るのか？」

「まず無いが・・・。何事にもイレギュラーはあるモノだ」

「そうか」

「じゃあ、カードについてはここまでにして回るんだろ？」

「あ、はい」

「場所は？」

「映画村などを・・・」

「んじゃ、行こうかね」

千鶴は行き先を伝えて結界を解いたとき、向こう側でもネギ達
がカードの事で話し合っていた。

＼真紅狼side out＼

＼エヴァside＼

着いて来てくれと言われたので何用だと思ったら、昨日の仮契約力
バクティオー
ードの事だった。

千鶴の方は結構大層な物だったが、私の方はなにやら言いづらい雰
囲気みたいだ。

「どうした？」

聞いてみると、能力のところが記されていないみたいだった。

原因を探ってみたけど、分からなかったが一つだけ分かったことが
あった。

「このカードは時間が経てば、記されるらしい」

「そんなカードあるのか？」

「まず無い・・・」

と言ったとき、真紅狼の顔が「しゅん」となっていた。

「・・・何事にもイレギュラーはある」

そう言った後、真紅狼は明るくなった。

「・・・可愛いなあ。・・・ハッ！」

イカンイカン、何を考えているんだ私は。

カードの話も終わりに近づいたとき、真紅狼が千鶴に今日回る場所を聞いて、行き先が映画村に決まった後、結界を解いた時向こう側で坊やたちもカードの話をやっていたが、どうでもいいか。

「エヴァ side out」

「千鶴 side」

呼ばれたときは何の話が分からなかったが、心当たりはあった。昨日のことだ。

「真紅狼さん、話って言うのは？」

「ほい」

そう言っただけで渡してきたのは私の立ち絵が載ってあったカードを渡された。

「これは？」

「パクティオ 仮契約カードだ」

「パクティオ・・・カード？」

「簡単に言えば、俺と千鶴が仮契約だが結びましたよっていう証だ」

「証ですか／＼／＼」

自然と顔が赤くなってしまった私。

「出すときは“アリアット来れ”だ」

「ア、アデアット・・・」

そう言っていると、光が一带を覆った後、私の周りに惑星が浮かんでいた。

「・・・ふむ。どうやら、惑星によって使える魔法と召喚獣があるらしい。最初は一つの惑星を極めることから始まりだな」
そう言った後仕舞い方を教えてもらい、いきなり今日の日程を聞いてきた。

「今日はどこに行くんだ？」

「え、えつと映画村に・・・」

「じゃあ、行くか」

「あ、はい」

結界を解いた時、向こう側でネギ先生たちが何やら騒いでいたが、どうでもいいわね。

（千鶴side out）

アーティファクト（後書き）

千鶴の能力がなんというか、ペルソナのアルカナとフェアリーティルのルーシイの能力を足して二で割った感じで、使えるのはFF6の魔法と召喚獣です。

惑星によって扱える召喚獣がありますが、それも後日書きます。

そして、最後にオーデインを操っている時点でライティングも見える・・・。

何だコレ？

そして、エヴァの方はゴメンナサイ。

思いつかなかったです。

いつまでも更新しないのもアレなので中途半端で申し訳ないです。
はやく考えないと・・・

映画村の攻防（前書き）

お待たせしました！

ようやく、休みが取れたモノで・・・という言い訳を少し。

映画村の攻防

（真紅狼 side）

ネギ達が今現在、関西呪術協会本山に向かっている最中、俺たちはシマネ村に来ていた。

そこには木乃香と刹那、早乙女や綾瀬が居た。

「よう、刹那。なんでそんなに息を切らしているんだ？」

「あ！ 真紅狼さん。……（実はお嬢様を狙って、刺客の者がちよつかいをかけてきたのでそれを防ぎつつ、ここまで来ました）」

「（……ヤベ、顔を覚えられているんだよね。共に行動するが、ちよつと離れていながら見守るって形でいいか？ 俺も現在進行形で“色々”と拙いんだ）」

そういう真紅狼の後ろを見ると、そこには正妻ともう一人の正妻（？）が居た。

「（……ご苦労様です。では、その形でお願いします）」

「（はいよ）」

そう小声でやり取りした後、自然と離れていく二人。

「真紅狼、何を話していたんだ？」

「呪術協会の刺客がこのシマネ村に潜んでいるから、気を付けてくれってさ」

「……大丈夫なんでしょうか？」

「連中も人前では襲えないから、安全だと思うが……何かしら小規模な戦闘は起きそうだな」

「…………ふむ」

「まあ、でも今は楽しんでおけよ。お前たちは絶対護ってやるよ」

「……………／／／／／」

二人は一気に顔を赤くする。

「まったく、真紅狼は…………／／／」

「ええ、本当にサラッと恥ずかしいことを言いますね／／／」

「そうかねえ？」

自分の言ったことに微塵も恥ずかしさを感じない真紅狼であった。

シマネ村に来たので、千鶴は衣装を借りていた。（原作で借りている衣装で頼む boy 作者）

エヴァはそのまま制服のまま、俺は能力で『奥州筆頭』のコスになっている。

え？ 刀？ ちゃんと真剣だよ。六本あるよ。

そんなわけか、俺が通ると横に居る人たちは、カメラでその姿を写真に収めていた。

歓声も上がっているし…………。

「ねえ、あの人の衣装カッコよくない！？」

「え、ダレダレ？ うわっ！ ……モデルの人かな？」

そんな声がちらほらと聞こえてくる

「…………この姿止めようかな」

「「ええ〜〜」」

「いや、そんな声出されても…………」

そこにさらにめんどくさい相手がやってきた。

ガラガラガラッ！

ガカーーーーーー！

刹那たちの前に止まったのは、馬車だった。
それに乗っていた人物が問題だった。

「どうも……神鳴流……じゃ、なかった。その洋館の貴婦人です」。

その剣士お二人さん。今日こそは借金のカタを支払っていただくべくお嬢様を貰いに来ました」。

「ん？ 二人？」

「はい」。先輩とそこのお兄さんです」。
「ちゃっかり、巻き込まれてるし。」

「そうはせん！ お嬢様は渡さんぞ！」

「そうですか、なら、仕方ありません……（ヒュッ）」

そう言つて、左手の手袋を投げてきた。

……………俺に。

投げつけられたので、思わず無意識のうちに受け取ってしまった。

「はい？」

「そこのお兄さん、お嬢様をかけて決闘です、30分後、場所はシマネ村正門横『日本橋』で待ってます。……では待ってますえ〜」

「え、あ、おい！！　ちよっと待て！！」

すでに時遅し、月詠は居なくなっていた。

「なんでこうなるんだ？」

なんとも言えない気持ちで気が滅入る真紅狼だった。

＼真紅狼 side out＼

＼刹那 side＼

ビュッ！

ビュッ！

パパパパシッ！

先程から、追手の攻撃が執拗にお嬢様を狙っている。
くそ、キリがない。

「どーしたん？　せつちゃん？」

このかお嬢様は息が上がりながら、訪ねてくる。

随分、走っていたら目の前にシマネ村が見えてきた。

「（ここなら……！！）お嬢様、失礼します！」

「ひゃ?!」

私はお嬢様を抱きかかえ、壁を乗り越えた。

「桜咲さん！」

「まってくださいーい！」

後ろから、早乙女さんと綾瀬さんが遅れながらもついてきたが、今はそれどころじゃないので先に失礼した。

「……壁を乗り越えた……」

「……CGです」

そうして中に入った私たちは衣装を借りて、身を潜めていたら真紅狼さん達がやってきた。そこで事の顛末を話したら、後ろで見護るという形で協力してもらえようになった直後だった。

向こう側から、突然馬車がやってきて、変装した月詠がこのかお嬢様を賭けて、勝負を申し込んできた。

手袋を投げる素振りを見せたので私にかと思ったら、なんと真紅狼さんに投げていたのであった。

「へ?」

素っ頓狂な声を上げていくうちに要件を伝えたのか去っていった。

「なんでこうなるんだ？」

「真紅狼さん！ 大丈夫ですか？！」

「あの流れだと渡すのは、刹那のはずなのになんで俺なんだよ……」
軽くorz状態になっていた。

「真紅狼はどうするのだ？」

エヴァンジェリンさんは問う。

「……ハア、行くしかないだろ」

「その状態でか？」

「別の姿でだ……」

そういつて後、着ている衣装（？）を脱ぎ、動きやすい格好で手には短刀を持っていた。

「刹那side out」

「真紅狼side」

指定された場所に向かうと、一人静かにと立っている月詠。

「わあ、お兄さん来てくれたんですか」

「誘われちまった以上断るのは失礼だろう？」

「かつこいいですね」

「代わりと言っちゃなんだが、後ろに居るコイツラには手を出すな」
「いいですよ、私の目的はこのかお嬢様を攫うのではなく、貴方と戦いたいですし」

「へえ、なら……」

そう言つて、右手に『七つ夜』を持ち、構えた。

「……存分に殺し合おう!!」

それが開戦の合図だった。

——閃鞘・七夜

キィィィン!

刃と刃がぶつかり合い、金属特有の音が一帯に鳴り響く。

「まさか、これを防がれるとは」

「二回もやられませんか」

うまくいくと思ったんだが、そう甘くは無いか……。
気持ちを入れ替えるか。

「吾^{われ}は面影糸を巣と張る蜘蛛。

しき斬殺空間へ。」

——ようこそ、この素晴ら

月詠は突如身構えた。

理由は簡単。俺の態度が豹変したからだ。

ダッ！

ヒュッ！

ガキイイイン！

ギギン！

ゴキユキ！！

『にとーれんげき ざんてつーせん』

『――斬刑に処す』

ガキキキキキ！

刃と刃が当たる度に散らす火花が舞台を盛り上げ、見ている観客たちはこの光景に魅入っていた。
そして、誰かが呟く。

「美しい」

そう呟いていた。

戦いとは縁のない人でさえ、この光景には見惚れていた。

それを余所に千鶴は自分が立っている世界を再度認識させられていた。

「これが私の……、真紅狼さん達が立っている世界」

「千鶴、この戦いを忘れるな。今立っている場所こそがお前の現実であり“日常”だ」

「……はい」

斬り合いだけではいまいちダメージが通らなくなったのか、真紅狼はスピードを上げた。

次第に姿が見えなくなるほどのスピードになり、見える時は攻撃をするか、受け止める時のみになってきた。

あまりの速さに月詠は一瞬真紅狼の姿を見失った。

『——蹴り碎く!』

「けや!」

「ぐっ!　しまっっ……」

そのままサマーソルトで追撃を決めて、空中で地面に向けて蹴り飛ばした。

態勢を立て直そうとする月詠。

立てなおす少し前に俺は空中から着地し、決めるつもりだった。

「……仕留めるか」

『——極彩と散れ』

月詠に飛びかかったとき、上空から制止声が聞こえた。

「聞こえてるか——！ その男！！」

「……………」

「今、鬼の矢がこの二人をピタリと狙っておる！！ お嬢様の身を案じるなら手を収めんかい！！」

「……………ちっ」

飛びかかるのを止めた俺は、短刀も刃を仕舞った。

「それでええ。さて、坊やお嬢様を・・・「ビュオオ！」わぷ！？」
城の屋根に乗っていた為、突風が吹き、このかといつの間にか来ていたネギも煽られ、その場から動いてしまった。
動いたことに反応した鬼は今まで止めていた、矢を放った。

「……………くそっ！」

俺は急いでこのかの元に行こうとしたとき、俺よりも早く動く奴が居た。

ドスッ！

刹那がこのかと矢の間に入り、身を挺してこのかを守った。

しかし、足場が不安定の為か踏みとどまることが出来ず、池掘りに落ちる刹那。

それに続き、このかも刹那の元に向かって落ちていく。

池にぶつかる瞬間、このかから強い光が発し気が付くと、塀の上に立っていた。

「おい、刹那にこのか！！ 大丈夫か！？」

「あ、狼兄い。ウチは大丈夫やえ」

「そうか……刹那は？」

「私も大丈夫です。肩の傷も癒えました」

「…このかの力か」

そこに飛んでくる未確認物体。

『刹那の姐さん、ここは人が多い！ どこか安心できる場所で落ち
あおうや！』

『分かりました』

『旦那も頼みますぜ』

『………ああ』

そこで話は止め、二人を呼び寄せる。

「千鶴、エヴァ！」

「なんだ、真紅狼？」

「なんですか、真紅狼さん？」

「移動するから、俺に捕まってる」

「刹那、案内を頼む」

「はい。お嬢様行きましょう。お嬢様のご実家へ！！ 神楽坂さん
達と合流します」

そうして、映画村を後にして、このかの実家に向かう事となった。
（真紅狼 side out）

映画村の攻防（後書き）

やっぱり、戦闘描写と戦闘音は難しい・・・。

あ、ちなみにどうでもいいんですが、真紅狼に抱きついてる図ですが、エヴァは首に手を回して、おんぶ状態に千鶴は前から抱きついてます。

その時の真紅狼は千鶴の胸の感触を楽しんでいます。

そして、ようやく5巻が終わった。

あと、どれだけ時間食うかな・・・

嵐の前・・・

〔真紅狼 side〕

開始直後悪いんだが……どうしてこうなった？

映画村を出てから、ネギ達の合流地点に行ったら朝倉達が付いて来ていたんだよ。

いつの間にか、刹那の荷物の中に朝倉が仕掛けたGPSでここまでついてきたらしい……

「あーもう！　なんでこう厄介事が増えるんだ？」

「それを私に聞かれても知らんぞ」

「……あはは、諦めるしかないのでは？」

「……ハア、コイツ等に非日常の恐怖を叩き込んだ方がいいかな」
「全くもって、迷惑な話である。」

「ちよっとした興味本位で片足を“こちら側”に突っ込まれて怪我しても、俺は責任を負いたくない。」

「特に早乙女、綾瀬、宮崎の内完全に遊び半分が二人もいる……。
やってらんねえ……」

「そんなことを考えているとこのかの実家の敷居を跨いでいた。」

「「「「「お帰りなさいませ、このかお嬢様——ッ「「「「」

「はい？」

「これはどういう事だ？」

「おい、刹那……どういう事だ、これは？」

「あ、はい。関西呪術協会の総本山であり、このかお嬢様のご実家

なんです」

「……マジ？」

「……はい」

「身内の不祥事に巻き込まれたってことでいいのか？」

「……すみません」

「ん？ あ、いいぞ。別に刹那が謝らなくても、ここの連中に言ってるだけだし。というか、俺やエヴァが淒く睨まれているんだけど……なんかやったかな、俺？」

「多分、エヴァンジェリンさんが吸血姫であり、真紅狼さんは不老不死だからじゃないですか？ 中には退魔を生業としている者もいらっやいますので……」

「なるほど……。悪いんだが、刹那。説明しといってくれない？ 俺がいったら戦闘になりそうだ」

「分かりました、ちよつと待っててください」

刹那は武器を構えている者達を説明していた、数分して説明が終わると武器を収め、頭を下げてきた。

「どうぞ、こちらに来てください……」

案内人についていくとそこには多分だが、このかの父親である人物がいた。

「真紅狼 side out」

「ネギ side」

建物の中に入ると立派な造りで豪華な部屋だった。

「はぁー、凄いねカモ君」

「本当だな、兄貴」

当たりを見渡していると女性の方が来て……

「まもなく長がいらっしゃいます、お待ちください」

「はい、どうもっ」

そのあと、朝倉さん達が僕たちの後ろに座った。

「ところで、ネギ先生はどうしてここに？」

「じ、実は修学旅行とは別に秘密任務を受けています……」

「ネギ、言っちゃっていいの？」

そのとき前から男性の声がした。

「……お待たせしました。ようこそ明日菜君、このかのクラスメイ
トのみなさん。そして担当のネギ先生」

「久しぶりやー、お父様!!」

「西の長がこのかさんのお父さんだったんだ——」

それぞれの反応を出す中、アスナさんは別の反応を出していた。

「し、洪くて素敵かも……」

「えっ……!?!」

「アンタの趣味がわからんわ!!」

あ、そうだ親書を渡さなきゃ!

「長さん、これを……」

「確かに承りました——任務御苦労!! ネギ・スプリングフィールド君!!」

「あ、ハイ!!」

「今日はここに泊っていつてください」

「え、でも、戻らないと……」

「大丈夫です、私が身代わりを立てておきましょう」

「……長、蒼騎様が来られました」

「分かりました、中に入れてください」

「……はい、失礼します」

「真紅狼さんにエヴァンジェリンさん!? しかも、那波さんまで!!」

「ようこそ、蒼騎 真紅狼君、那波千鶴さん。——お久しぶりです、エヴァンジェリン。呪いの方はどうしたんですか?」

エヴァンジェリンさんと長さんは知り合い?!

次から次へと驚愕な事実があつて頭が追い付けないよ……

「ネギ side out」

「真紅狼 side」

俺たちが入ろうとしたとき、綾瀬と早乙女はこの部屋から出ていった。

人払いが……、有難いね。

ふむ、あれがこのかの父親ね。

いきなりだが、西の長がエヴァの呪いの事を聞いてきた。

「呪いなら、そこに居る夫が解いてくれたぞ?」

「……エヴァンジェリン、貴女結婚したんですか?」

動するのに時間を食った。

重婚は無理だからな？と諭したら……「私には関係ありません！」なんて言ってきやがった。

いや、酔ってるとは言え、さらっと法律に喧嘩売らないでください。マジで。

そして今、俺はネギ、詠春と大浴場に居る。

「ふう、やれやれ、エライ目にあった」

「どうしたんですか？」

「まあ、ちよつとな……ところで、何故敵はこのかを狙ってた？」

「このかには遥か昔から血脈を代々受け継いでます。その魔力はサウザンドマスター……つまり、ネギ君のお父さんをも超える魔力の持ち主です」

「なるほど、つまりこのかを手に入れることが出来たら連中は負けることはないと思ってたんだな？」

「ええ、連中にはまだ隠し手があるようですし……」

「ソレの目星は？」

敵の情報を聞こうと思ったとき、ドアの向こう側から朝倉達の声が聞こえてきた。

「……で……すか……！」

「……って……な……よ」

明らかに綾瀬と朝倉の声だ。

「おや？ ご婦人たちが案内を間違えたようですね……」

「抜け道があるのか？」

「ええ、こちらに。ネギ君撤退しますよ！……」

その時、何故か神楽坂と刹那とぶつかった。……………ネギが。

「なんで居るんだ？ 刹那？」

「いや、私たちは真紅狼さん達よりも先に入っていましたが……………」

ガラッ……………

「……………あ」

「え？」

まあ、この後は皆さんも分かるような騒ぎがありましたよ。

風呂騒動後……………

涼んでいたら、突然屋敷から人の声が聞こえなくなっていた。

「エヴァ、コイツは……………」

「ああ、敵が侵入したな」

「ネギ達に任せるか」

「そうしよう」

そうしようと思った矢先にジジイから電話が来た。

P r r r r r r r……………

「……はい？」

『スマン！ 緊急事態じゃ！！』

「総本山が襲われた！ か？」

『なんで知つとるんじゃ！？』

「そこに居るからな」

『それなら、ネギ君達の援護を頼みたい！！』

「……分かった。じゃ、切るぞ」

プツッ・・・ツーツー

「結局やるのか？」

「マジでヤバくなったらな」

鋼糸を飛ばして、逐一状況を把握しているけど、今のところ大丈夫なので放置で。

「それよりも真紅狼、聞きたいことがある」

「……なんだ、改まって？」

「千鶴と結婚はするのk……」「聞こえてたのかよ！！」「…私を誰だと思っっている？」

「まあ、保留中。生半可な気持ちで返事したらいけないしな……」

「……私は構わないぞ？」

「お前が構わなくても、法律が許さないんだよ。しかも、那波はまだ中学二年だぞ？ 無理があり過ぎるだろ」

本当にどうしようかね？

「……あ、このか奪われた」

「出るしかないな」

「……平和ボケは嫌だね」

（真紅狼 side out）

嵐の前・・・（後書き）

原作6巻の三分の一ぐらいまで入れました。

次回は前半・後半で分けるつもりですがもしかしたら三部になるかもしれません。

決戦（前書き）

京都編がようやく終わった！

決戦

（真紅狼 side）

今、俺は千鶴を抱えながら、このかの元に向かっている。

目の前約1kmつてところに俺たちは降りた。

約1km先にはネギ、刹那、明日菜と敵二人とこのかが居た。

追い詰めたのかな。と思つたらこのかの魔力を使って手当たり次第に鬼を召喚した。

「まあ、アレぐらいならあの三人でも大丈夫だろ。それよりも……」

「あの白髪のカキか？」

「アレは本物だな。今のネギじゃ絶対に勝てないな、出し抜くことぐらいは出来るかもしれないが……」

そうするとネギの魔法が一時的の壁となっている、作戦でも練つて
るのかな。

風の勢いが次第に弱まっていき、途切れる瞬間、『雷の暴風』をぶ
つ放していた。

そのままネギは天草達を追い、刹那、明日菜はここに残るという選
択をしたらしい。

「まあ、妥当な選択だな」

「あの、助けなくていいんですか？」

「これも裏に関わるのであれば日常なんだ。なら、それを味わつて
もらうのも当り前だろう？」

「でも……」

「ま、ヤバくなったら出るさ」

明日菜達は善勝してるが、残りの鬼達は前までの鬼達とは動きや強さが全く別次元の強さだった。

さらには、明日菜が烏人間（？）っぽい奴に捕えられ、月詠まで登場し絶体絶命のところまで事態は急展開した。

（真紅狼 side out）

（刹那 side）

ネギ先生と仮契約して、このかお嬢様を頼みこんだ後、私と明日菜さんは鬼達に向かっていった。

ガキーン！

ザシュッ！

バシン…… シュウウウウウ

明日菜さんのアーティファクトは召喚された鬼達にとっては天敵である為、触れられるだけで送り還されるのでみるみる内に鬼達は減っていった。

『百烈』——『桜華斬』！！

「修学旅行終わったら剣道教えてよ、刹那さん」

「え？ い、いいですけど……、私もまだ未熟なんですけど……」
その時だった。

ネギ先生が向かった方から光の柱が見えたのが。

「——どうやら、クライアントの千草はんの計画はうまく行っているようですな」

「つ、月詠!？」

マ、マズイ!!

こんなときに……!!

使えない、あの力を!!

その時だった……、明日菜さんを掴んでいた烏族が狙撃されたのは。

「——この助っ人の仕事料はツケにしてあげるよ、刹那」

「あのデカイの本物アルかー? 強そうアルねー?」

登場したのは、龍宮と古菲だった。

刹那 side out

ネギ side

先程まで小太郎君と戦っていたら、長瀬さんが出てきてこのかさんの元に向かう様に促され、向かった。

あの白髪の少年を零距离『戒めの風矢』で拘束した。

効果は数十秒しかないがそれでも抜け出すのにはそれなりに手間が居る筈だ……

このかさんを取り戻そうとするが……

「っ、これは……!!」

目の前に居たのはとてつもなく大きな鬼だった。

「二面四手の巨軀の大鬼『リヨウメンスクナノカミ』千六百年前に討ち倒された飛驒の大鬼神や」
やるしかない、完全に出る前に……！！

「ラス・テル マ・スキル マギステル！！ 来れ雷精 風の精！
！！」

「なっ、何！？」

「雷を纏いて吹きすさべ 南洋の嵐——雷の暴風！！！」

ギューン……
パシィィン！！

スクナの体にぶつかった瞬間、弾かれてどうにもならなかった。
しかも、魔力も限界に近い。

「このかお嬢様の力でこいつを完全に制御可能な今！！ もう何も
コワイモンはありまへんえ！！」
後ろで「パキン」と音がした。
拘束が解けたようだった……

「（マズイマズイマズイ！！ な、何か手は……！？ そう
だパクティオカードの隠された力があつたか——！！）」

さらに白髪の少年から600m後ろで四人が立っていた。

「おい、聞いたか。エヴァ？ 怖いものはないってよ？」

「聞いたぞ、真紅狼。私達の前でも同じことが言えるか見物だな」

「マスター、準備が整いました」

「そんじゃま……………」

「ああ」

「はい」

「ええ」

「…………ブチのめす……………」

そこに登場したのは最高の助っ人だった。

「ネギ side out」

「真紅狼 side」

まず、邪魔者である白髪の少年を吹き飛ばすことにした。

「初めてだよ、僕の顔に拳を入れたのは……」

ガシッ！

「小僧、貴様は引っこんでろ……」

ドッカン!!

「え、あ!! 真紅狼さん?!」

「狼兄い!?!」

「ふむ、アレか……」

その時だった、制御されているスクナが天草の命令で腕の一つを振るってきた。

「（行けるか? 『マイティガード』、『ブレイブ』さらに!!!）
右腕に力を込める

「………… ウオオオオオオオオオ!!」

ブチブチブチ!!

右手の肘から骨——いや、角が出てきた。

そして、大鬼神の腕と色々と強化された戦鬼の腕がぶつかり合った。

ドッッガアアアン!!

「つぐあ!?!」

「スクナの腕を受け止めることには驚きましたけど、ただの人間が勝つん……………」

「オオオオオ……………ラアア!!」

押し切られそうになりそうだった俺は、全身の力を右手に込めてスクナの腕を弾き飛ばした。

腕を弾き飛ばされたことによって、スクナが一時的に態勢を崩した所を刹那がこのかを奪え返した。

「つつう!? 右腕がいったな、これは……………」

「当り前だ、そんな無茶をすればだれでもそうなる。最後の仕上げだ。——真紅狼、準備を怠るなよ?」

「了解した、キティ」

「その名で呼ぶな。……………茶々丸!!」

『了解』

ドンッ!

『この質量相手では10秒ぐらいしか持ちませんのでお急ぎを……………』
「よく見とけ、ぼーや!! 我々(・・)の力を!!」

リク・ラク ラ・ラック ライラック 契約に従い 我に従え 氷の女王!! 来れ とこしえのやみ! えいえんのひょうが!!」
その呪文を唱えるとスクナが巨大な氷塊によって動きを止められた。天草が「何者だ!？」と言うと我が嫁は高々と答えている。

……………メツチャテンション高めーな、酒が残ってるんじゃないだろっな?

「さあ真紅狼！ 最後の締めだ！！ この舞台に派手な閉幕^{フィナーレ}を頼むぞ！！」

派手について言われてもなあ…………。

後ろにいる千鶴の姿を見て、思いついた。

「千鶴」

「はい」

「見ておけ、いずれ召喚できるかもしれない召喚獣だ」

「分かりました」

「さあいくぜ！」

『幻獣の王よ！ 今ここに来れ！！ 汝の力を持って目の前の敵を悉く葬り去らん！！
来い、竜王 バハムート！！』

その後、空から一つの塊が落ちてきて、空で止まり大きな翼が開いた。

スクナの目の前に降りてきたのはスクナとタメを張れるほどの大きさの竜だった。

「……………なあっ！！？」

完全に翼を開いた時、空が割れた。

翼を完全に広げたバハムートは高速で上空に昇り、ある程度のところで止まり、翼から大気中にある魔力をかき集め、口元に高魔力の塊が出来ていた。

「喰らえ……………メガフレア！！！」

その集めに集めた高魔力弾をスクナに向けて放った。魔力球はスクナにぶつかった瞬間、周りのモノを一気に吹き飛ばしながら天まで届くほどの水柱が出来た。

「……………それではごきげんよう」

役目を終えたバハムートは消えていった。

「真紅狼、なんだアレは！！！」

「何って召喚獣ですが？」

「……………つまりあのレベルがまだあるのか？」

「まあ、あると言えばあるぞ？」

「……………もうなにも言えん」

「それよりもネギがキツそうだぞ？」

「お前の魔法で治してやらんのか？」

「それやったら、長も治さなきゃならんだろうが……………」

「ああ、つまり、嫌なんだな？」

「そつ言う事だ……………「チャプ」……………ん？くそっ！」

その時、後ろで水音がしたので振り向いた時には先程の白髪の少年

がエヴァを狙って撃ちだそうとしていた為、急いでエヴァを弾き飛ばした。

「エヴァ!!」

「な、なんだ、真紅狼!？」

『障壁突破 “石の槍”』

ド…グシャ!

「がぁぁぁ!!」

「真紅狼!!」

「真紅狼さん!!」

「このクソガキ!! 死ねや!! 『ダークフレア』!!」

黒い魔力が白髪の少年に向けて放たれた。

辺り一帯を爆発させながら、吹き飛ばしたが少年は実態ではなく幻影だった。

去ったのを確認した俺は石の槍を抜いた。

ぞりゅ…………

「あー、くそ!!」

「真紅狼、大丈夫か?!!」

「寝れば治るが、ちよつと意識が失うのは勘弁だから……………しょう

がない『ケアルガ』」

そう唱えると失った血までは治せないが肉体は元通りとなった。

「血が足りないからフラフラする」

ネギの方もこのかとパクティオーしたおかげで救えたらしい。

「スマン、千鶴。肩借りるわ」

「真紅狼、天草はどうするんだ？」

「……奴の居場所なら既に鋼系で後を追ってる、これから始末するさ」

そついい、左手を微かに動かした。

「……終わったよ」

「殺したのか？」

「『殺した』と言うよりかは『自分から死んでいった』だな」

「どういうことだ？」

「奴は走っていたからその先に鋼系の網を張った……あとは言わなくても分かるな？」

「……」

想像したのか顔が真っ青になる二人。

「さて、帰るか」

＼真紅狼 side out＼

無事、修学旅行も終わって波乱万丈な旅行だったが、まあそれなり

に楽しかったな。

麻帆良学園に帰ってきた後、ネギがエヴァに「弟子にしてください
！」と叫んで来た。

決戦（後書き）

「ブチのめす」の部分はペル。ナ4の総攻撃のカットインで、バハムートの召喚獣シーンは「クライ。ス・コ。」仕様でお願いします。初めて見た時、カッコいいと思った。

召喚のセリフが厨二病すぎる。ダメだこりゃ・・・

そして、天草さん死亡のお知らせ。

別に死んでも問題は無い……………ハズ

今後の更新ですが・・・

“ネギま”も二週間に一回になるかもしれません。

現在、“真恋姫”が好評の為、そちらが中心的に進めるためです、申し訳ありません。

ですが、ちゃんと更新はします。

弟子入り（前書き）

エロに対しての躊躇いが無くなるってのは異常だと思う。

真紅狼の“寝相”が発動！！

・・・ここまで言えば、わかるよね？（チラッ

弟子入り

うい、真紅狼だ。

今現在、ネギがウチに来て「ぼ、僕を弟子にしてください！」と頼み込んできた。

……俺に。

「……はぁ?!」

俺とエヴァは「何言ってるんだ、コイツは？」という表情になり、千鶴は無言で笑っている。

間違いなく怒ってるな。

そして、キティも先程までは至福の笑顔だったのがすこぶる機嫌が悪くなってきた。

……まあ、二人が先程まで至福の笑顔にはちょっとしたワケがある事情でしてね。

ええ、もう、やらかしたんですよ……アレを。

三時間前……

~~~~~回想中~~~~~

三時間前まで俺たちは寝ていたんだよ。

キティとの約束である添い寝をしていたんだけど、深夜に千鶴が来て「私も仲間に入れてください」と言ってきた、夜も遅かったので三人で寝たんだが……朝起きてみると……うん、予想は皆出来

てると思うけど、やっちゃったんだぜ!!

見事に着衣がイイ感じに乱れていたんだ。

「オウフ……………」

「真紅狼……………可愛い寝相を持つてるな／＼／＼（ニヤリ）」

「真紅狼さん……………激しすぎます／＼／／」

「待て千鶴！ その発言はアウトに近い!!」

「「どういうことが、教えるよな（くれますよね）」？」

「……………ハイ」

そこからは自分がやらかす寝相を説明すると、二人は獲物を見る目でこちらを見ていた。

「なるほど……………」

「つまり……………寝ている間に“間違い”が起きても、それはしょうがないことだと……………」

なんだろうか、一部だけ物凄く強調された気がする……………。

そして、同時に俺の貞操が物凄く危ない気がする……………。

一応、忠告しておこう。

「……………ワザと襲った状況を作るなよ？」

「「安心しろ（してください）、創らん（りません）から」（創らす要因は創るけど……………）」」

なんだろう、一瞬だけ腹黒い思考をキャッチした気がする。

そんな事があったので、二人は起きてから超がつくほどご機嫌だった。

~~~~~回想終了~~~~~

そして、再び今に戻る。

そういうわけで、二人の機嫌がすこぶる悪い。

「はあ~~~~、言っておくが俺はエヴァ達が使う魔法は一切使えん！だから、無理」

事実ですし、使えるといってもFFの魔法ぐらいだし。
というより、コイツがFFの魔法を使われるのは何かヤダ。

「ええ?! でも、京都で魔法や使い魔(?)を使えてたじゃないですか!!」

「ぶっちゃけ、メンドイ」

「ぶっちゃけた!?!」

だって、メンドイし.....弟子っぽい人なら既にいるし.....千鶴とか。

「——エヴァ、やってくれない?」

「なんで私がやらなきゃいかんだ?」

「お前なら、俺の事情知ってるだろ?」

「~~~~事情?」~~~~

千鶴、ネギ、明日菜、カモが口を揃えて言う。

「まあ、千鶴には追々話すよ。だが、今は無理だな——コイツ等が居るし」

そう言つて、目を向けた先はネギ達だった。

「ということだ。諦めろ」

「ええ……。なら、エヴァンジェリンさん、僕を弟子にしてください——」

次はエヴァかよ……。健気だね、キミは。

「ヤダ」

即答でした。

「即答！？ もうちょっと考えてくれてもいいじゃないですか——
——！！」

「真紅狼と同意見だ。面倒くさいし、お前の父にかけられた呪いのことを忘れたわけではないんだぞ——」

「でも、呪いは真紅狼さんが解いてくれたじゃないですか！」

「戯け！ 本来なら貴様等が解かなければならない呪いだぞ！？

それを真紅狼は代わりに肩代わりしてやっただけだ！ 甘えるのも大概にしろ——」

「ちよつと、エヴァちゃん——！ ネギがこんなに一生懸命に頼んでだから弟子入りなんか許可しなさいよ——！！」

今度は明日菜も入って大論争ですか。

俺と千鶴、茶々丸、チャチャゼ口は端によつてお茶を飲んだ。

チャチャゼロはどっから持ってきたか分からないがワインを飲んだ。

そして、目を離すと明日菜がハリセンで突っ込みを入れようとしたので、鋼糸で動きを止めた。

「あ、アレ!? う、動かない!？」

「話し合いにならないなら帰ってくれ、大丈夫そうに見えてこれでも傷に響くんだよ」

そう言つと、明日菜はハリセンをしまったのでこちらも鋼糸を収めたがネギは食い下がらなかった。
イラッと来たので口を出した。

「もういい加減にしてくれ、俺達は弟子なんか取らない! だから帰れ」

「……………なんならジジイに教われ」

「あの学^{ジジイ}園長、腕……………立つな。関東魔法教会の長やってるしな」

「そういうことだ。わかったな?」

「……………ハイ」

しよぼくれながら帰っていくネギ達だった。

「さて、明日なんだが千鶴、予定入ってるか?」

「……………いえ、入っていませんが?」

「明日から、“別荘”で魔法の練習だけどいいか?」

「……………あ、ハイ!」

「ということで、エヴァ借りるぞ?」

「私にも教えろ」

「あー、ハイハイ。なんなら召喚獣も出すか……………」

俺は明日の練習内容を考えることになった。

弟子入り（後書き）

最近、方針が分からない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0270u/>

ネギまと転生者

2011年11月18日05時30分発行